
mid Knight tale **気高き誇りその魂**

Rev crazy dream

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

midKnight tale 気高き誇りその魂

【Nコード】

N5157B

【作者名】

Rev crazy dream

【あらすじ】

あの日…全ての闘いは幕を閉じた。あの一夜の出来事から3ヶ月、いつも通り過ごす山本雅人の前に1人の少年が現れる。その夜から世界の運命は再び動き出す…ホラー！？コメディ！？ファンタジー！？midKnight taleシリーズ第2弾！なお前作『midKnight tale カノジヨは狼女！？』を先に読んでいただければより楽しめると思います…スミマセン（汗）

プロローグ L o s t N i g h t (前書き)

皆様本当にお久しぶりです(^-^)/
やっとの事でリクエストもありました第2弾を始める事が出来ま
した！

アイデア提供していただいた御剣様、天海沙月様、4 & 4 K様、吉
環様、麦様、光風様、そして今まで読んでくれた皆様のおかげで私
もここまで頑張れました。本当にありがとうございます！

これからもより一層精進しますのでどうかこれからも宜しく願
いますm() () m

プロローグ L o s t N i g h t

何故私はそこに向かうのか

見上げる空は朱に染まり

悲哀の雨を降りやどす

この手の中で失ったものは大きく

さまよう心は嘆きに染まり

胸に宿りし獣の心が目を覚ます

渴きを潤すが如く朱を求め

自らをも朱に染めながら

何故私はそこに向かうのか

それは

此処に君がないから

ブログ Lost Night (後書き)

久しぶりの投稿のため鈍っている作者にどうかご意見ご感想をお願いいたしますm(´`´)m

第1夜 非常事態は突然に！？ (前書き)

とりあえずはやっぱりこの2人！

雅人と杏樹の話です (、 、) b

第1夜 非常事態は突然に!?

声が…聞こえる

それは空虚な刻だった…

目の前に広がるは鮮血の水たまり。少年はいつもそこにいた…
すでに四肢には力が入らず辺りには夜闇の色…ただ黒の一角が支
配しようとしていた。

それに堕ちるのを拒まないかのように少年はもう動こうとはしな
かった。

絶望…まさにその言葉が辺りを包もうとしていた。

せまる夜気の中少年はソレに出会った…ソレは『光』だった。
少年はその『光』を知っていたような気がする…

少年はソレを離したくはなかった…

ずっと側にいてほしかった…

だけど…それは叶わなかった

「……朝……か」

曙の光が部屋のカーテンの隙間をぬって差し込む。爽やかな朝日は少年の姿を映し出す。

短くツンツンと立った髪、煌めく鋭利な刃物のように他の存在を拒むかのように砥がされた瞳。人々は皆、恐怖と警告の意味を込めて少年の事をこう呼ぶ…

狂人、核兵器、地上最強の……以下略

と呼ばれるほどの人物である。

少年が深くあくびをしようとしたほぼ同時、すぐ枕元に置かれた目覚まし時計（980円）の音が鳴り響く。

「……ああ……」

それを叩き壊すのがこの少年、山本^{やまもと} 雅人^{まこと}の毎日の習慣である。

「……黙ってりや……つせえなあっ！コラアツツ！」

人間離れたその烈火の如きスピードで放たれた雅人の裏拳は爆発音のような騒音防止条例違反基準を軽く超えた轟音と共に目覚まし時計を吹き飛ばす。

何度も言うようだがそれがこの山本雅人の毎日の習慣なのである。
・

「……つたく、人の眠りを妨げやがっ……スピ……」

の○太が如き神速で眠る雅人・・・その技はまさに神業である。

ぴしょん・・・

ぴしょん・・・

ぽた・・・ポタポタ・・・ポタタタタ！

「うるせえええええ！・・・んっだっつーんだよっ！雨漏りか！？
こんちくしょう！？何人たりとも俺の眠りをさまたげんじゃねええ
！」

不可解な音によって目を覚ました雅人は窓の外を眺める。カーテ
ン越しでも分かるぐらいに外は快が10個ぐらい付くほどの晴空だ
った。

「なんだってんだこんちくしょう・・・すっかり目が覚めちまった
っつの」

苛立ちを押さえられないまま起きあがろうと雅人は手探りで目覚
まし時計を探す。

・・・あつた！

この手のひらに当たったのは間違いないだろう、愛用（980円）
の目覚まし時計だろう。多少ピシピシパリン！ガシャンツ！バラバ
ラ！パリパリン！って音がしたって大丈夫！そう、時間を示す長い

針と短い針さえあれば……

「……………」

皆さんもわかったでしょう？この沈黙が……

はい、答えは？

「針がねええええー！」

その通り！勿論雅人の携帯の時計は午前8時なんかとつくに過ぎているようだった。

「って言ってる場合なんかねえよ！今日月曜日だつての！学校急が
」

体が……動かない

……いや厳密に言えば全く動かす事が出来なかった……まるで金縛りのように体を釘で固定されたような状況はまさに絶対絶命と言った言葉がよく似合っている。

「いや、マジ冗談じゃねえぞ……月曜日早々学校遅刻なんてしち
まったらー」

ぴしょん……

「って冷たあつ！何だつてんだよ・・・全・・・く・・・」

そして雅人は目撃してしまった・・・ソレに・・・

「・・・ふおおああああああ！」

言葉にならない魂の叫びと共にソイツは姿を現した・・・

そう・・・俺の上に乗っかって・・・

「あ・・・杏樹！お前・・・何やってんだ・・・っておわああ！なんで俺の上に乗っかって・・・杏樹さん？」

見事に寝ている。何故か杏樹は俺の布団上に掛け布団のような状態になって覆い被さって寝ているようだ・・・これはどうやってもあと一時間は起きないだろう。

しかしこれはどんな状況なんだ・・・

(んまあ・・・これはこれで、悪くは・・・)

「・・・んう~~~~・・・キャベツ~~~~そこにあるのはキャベツ~~~~?」

ダメだ駄目だだめたダメだ駄目だだめたヤバイやばいやバイヤバイ
やばいやバイ

前言撤回！緊急事態！エマーゼンシー！非常にマズいよ・・・何がマズいかつて？

「杏樹さん！杏樹さん！起きて起きて！お願い起きて下さいよ！ほらっ！そのヨダレが俺の顔に落ちて来そうだし！ほらもっつ！あとその距離約3.2センチだって！・・・冷たあっ！・・・ってまさか、さつきから当たってた冷たい水みたいなやつってお前の仕業かよっつ！」

「・・・んうゝ・・・そのまん丸な光沢を放つその緑の球体」

「ちょ・・・！杏樹！ほんとやめて目を覚まして！俺はキャベツなんかじゃないから！・・・って何故にお前口開けてんだよ！？」

.....

雅人の願いが通じたのか一時的に止まる杏樹の動き・・・だけど次の瞬間には、さも

「てへっ！忘れてました」みたいな素振りを寝ぼけてると思えないような煌びやかな動きで見せる・・・

そして最後に両手を合わせて深々と雅人に食事前の儀式のように素敵なお辞儀をしてみせる。

「いただきます！・・・」

何の迷いもなく思い切り開いた口を『雅人「キャベツ」に振るう戦慄のような光景・・・もはや雅人に逃れる術は無かった・・・

「いやああああああ・・・」

虚空に響き渡る雅人の叫び。

それが雅人の1日の始まりだった・・・

第1夜 非常事態は突然に！？ (後書き)

なんか書いてて気になったけど…ちゃんと自分の文で書けましたかね？

ブランクが長かったから少し鈍ったような…ビシバシ意見宜しくです！(´；；´)

第2夜 波瀾万丈危機一髪 (前書き)

皆様お久しぶりです(・・・)Revです。更新がかなり遅くなりました：読んでいてくれた方々に大変ご迷惑をかけましたm(

ー)m

なんと言いますか一言：頑張ります!!

第2夜 波瀾万丈危機一髪

「まったく朝からとんでもねえ恐怖に陥れやがって……少しはコッ
チの身にもなれってんだよ……」

「……ごめんなさい……ホントに私何にも覚えてなくて、それ
で……夢の中にそれはそれはジューシ な肉汁したたるキャベツ
が出てきてコレは食べなきゃいけないって食の神様の暗示がっ……
」！

「……ってすっかりしつかり覚えてんじゃねえかつ！つうか肉汁
したたるキャベツって普通に考えてキャベツじゃねえっての！」

「ごめんなさいごめんなさい……！」

「まったくよお、少しは俺の立場になれって話だよ……」

そういえばやっと思い出せた。昨日の夜は杏樹が漢文の教科書で
分からないところがあるから教えてもらいに来たんだった……

いや……杏樹も外国暮らしが長かったわけだしさ……分から
ないところもあるだろうから俺も漢文ぐらいならね、なんとか教え
れるかもしれないけどさ……なんだよ……

『ス〇ミー』って……

漢文でもねえじゃん……？

「でも、急に殴らなくなっただって……」

「あああんつつ！？」

「ごめんなさいごめんなさいっ！」

ってなわけでそのまま寝てしまったって事で今に至るんだが……

「あのまま放っておけば俺はお前に喰われてたかもしんないんだって」

俺は時計を見る。

「……いや、まじでさ、このままじゃ遅刻になるってのおおおお
お！……」

現在 8時21分。

「ホントヤバイぞ!?!?どうする?どうする?どうする?!?!マジで俺の皆勤賞がかかってんだよ!!?!?って杏樹?どした?」

「・・・雅人君?」

「なっ、なんだよ」

「雅人君って普段なんかは怖い感じなんだけど意外なところで真面目なんですな」

「・・・」

「雅人君?・・・私なんか変な事言っちゃいま」

ゴガアアン!!

「いったああーい!!グーは痛いですよ!!雅人君?!?」

「うっ・・・うるせえうるせえ!!別に俺は好きで怖がらせたりしてるわけじゃねえんだよ!!つつか俺は一回も学校休んだ事なんかないからな!!」

ああ俺もうなんかグデグデだな・・・わけ分かんない事言っちゃってるし第一俺ってこんな性格じゃなかっただろ・・・

「てか、とりあえず制服早く着て飯を・・・ってあああ!杏樹お前

いつの間に制服着ちゃってんだよ！」

「え？もう昨日から着てましたけど？」

どつりでよく見たら杏樹の制服がよだれだらけなわけだ・・・

「ははは。まったくバカなやつだなあ」

「あははっ、ホントですね！でも雅人君の服もよだれだらけですよ」
「？」

「ははは！そりやお前のだろうがよ！」

「あはは」

「ははは」

「遊びの時間は終わりだ。小僧・・・」

ダダンダダンダダンッ！！

ああ、なんかこの声聞き覚えあるよ・・・
もちろんよく覚えてるよ？

うん・・・なんか『人類が殺人ロボットと闘う』某映画のテーマ
ソングなんか流れるし・・・（もちろんそれは俺の心の中だが）

「やべえ、やつが・・・やつがもつっ！」

たらら〜たらら〜

たらら〜たらら〜

ダダンダンダンッ!

ダダンダンダ

『ダガアアアーン!』

そして入り口にあるドアはその轟音と共に弾け散る。そのドアのかけらは部屋一面に輝きを散らしまるで嵐の後のように一片のかけらも残さなかった・・・

「っだあああ!てめえ!またドア粉々にしやがってええええっつ!何度やらかせば気が済むんだ!このクソ姉ー!」

ん?・・・ノブ?これってドアノブ・・・?

なんで目の前に?

「・・・はぶあっ!!!?!?」

弾け飛ぶライジングッ!...ってバカか!?

普通の人間ならこの一撃で息の根止められてるわっ！

うん、普通の人間ならね・・・

あつてもとうとう意識が・・・この物語も主人公死んじゃったら
終わりだよな？

体とかあつたかくなってきたよ・・・あ、なんか花畑が見えてき
たし・・・あつたかいなあ。ずっとここにいれれば楽なんだろ
うけどそうはいかないだろうな・・・だって・・・あの方がいるん
ですもの・・・

ほら！ヤツパリいた・・・あの鬼神！日本刀なんて持つちゃって・

・

ん・・・？なんで日本刀を上に乗せてるんですか？まさかとは思
いますがそれを僕に振るわんとしているのでは？

馬鹿な事はお止めになつて・・・！！

ああ！ほらもう目が本気だしっ！待て待て待て待てっ！
チャキン！って日本刀がかなり研ぎすまされてますよ！

うわあ・・・！目が本気っ！やばいやバいつて・・・！！

まじで逃げ・・・

そして日本刀は容赦と慈悲のかけらも無く振り下ろされた。

「ああ？気持ちが悪く入ってねえなあ・・・あたしに謝罪する気あるのか？あん？」

さて、しびしび地獄の実況中継に戻りますかね・・・

こうして俺の眼前に光臨した鬼神はいつも俺をいたぶるわけなんですよ・・・全く、やられるこっちの身にもなれってんだ・・・この鉄人冷血バーサーカーがっ！

「なんか言っただか？若僧？」

はい。すみません・・・今お茶とお茶菓子をご用意させていただきました。ついでにこの鬼神・・・いやいや、間違えました。睨まないで！日本刀をこっちに向けしないで！今自己紹介もしてあげますんで！

はい！このお美しいお方は山本やまもと 幸さち

くしくも私の姉であり住ませていただいておりますアパートの管理人でもあります。

幸様は元レディースのヘッドとしてチーム『派徒羅朱』…和訳!! パト○ツシュに様々な神々しい伝説を残したという英雄的存在です。最近はその凶悪さに拍車をかけるように格闘家『デストロイ山本』としてデビューしまして・・・一撃KO勝利!!

・・・審判を・・・

と言うことで今は2ヶ月間の謹慎中の身です・・・

まあこのひねりにひねりまくった螺旋のような性格を取り除けば顔なんかは俺が言うのもなんだがさ、かなり綺麗なんだがな・・・

「なんか言つたかよ・・・」

「いえ？何も？」

やっぱり心の中を読みとるのが好きなようです。

「んでよあ？てめえらはいつまでここに居るわけなんだ？」

「左様で左様で。どんな御用もなんなりとご申しつけ・・・え〜と、今なんと？」

なんか嫌な言葉が聞こえた気がしたよ？よく耳を澄まして聞いてみるとしよう。

「てめえの耳は節穴かよ？だ〜からこんな平日の午前10時になんでまだここに居るのかを聞いてるんだよ」

うん・・・分かってたよ？そりゃさ毎日こんな目に遭ってりゃもう驚く事ないかと思つてたけどさ・・・

「俺の皆勤賞がああああ・・・」

「うるせえ。とにかく黙りやがれ」

チャキンッ！

「おっ・・・お姉様？」

「何？」

日本刀を俺の首筋に当てるその顔がまさにかの世紀末覇者に似て
ますよ？

・・・なぐんて事は死んでも言えませんね

「あの〜ちよつとお願いあるんですが」

「何？」

「学校に行かせてください」

「やだ」

.....

今だっ！チャンス・・・

ガシッ！

なんか鈍い音が・・・やっぱり襟を掴まれてるよ！学校行かせてくれよ！

「おい小僧・・・」

ハイ、何デシヨウカ？モウ何が起キテモ驚キマセンヨ？

「今月の家賃プラス部屋のドアの修理代プラス今月のおよそお前には似つかわしくないほどの美貌の持ち主であるお姉様への日頃の感謝代・・・もろもろ合わせて10万円で許しといてやるよ？」

ちよつと待て・・・それはいくらなんでもアナタ・・・悪徳家業ですか？

家賃は、まあ普通に考えて兄弟から奪うのは無しだろうけどもう慣れたから大丈夫だけどさ・・・残り2つは無くねえ？

アンタは、アンタ・・・

ピキュイ〜〜ンッ！（効果音）

俺の中で何かが弾けた・・・

「アンタって人はああああ！！」

脳内で何かが弾けた俺は気持ちは音速の勢いとテンションで右ス
トレートを放った。

勢い任せに振られた一撃は素人であれば当たっただらう。しかし
眼前に立ち尽くす者はソレとは全くの別物だった。

（・・・つく！流石に謹慎中とはいえ現役格闘家っただけはあるな
っ！）

だけどな・・・俺の狙いは違うんだよっ！

雅人は軸足をステップさせ後ろ側へと踏み込む。

（さっきの一撃なんか姉貴に当たるはずなんてない事はわかってさ
！俺の本当の狙いは・・・）

そして俺はダッシュの限りをしつくしたっ！

とにかく走ったよ！？息が切れるまでっ！だってあの化け物怖いもんっ！！

（とにかく今は逃げりゃあいいんだよ！あんな化け物なんかとマトモにやりやっつてられっかつての！！今は杏樹の手を引いて・・・）

「まっ雅人君！？前・・・」

「っとおゝ！！待て待て待て！杏樹！今は何も言わずに走りまくれ！」

ドンッ

ん？何この感触・・・あ、人にぶつかっっちゃったのかゝ！

「あ！すみません！前見てなくて・・・今必死に化け物から逃げて・・・きて・・・」

「誰が化け物だって・・・ああ？（怒）」

それはもう絵に表せないような大変なご立腹です。
うん、流石に死を覚悟した方がいいかと・・・

と言いますか……

「何！？その瞬間移ど

！！」

ゴキヤブシャめりビリバリヤリヤびしゅんパリぱごゴリユン

さっすがだ〜！俺が言い切るより拳が飛んでくる方が早いや〜！

「さつてと〜、今日は生ゴミの日だったかな〜？それとも不燃物の日だったかな〜？」

そんな指を「ぎぎぎき鳴らしながら近づかないでください……しかも笑顔で

「……」

なんか静かになりました。一体なんでしょう……

「あ〜もう行ってもいいよ……飽きたから」

「これは一体・・・神の救いでしょうか？」

「まああれですね・・・チャンスは逃してはいけないかと

「行ってきまーす」

「今日の日が普通に終わりますようにっ」と・・・

「おーい。サンドバック君！20万忘れるなよ」

「なるほど・・・俺はサンドバックでストレス解消マシンだと！」

「・・・てか請求額増えてるわっ！！」

「悲しい1日の始まりです」

第2夜 波瀾万丈危機一髪（後書き）

？ グダグダでしたね？

作 はい。グダグダでした…すみません…

？ 頑張れよ

作 はい（泣）応援よろしくです（；；）

第3夜 キミに誓う (前書き)

お久しぶりです。激遅筆作家…いや作家と言っていいやら(汗) R
e v です。

おかげさまでなんとか重病から脱出する事もできこうしてまた書く
事も出来ました。なにせ久しぶりですから至らないところなどあり
ましたらお気軽にご意見、ご感想をください m () m

それではどうぞ () () /

第3夜 キミに誓う

「・・・」

「大丈夫だよ？雅人君・・・きつとお姉さんも嫌な事があつたからちよつと雅人君に当たつちやつただけだと思つよ？」

「うん・・・そつか、そうだよな。きつと帰つたらテーブルにケーキと紅茶が置かれて【ごめんね】ってメッセージカードとか置かれてるよな・・・」

「まっ雅人君、気にしないで！学校行つてみんなと遊べば」

「そ〜だよな〜じゃなかつたらあんなピーー！やピーー！やピーー！！な事なんて弟なんかにしないもんな〜」

思い出せば思い出すだけ鬱になるよ・・・
なんだろうな、きつと俺は不幸な運命になるために生まれてきたんだだろうな・・・

「あぁ〜考えるだけでも苦しくなってくる・・・って杏樹？」

「雅人君・・・」

ナンデスカ？ソノ切ナソウナ瞳ハ・・・

「ごめんね・・・いつも私が色々助けられてるのに・・・雅人が苦しんでるのに私、何も出来なくて・・・」

「ばっ、バカ！お前にそんな心配されなくても大丈夫だっての・・・」

「でも、でも・・・」

とりあえず杏樹に背を向けて一呼吸、と・・・

あゝ あっー！！もう可愛すぎたな、こんちくしょう・・・一体どうしろってんだよ、この状況は・・・

そうかつ！そうだな！あれしかないだろ。

「杏樹・・・」

とりあえず俺は杏樹を見つめた。杏樹のその瞳は今もウルウルして今にも泣き出しそうなくらいでいつにもまして可愛いなコンチクシヨウ！

「俺は大丈夫だから・・・そんな顔すんなって。だから・・・」

ここだああああ！！このタイミングしかねえ！！

食らえ！奥義抱きしめ・・・

スカッ。

あれ・・・？

「雅人君雅人君！！今日スーパーの激安デーだよ！？ほら見て？キヤベツが50円だって！！」

うん・・・分かった分かった。そうなんだ。俺の人生こんなもんなんだよな・・・

雅人は我ながら自分の生まれの不幸を呪った。

・・・一体ここまでしてくれた代価はどうしろと？もうギツタンバツタンですね。

大変大変！この変な気持ち（本能という名の野獣）を抑えるためにかなり必死なものです！

（落ち着け・・・落ち着くんだ、俺っ・・・！！）

右へローリング！
左へローリング！
ひたすらローリングローリングローリン

「ッつヴオつおえつッ……！？」

ピンピローンピロリロリーン

大変お見苦しい状態になっております。チャンネルはそのままです。しばらくお待ちください……

「シクシクシク……」

「ねえ、雅人君……」

「杏樹……しばらく放っておいてくれ……」

何があったの？なんて野暮な質問なんかはこの際聞かんといてください。

「く、くそ・・・俺はこんなところで踏みとどまるわけにはいかないんだ・・・なのに立てないんだよコンチクショウ!!」

『立て・・・』

「こ、この声はまさか!？」

今俺の目の前にはかの有名な片目に眼帯、お腹には腹巻きなるものが巻かれているボクシングの（以下略）が立っている。

「まさかオヤツサン!オヤツサンなのか!？」

『おめえさんはまだ頑張れるはずだぜ・・・?立て!立つんだ!ジ
○ー!!』

オヤツサン・・・なんか最後の最後で間違ってる気がしたけどまあ気にしないでおう・・・

「うおるああああ!!」

激しい痛みが中枢から末端へと全身を巡り走るなか、渾身の力を振り絞り雅人は立ち上がった。

落ち着いたその顔立ちには悠々しささえ漂っている。

「うおっしやああ!!完全回復!オヤツサンありがとおお!準備は整ったぜ!行くぞ杏樹・・・あ?」

ふと 刹那に疑問を抱く。

杏樹の姿が見えない・・・雅人は辺りを見回す。

すでに杏樹がそこにいたという痕跡や気配すらも残っていなかった。

「・・・どこに?」

雅人の疑問はすぐに晴れた。

彼女は最初からそこにいた。

「・・・っ!?!?」

杏樹はちょうど雅人の真後ろにぴったりとつくようにしていた。

雅人はその姿に驚きよりもまず『疑問』をすぐに覚える

いつから・・・

「いつから・・・そこにいたんだ？」

杏樹は、いや・・・ソレは疑問とは違う答えで雅人へ答えた。

「刻が」

「来る・・・」

刹那、晴れ渡っていた青空は雲に覆われすぐに太陽は姿を隠す。そして辺りにポツポツという音が聞こえてきた時には生ぬるい殺意の風と共に静寂の世界が支配していた。

雅人は反射的に構えた。そこに感じる異質というものを体で感じ取り、そしてそれを行動に移したまでの事だった。

それは選択肢としては正しくはあった。

だが結果はまくまで儚い

四肢全てが一瞬にして力を失うような感覚、それが雅人を覆いつくし『闇』へと引きずり込む。

「なん・・・だよ！！待てっの。あん　じゅ」

それはまるであの日と一緒だった。

「杏樹・・・！！」

雅人は叫ぶ

「・・・っうあ!？」

意識が戻る　同時に額に浮かぶ尋常じゃない冷や汗と共に本当の生きた心地を味わった。
もしかしたら自分は今・・・死んでしまったのではないかと疑問を投げかけるほどだった。

「なんだよ・・・今は・・・」

夢、幻影、そう表したほうが実際感覚としては近いものだった。一瞬のようでそれが永劫に続くようなたちの悪い『白昼夢』。そんなものだったと思う。

「・・・杏樹、杏樹は!？」

杏樹はさっきと同じ場面をまるでビデオが巻き戻しをしたかのような、全く同じ姿を作り上げるようにして雅人の目の前に立っている。

しかしさっきの様子と明らかに今の杏樹の様子は違うように見える。
・
・

そこには神秘的なものさえ放っていた。

虚ろな瞳、まるで抜け殻のように立ちすくむその姿はいつもの杏樹ではない事は分かっていた・・・

それは異質、

それは

「杏樹　っ!？」

俺は迷わず杏樹の肩を掴んだ。突発的な行動とはいえ雅人の本能と
いうものがそうする事を望んでいたからだ。

「・・・う、うん」

「また、なのか？」

雅人は思う

「そうかも・・・ゴメンね」

「バカ言っつてんなよ。お前・・・そんな体なんだから無理すんなよ」

雅人はふと 杏樹のソレを捉えた。

黒き刻印

雅人は理解していた

俺達はそれをめぐり闘った。
それは世界をかけた闘い・・・

そつだ。この話はそう・・・あの日、あの夜から始まつたんだ。

俺はあの日…彼女と出会つた。

「あの…！！よかつたら今日一緒にかえりませんか！？」

それが彼女が最初に言つた言葉だつた。
深く真つ直ぐとした銀色に輝く瞳、淡く濡れたように光るその栗色の髪をしたその姿は彼女が異質な存在である事を物語つていた。

彼女は狼女だつた。

それがわかつたのはあの日、俺が他愛もない事で彼女にキレてしまつた事だつた。

「・・・ふざけんなよ・・・」

他愛もないこと、そう言って割り切れればかたがつく事だった。だ
ど……

崩れていく日常への焦燥。

それら全てを吐き出した時、彼女は泣いていた……

そうしてしまえば彼女を失う事は十分分かっていた。ただ、俺は何
かに疲れてしまっていたのだと思う。

俺は彼女を失った

目の前に現れた現実には有り得ない存在に俺は『死』を予感した。

震える膝、虚ろになっていく意識。

そして『恐怖』

眼前に広がる漆黒の翼

獲物を補食せんとする鋭利な牙

それらは吸血鬼と字なすより他ならなかった。

近づく死への恐怖・・・それを打ち消したのは突然目の前に現れたその存在だった。
全身を体毛に覆われた辺りに放つ獣臭と殺意の塊。

(はは・・・吸血鬼の次は狼男かよ・・・シヤレになんねえ)

ハリウッドのモンスター映画の名場面を何度も見せつけられるようなそんな感覚に雅人は笑いすらこみ上げてくる。それはまるで、童話に出て来るような…そう『狼男』そのもの

だけどそれは紛れもなく彼女だった。

そして運命は刻を刻んでいく。

俺は彼女の過去を聞いた。

それは今日のこの日までただの日常を過ごしてきた俺には到底信じ

られるようなものではなく、それはそれほど常識を外れていた。

そして

刻印

「この刻印を持つてる者は力を解放するとき世界を滅ぼす……」

彼女はそう言った……

一族を失い……家族を失い……それでも自分を押し殺しその運命を今日まで背負ってきた。

彼女は俺と一緒にだった。

だから俺は……

「大丈夫だから・・・」

あの日決意した。

(どんな事になったって・・・)

あの時、あの闘いで俺は自分を知った。

(俺は杏樹を支える・・・)

俺はヴァンパイアだったと。

(俺は)

関係無い・・・

拳を強く握り締める。

あの時何があっても彼女を・・・杏樹を守ると誓った。

(杏樹は俺が守る。)

そう決めた。

ここは雅人があの日ヴァンパイアと対峙した場所・・・高台にあるこの公園は眼下の遙か彼方に広がる街並みを一望出来るそれなりなスポットとしても有名な場所である。

そこに少女は立っていた。

「あの娘・・・」

少し来るのが早かったと思っけど挨拶ぐらいなら・・・

そう思っただけなのに・・・

何よ・・・何よ何よ何よ!!!

「何なのよおお!!あの女はあああああ!!!!よりによってお兄ちゃん』の背中に・・・背中におんぶ・・・おん・・・ぶ?」

一瞬、口調が極端に変わる。それと同時に少女の頭からはまるで蒸

気機関車のように高々とスチームが吹き上がりその場に勢いよく倒れ込む。

そして約3秒ほど動かなかった少女の拳に再び力が入る。

「ぶ・・・ふふふ。ふふふふ!!!!」

少女はゆらり、とゾンビが如く立ち上がる。

「ふふふ!!!!あの娘やるじゃない。アタシだってそんな大胆な事やった事ないのに・・・」

そして不意に拳に力が入る。

「あの娘・・・許せない!!!!」

少女は歩みを始める・・・そして同時にさんさんと降り注がれる日射を放つ太陽の下、ソレを解き放つ。

「待っててね!!」お兄ちゃん」・・・」

少女は空へと翔んだ。怪しき、そして優美なる漆黒の翼を構え

そして妖しく笑う・・・

第3夜 キミに誓う (後書き)

これからも頑張りますのでどうかおつきあいください)・・・(

第4夜 泣きたい時は空を見て (前書き)

なんていうかタイトルのままで・・・

第4夜 泣きたい時は空を見て

「・・・やつと着いた」

思えば苦節40分、杏樹のやつを背中に抱えここまでやって来た俺の足腰は既に限界に達し、この体を突き動かしていたのは最早根性だけだった。

やっとこの苦しみから解放されるかと思っていた・・・

なのになんだ・・・？この神様のイタズラとしか言いようのない状況は。

『夫婦揃っての登校の気分はどうですか!?!』

『おんぶして登校とはどういった試行で?』

『普段は大人しい子だったんですけど...』

『いつか絶対やると思ったんですよ』

な・に・が・だ・よ!!

もう最後のほうとか音声変えちゃってるし・・・俺なんか罪を犯し

ましたか？

とりあえず保健室に行きたいからこれはどいてもらうしかねえな・
・と。

鋭い眼光が辺りを睨みつける。それだけでそこは一瞬にして騒然と
化しもはや口を開こうとするものは誰一人としていなくなった。

(って俺今どんだけ怖い顔してんだ？)

それを語るうとする者は誰もいない・・・

「っと、やっと着いたわ・・・」

とりあえずここに着くまでに来る敵来る敵を蹴散らしてきたわけだ
が、何？この張り紙・・・

【私用のため侵入禁止】

バリバリバリバリ

まあこんな事するやつは1人しかいないわな〜っと。

そう言っただけなんの迷いもなく張り紙をむしり取る雅人

「入んぞ〜百樹!!」

ドアを開ける雅人。そこには見慣れた男がいた。

「ああ〜オレオレ詐欺ならもう十分足りてますってば〜。あとおいから払えばいいんですか……?」

訂正、しっかり寝ていやがる……

「ええ……あと50万ペソ?困ったなあ……今月は杏樹ちゃんに貢ぐためのお金がームギユ」

顔面に一蹴り浴びせてみる。

「……っだらああああ!!俺の快速な安眠を妨げるのはどこのどいつームギユ」

まだ起き足りないと思うからもう一度蹴ってみる。

「起きた?」

「はい……」

それが学園の最終『変』器たる葛城百樹のさわやかな朝だった。

コイツの名前はえ〜と・・・葛城・・・いやめんどくさいから説明しねえや。

「うおおおおい！！雅人〜そりやないだろ〜。俺とお前の仲じゃないかよ〜」

誰が俺とお前の仲だつて・・・？

「まあよかよか！！俺が自ら説明バブリツユツ！！」

一閃、雅人が捉えたそいつの下顎骨に放つ右フックがまるで絵に描いたお手本のようにヒットする。

「よかよかじゃねえだろうが。百樹」

雅人は百樹と呼んだ少年の元へ向かう。

「っと、ほら早く起きろつての・・・あらっ、」

勇者1 『ダメだ。反応がない・・・死んでいるようだ』

「百樹そりゃ！！！！」

「ぐしゃぐりゅぐりゅ！！」

「っばあああ！！・・・はあ、はあ、はあ、はふう」

「最後の桃色のような吐息は何だオイ。やっと起きやがってこの野郎」

「何だじゃないでしょうがこんちくしょう！！人を生死の狭間に追い込んで何その扱い！！」

「お前だからさ。てかあれ？自己紹介はいいのか？」

「知るかつ・・・はい」

そう言つて百樹は俺に背を向け1つ、深呼吸をした。

その背中からは男らしさ・・・は微塵も感じられなかったが恐ろしいほどのヘタレオーラがとことん放たれている。

そして

「俺の名前は葛城百樹。この学園の最強アイドルだああ！！そして・て」杏樹ちゃんファンクラブ』の会員NO1会長だこんちくし

よう！！さあ！君は百樹王の前に立っているのだよ。ひれ伏したまへ・・・雅バツファツ！！」

「うん。うっさいから黙っててくれ」

俺が繰り出した一撃に百樹は期待通りにひれ伏した。

そうやってるうちにめんどくさいから俺がコイツの事を説明しちゃおうと思う。

コイツはえくと・・・百樹でいいや。なんていうか一応幼なじみみたいな存在だ。

なんでかって言うと姉貴がやっているレディースのメンバーの弟つてのがこいつであり、それがキツカケになってよく一緒に集会やら何やらにパシリとして駆り出されたもんだ。

そうやってるうちに月日つてのは時に残酷なものだ・・・小学校、中学校までこいつと一緒に・・・まあそれは別にいいんだぞ！？問題としては拳げ句の果てにこの仕打ちはなんだ！？こんなヤツと高校まで一緒になっちまってよ・・・

「と言うわけなのさ！！チャンチャン」

「いや、お前が仕切るなし」

はい、グサツと

「ああああ〜目があああ〜目があああ〜!?!」

ああ・・・ほんとウザってえ。

いい加減杏樹をベッドに寝かせて俺も本なんか読みながらソファで寝て授業をサボってエンジョイしたいんだが・・・

「雅人・・・」

「あ?なんだよ」

突然そう震えた声で告げた百樹は指を震わせながら俺を指す。いや正確には俺の背中へ向けてと言ったところだろう。

「お前・・・あ、あ、あ」

なんかあらかた予想がつくんだが・・・

「お前、杏樹ちゃんに何をしたああああ!!!」

ほらきた・・・

「何がって、別に」

「うおおおおお!この『杏樹ちゃんファンクラブ』会員NO1兼会長のこの俺をさしおいてええええ・・・シクシクシクシク」

ああ、ほんとにウザりたい・・・泣きたくなってくるわ・・・

「いや何だ、その・・・杏樹が具合悪くなったから俺がここまで送ろうとしただけなんだがな」

「ほう・・・」

百樹は雅人の言葉を嘲り、そして不敵に笑い構える。

「どうやら俺達は生まれる前から戦う運命を背負っているらしい・・・この胸の7つの痣がうずくからなあああ！よし、行くぞ！！雅人
おおおおお！！！！」

何か変な事言っちゃってるし、いいよもう・・・パ○ラツシュ、僕
もうコイツに疲れたよ・・・

「うおおりゃああ！！雅人！！覚悟！！」

百樹の拳は振るわれた

ああもう殺っちまおう。

きーんこーんかーんこーん
きーんこーんかーんこーん

2人の拳が止まる

先ほどの百樹のうるささから一変、しばらくその場を静寂が支配する。

「なあ雅人……」

その静寂を終わらせるように口を開いたのは百樹だった。

「ああ、言いたい事はよくわかる……で、今日って何曜日だったっけか……？」

それに応えるように雅人も口を開く。まるで百樹が言わんとする理解しているかのように いや、理解していたのだ。

それを克明に記すように2人の顔一面には異常なまでの汗が滲んでいた。

「よし、いいか？」

「こっちはもう準備出来てるぜ」

『じゃあ行くか』

『せーのっ！』

2人で声を揃え一瞬である物に視線を合わす。カレンダーにである・
・

13日の金曜日。

そう、13日の金曜日である。

2人はそれが意味するモノを十分に承知していた。

「なあ百樹？」

「ああ・・・」

先ほどまでの百樹の怒りに震えた顔や雅人の呆れた顔が一瞬にして
変な笑顔みたいになってほころぶ。ついでに変な汗で顔中滝のよう
である。

ダッシュダッシュダッシュ！！ひたすらに

2人は駆け出した

遙かなる地、『体育館』へ

「つぶはああ！！どんだけ俺ら忘れてたんだよ！今日は『13日の金曜日』だったのによ！」

「はあああ・・・もう諦めようぜえ、雅人おお。金曜日の朝会ぐら
いどつって事無いじゃんかあ」

ここ、県立『橘ヶ谷学園』は規則に厳しく毎週のように金曜日は朝会を開く取り組みになっておりそれが規律を整えているようなものだった。普通に考えれば大したものではないのだが

例外が存在する。この魔の『13日の金曜日』だけは・・・

「つか野郎！死にたいのかお前、今日は・・・！！アイツが来るんだぞ！？あの筋肉の渦に取り込まれたいのか！？俺は勘弁だがな！！」

その言葉を機に諦めかけていた百樹の青ざめた顔は、その場面を想像してしまったのかさらに血の気が無くなったかのように青ざめた。そして人が変わってしまったかのように100メートルを5秒ぐらいで走れるんじゃないだろうかと思うようなスピードで駆けていく。

「やれば出来んじゃないかよ・・・とは言っても俺もそろそろ体力が・・・」

スピードが落ちていく。体に力が入らない・・・目が霞む。

そこでふと目に留まったのは白い壁だった。いや、それは3メートルはあるだろうと思われる巨大な白い扉だった

「つい・・・た。体育館・・・」

雅人はそれにもたれかかるようにして脱力した。中はまだ静かなようだから朝会はまだ始まってはいないだろう、その考えだけが雅人の体を突き動かした。

ドアの側には息もさながらな果てただの屍がヒュ〜ヒュ〜言っているがそこは軽くスルーしてしまおう・・・

ドアに手を掛ける

ドアは意外にもあっさりと開いた。力を入れるまでもなくフワツと開いたドアの先に俺はそのまま力無く倒れる。

そこにはウン、やっぱりいたよ。

「ふん、ふん、やっぱり貴様等遅れてきたなあ・・・山本雅人！！その他の一名！！」

体育館に響き渡るその声の主はこの学園の名物体育教師、みやほ宮穂 たけし武 である。31歳、現在校内暑苦しいランキングダントツの・・・

「何を1人でごによごによ言っておるか。貴様等」

「いや、先生・・・1人なのに貴様等って」

「余計な事は口にするんじゃない！！さつさと立てい！貴様等の根性叩きのめしてやるわ！」

ああ〜ほんとアツクルシイ・・・ていうか叩きのめしたらダメだろ。基本的に

「そうれ！来い！幻の7日間トレーニング、2枚目のディスクウウ
！！！」

ほら、見てくれよ杏樹。これが行き過ぎた熱血って言うんだよ。
もうマイクでしゃべってる校長より声量大きくてなんかうっとおし
いや・・・

「ふおおおお！！腹直筋に、腹直筋に効いてきたあああ！！！」

こうしてあえなく校長の話は、宮穂武の汗臭い筋力トレーニングで
終わっていった・・・

その日、宮穂武は伝説になった。

「なあ雅人・・・？」

「なんだよ」

あっさりと返事を返した俺に対して百樹は泣きながら応える。

「俺らって人間扱いされてるのかな・・・」

「まあ誰が見たってこれは農業用の牛馬とかそんな感じだろうな」

改めて雅人は2人が今課せられてる状況を確認する。

俺らは見えての通り生徒達が座る椅子のように通称、空気椅子の形で体を固定している。勿論背もたれなど無しだ。それもこうしてはや20セット目だ。

流石に他のクラスの生徒からの視線が痛い・・・こら、そこ指さして『たかし！見ちゃいけません！』とか言っつな。

という感じで視線が痛々しい。

「んん〜どうだ〜？山本雅人他一名。乳酸がいい具合にたまってきたらどう？」

いや、あつついから寄ってくんない！この背油製造機！！

「ほう・・・まだ余裕があるとな！？よかろう・・・膝の上に20キロの重り追加じゃあああ！！！」

フツンッ・・・

(ふっ・・・ざけんなよ。この、俺らを毎回目の敵にしやがって・・・)

宮穂武のむちゃくちゃな言い分にとつとつ腹が立ってしまった。ついでになんか切れちゃったし・・・

つつわけでもう我慢の限界だと

今まで貯まりまくった恨みを何十倍にも濃くした怨念の固まりを俺はこの右の拳に込める。

目指すは一直線に宮穂武の顔面だコノヤロウ!!

「さあ〜てどう鍛え直してやろうかあ。とりあえずこの50キロのダンベルで・・・ふおおおお!!」

(ならこつちはその50キロのダンベルを迷わずてめえの顔にぶつけてやんよっ!!)

ピクツと額の血管がさらに怒りを増した事を告げる。そしてそれが限界を超える合図だったと

「ちよりやああああ!!いい加減・・・死にくされいい!!」

ブオツ!!と風を切るようにして雅人の拳は速度を増し憎しみを持って宮穂武へと襲いかかる。

カンッ！！

それは一瞬だった。雅人の拳が到達するよりも早く、それは体育館に響き渡りそこにいる全ての者を圧倒する。まさに雷鳴の如く衝撃と共に現れた存在

それが『橘ヶ谷学園』生徒会長、篠崎^{しのざき}明^{めい}である。

容姿端麗、文武両道、それらの言葉が一つに纏められた人物、それがこの篠崎明と言っても過言ではない。

それを絶対的なものと証明するように彼女の絶倫的な容姿は生徒たちの視線を常に集め、プラス成績はと言うと入学した直後全国模試で矢継ぎ早にトップ5へと名を連ねる実力、それに加え空手初段、合気道3段それに・・・ええい、話せば果てしない。

それゆえに学園の生徒たちからは男女問わず憧れの目は絶えないのである

「君たち」

篠崎が一度口を開けば大地が震え上がる。

生徒たちは歓喜と絶頂の悲鳴を篠崎会長へと浴びせていく。

「おはよう」

一言、たったその一言を満面の笑顔と共に口にしながらだけで気絶者が続出するほどの、ある意味そんな実力の持ち主である。

「あ、ほらほら。どんどん人が満たされた笑顔のままドミノ倒しみたたく倒れていくぞ？面白いぜ？見るよ、百樹」

「雅人……」

「ん……何？」

「俺、会長に踏まれてみたいわ……」

「よし、俺の蹴りでいいなら構わず叩き込んでやるぞ？」

「お願いし……いや止めておく」

とりあえず百樹の戯れ言なんかは放っておこう。大事な今は今この状態なんだ。

え？なんでかって？そりゃさ・・・

「さて、今はこの私篠崎の生徒会長挨拶の時間というわけだが急遽予定を変更する事になった」

ザワザワと落胆したように生徒たちの声が体育館中に響く。それを見てか篠崎は不意に雅人、百樹の方へ指を指す。

「そうなってしまったのはそこに座っているこの学園の問題児たちのせいでは無い事をみんなには十分に把握してもらいたい」

それはこんな風に標的にされてしまうからだ。

この学園の教師やお偉いさん方はどうも俺らみたいなのやつを的にするのが好きみたいだ・・・

(ちつくしよ・・・このままただ笑われてたまるかってんだよ！)

グツと膝に力を入れて立ち上がろうとする。普通にすれば別段力を入れずとも立てるだろうが、それすらもうどうでもいい事だった。

(一回キツク言わなきゃ収まんないよな。こればかりは殴っちゃいけねえだろうし・・・)

震える両手を自らの内に抑えるように拳をキツく握りしめ俺は会長の元へと歩み寄る。

それでも壇上に見える篠崎の態度はと言うと余裕しゃくしゃくといったところと見える。

やがて距離は無くなっていき2人の距離が1mも無いほどに縮まっ

ていく。

雅人の足取りが止まる……

(いいか俺。コイツは女だ、手なんか出しちゃいけない……絶対に、絶対に……)

「どうした？山本雅人、こんな壇上まで上がったりして？」

(そうだ、ただ注意してやればいいんだ。注意してやれば……)

「これだから困る。要件も無しに君みたいなのがここに登るなど……」

それはとてもあっさり吐かれた言葉だった。まるで道路に落ちてるゴミを見下すような、そんな一言だった。

とても笑顔で、悪気のかけらもない一言だった。

ピキッ

「ちよりやああああ！！冥途の土産にくらいやがれええ！！」

とりあえずキレた！！キレるだけ切れてみた！！もうどうなったって構わないぜチクショウ！退学？上等すぎるぜ！

「とりあえずこの姉貴譲りの殺人右フックをくらいやがれええ！！」

クスツと笑う。篠崎会長の笑い方はいつもそうだ　そうやっていつも俺らを小馬鹿にしていたんだ。

そう、今回も

そこからは常人には目に余るような速さで全てが行われた。

クラシックバレエのトゥーシューズで強く踏み込んだような独特な甲高い踏打音。

(消え)

気づいた時には遅かった。さっきまでいた筈の会長の姿は既に俺の視界から『外れて』いた。

途端、振るった右腕に違和感が生まれる。そして俺は右腕を掴まれたのだとようやく気づいた。

(なっ　！？)

遅かった。

刹那、俺の体は宙を高く舞い上がり弧を描くように、そして破裂したような音と共に叩きつけられた。

休む暇さえ与えられず次には瞬時に肺へと刺さるような痛みが襲いかかる。

息をするのもやっとの状態だったが篠崎の行動はそこで終わろうとはしなかった。

体を支えようとついた左腕を弾くように逆側に位置する真上の方向にねじ曲げられる。

「がああっ!?!」

感じた事が無いほどの痛みが痛烈にかつ鈍く襲いかかる。

「最近柔道も始めるようになってね？君が一番最初の被験者にこうしてなったようだな。山本雅人？」

ミシミシと今も腕が悲鳴をあげていく。

篠崎会長はそれを見ても何を感じたわけでも無く急に力を抜いて俺を突き放した。

「これを期にバカで軽はずみな行動はしないほうがいいぞ？山本雅人……では宮穂先生、彼を遠い所に連れて行ってあげてください」

「はいはいはい!!今コイツをお連れします!!」

宮穂武が来る。既に力の入らなくなっていた俺の体は軽くコイツに持ち上げられた。

結局俺は最後まで何一つも言う事が出来なかった・・・

壇上から通り過ぎていく間、篠崎会長は生徒たちへと明るく楽しい話をするのだろう・・・そう思い耳を傾ける。

『さて・・・彼のおかげでスムーズに進む話もこのような状態になってしまったのだが、ここで発表してしまおう』

ダンッ、と篠崎会長が壇上の机を叩きつける。

その圧倒的な迫力に生徒たちもさっきまで啞然とした光景から一変して葛藤に包まれ体育館はもはやお祭りのような騒がしさとなった。

『紹介しよう！本日我らが学園に来た転校生を！』

会長がマイクを片手にその言葉を掲げる。

そして生徒たちから悲鳴に似た歓声が飛び交う中、体育館入り口から『そいつ』はやって来た・・・

バタタタタタタッ！！ベタッ・・・

バタタタタタタッ！！

やかましいほど、本気と書いてマジと読むってぐらいに全力走ってくる『そいつ』は靴が無かったのか学園備え付けのスリッパで生徒たちの期待を裏切らないくらい全力疾走の後見事に前のめりに倒れ込んだ。

まああのスリッパで走るのはいしな。気持ちはずいぶん分らない。

その後静かに立ち上がってまた壇上に全力疾走で向かってる。

んっ・・・？なんだろう？走る方向が心なしかちよつとずつ変わって、いやこっちに向かって来てる気がするんだが？

「ちゃん！！」

いや、気のせいじゃない！？

なんか変な言葉を発しながら走って来てるんだが

うん、気のせいにしておこう。今日はきつと疲れてるんだ。そうなんだ。

「っにいちゃんっ！！」

そうだ気のせいなんだ！！そうと決めたらさっさと連れてってくれ

宮穂武！

いや頼むから！

「おっにいちゃんっ！！！！」

(あ)

体育館の空気も冷めやまぬ中、『そいつ』は突然やってきた……

メキヨシッ!!

真空飛び膝蹴りを俺に食らわしながら……

つて、もの見事に直撃だこのヤロウ、初対面の人間に手加減つてものをしらのか!?

少なくとも世界共通の挨拶に真空飛び膝蹴りなんて項目は無いからな!?

後から分かった事だが今説明しとこう。

『コイツ』の名前はノエル・クリプシー

なんでだろう……今日、俺はコイツの兄になった。

そしてもう一人、確かに感じた。

『その存在』を……

凍てつく視線、渦巻くようにまるで水流のように冷たく、激しい殺意をまとった美しき獣の如き『ソイツ』を……

「・・・」

まず始めにこの目に映ったのはいつもの見慣れた部屋だった。多分最初は真っ白だったであろうこの天井も今となってはこの通り、薄汚れてしまっている。

「あの後結局気絶したんか・・・」

起き上がったのはここ、保健室の奥から二番目のベッド。俺も授業をサボる時や百樹とかと遊ぶ時はよく使っている。だから俺専用であり俺以外には使わせる気は無い・・・はずなのに・・・

「ああ、具合悪。ってか何があつたんだかわけ分かんねえし・・・マジまだ痛いしょ。あの真空飛び膝蹴りは」

「大丈夫？お兄ちゃん」

「んああ。別に大したってわけじゃないから大丈夫だけだよ。いや、まじでアイツなんなんだ？」

「ゴメンね？ノエルのせいで痛くしちゃって・・・」

「いや、別にお前が悪いわけじゃないしさ。悪いのは……
お前だあああああああああ！」

ビビったよ！とにかくビビったよ！そりやもうビビったよ！正直腰
が抜けるかとっ！？

だってここにコイツがいるんだからな！？

つていきなり飛んできたあああああ！？

今度は何するの！！また飛び膝蹴りか！！

え、制服のスカートの両端なんか持って……？

「えつと、初めまして。お兄ちゃん？私の名前はノエル・クリプシ
ー。16歳！ママは知ってるの通りヴィレイナさんだよ？」

ああ、スカートの両端持ったのは外国流の挨拶なんかか……つ
て、はい？よく聞こえませんでしたか？

「だからもちろん私もヴァンパイア！だからお兄ちゃんと同じだね
！あっ、後学校ではハーフって事になってるから栗節くりぶし 乃惠留のえるだか
らね！だけどお兄ちゃんはノエルでいいから！」

あー、なんだろな。

「ごめん、1ついいか？」

「なあに？お兄ちゃん」

「いや悪いけどさ、何がなんだかサツパリなんだが？」

「ノエルがお兄ちゃんの妹だって事？それともノエルがヴァンパイアだって事？」

「ん、ああ。ぶっちゃければ全部が不明なんですが？」

ノエルはめんどくさそうに背中に手を掛ける

「しょうがないなあ〜。……よいしょっと、うんしょっと」

ゴソゴソゴソゴソゴソゴソ……

「よっこいしょっと……よし！いくよ？お兄ちゃん！」

「その下準備に5分ぐらいかかったのは気のせいかな？」

「気にしないで！女の子に恥ずかしい思いはさせないで！じゃあいくよ〜！！」

何が恥ずかしいのかよく分からん。そう思ったのもつかの間、俺の目の前に光が広がる。光は保健室中を覆い尽くしまばゆいばかりに輝きを放つ。

そこに見たのはそう、俺があの日手に入れた力

「どづー!?これで信じてくれた?」

そこに掲げられたのは黒よりも深く、旋律のような漆黒の翼だった。てかちよつといいか・・・?

「ちつさつ!!」

落ち着いて見てみよう。ノエルの背中に掲げられたその翼はどうみても小さいです、どう考えても50センチないですって!!

「いや、これオプションですか?もしくはどっかで売ってた?」
とりあえずどんなに時間が掛かっても問いただきたいとこだがあえてやめておこう。

何せ相手はいきなり俺に飛び膝を食らわしてきた猪突猛進で身元不明な妹と名乗る自称ヴァンパイアだからだ・・・

ほらいきなりハリセンボンみたいにほっぺを膨らまして泣きそうな目をするし・・・って泣いちゃってるしよ。めんどくさいが泣き止まずとするか。

「とりあえずさ、こうしてもしょうがないからオヤジさんのところに挨拶しに行こうな。ウン、ソウシヨウ」

これで納得してくれるだろう?と思った俺がバカだった。

「ひつく・・・ひつく・・・にやあ」

なにそのにやあって不敵な笑みは!?!なんかしてやられた気がする

んですが？

と、ノエルがいきなり白い紙を俺に突き出してきた。

(イヤな予感がする)

と、俺の脳内が危険を知らせております。その差し出された紙を恐る恐る受け取る。嫌な予想通りそれは手紙だった。

どうも、お久しぶりです。雅人、そして杏樹。あなた達の母、ヴィレイナです。

もう夏も終わり秋の始まりに差し掛かり気温も穏やかになってきたところでしよう。

私達の旅行もようやく終盤に突入して後は余韻を楽しんでいる次第です。お土産をお楽しみに・・・

さて本題に入りましょう。アナタに今手紙を渡してくれたのはノエル、ノエル・クリプシーです。勿論ヴァンパイアですね。

この子はある理由から両親を失い1人さまよっていたところ私が引き取る事にいたしました。だからアナタとはもういわば血の繋がった関係に・・・だからよろしくお願いしますね。

基本ちよつとワガママで手に余すところもありますがそれはそれでかわいいところがありますのど。そこら辺はアナタの愛情でカバーしてあげて下さい。どうかノエルをよろしくお願いいたします。

それともう一つ・・・

パターン、と手紙を折りたたむ。

・・・

やっぱりか・・・なんだろうな、こうなったらもう人生諦めるしかないのか？

ほら、なんかさつきから変な痛い視線感じるし。

「どうしたの？お兄ちゃん、頭でも痛いのか？」

その原因を作ってるお前が言っな。いやほんとどうしようか

・・・いい事を考えた。

「なあノエル？」

「何っ！？お兄ちゃん」

ちょっとこっちから話しかければこの通りだ。
どうにかしてほしい。

「こらこらいきなりがつつくな、それとそんなキラキラした目で見ないでくれ。んでこれから喋る事なんだが・・・お兄ちゃんの言う事なら何でも言うこと聞くか?」

「YES! ALL light! cdktpmai qmt、mjg ukmagda!」

待て待て。最後辺りとか何言ってるか分からんのだが、これがヴァンパイアの標準語ってやつなのか・・・? まあ突っ込んだらキリがないからそこは触れないでおくとするか。

「よし。そうと決めたらだ、ノエル・・・目をつぶってくれないか?」

「sabrada gnt、alomt syagda・・・?」

いや、何言ってるかサツパリ分からんし。頼むから地球の標準語でお願いしたいんだが、とりあえず領いとくか。

そうするとノエルは覚悟したように頬を赤く染めて（なんでだよ）静かに瞳を閉じた。

これで準備が整った。後は覚悟を決めるのみだ・・・

「よし、と。そんじゃいきますか!」

気合いを入れる。

ドクンドクン、バクバクバク!!

(そりやだつて緊張するわよ・・・ずっとずっと憧れてたお兄ちゃん
がノエルの側にこうしているなんて・・・)

どんな事になつたつて頑張れる覚悟はしていた。

(でもまさかお兄ちゃんの方から誘つてくるなんて予想外じゃない
!)

抑え切れぬほどに鼓動が膨れ上がった心臓は今にも爆発しそうなく
らいである。そんな中、雅人の口から発せられた一言はノエルの脳
内を爆発させるのには十分すぎた。

「よし、と。そんじやいきますか!」

(何をさ!?)

まさに予想外の一言だった。

(まさか、お兄ちゃん・・・まだノエルには早いよ!だつてお兄ち
ゃんとは今日会つたばかりなのに!)

ドンドン膨らんでいく妄想、妄想、妄想!
その中でノエルは決心した・・・

(お兄ちゃんにならノエル何されたつて大丈夫・・・かな?でもノ

エル頑張るよ！)

閉じた瞳に広がる暗闇の中でも緊張の度合いがピークに達しているのがわかる。

それでもノエルにはもう大丈夫だと確信があった。

確信、と言うか正確には自信とさえいいのだろうか。そんなものがノエルにはあった。

え？何を根拠に？

(お兄ちゃんだから・・・)

はい、全然根拠になってませんね。

(とっ、とにかくよっ！お兄ちゃんならノエルは大丈夫なの！ナレーションは邪魔しないでくれる！？)

はい分かりましたと・・・

さあとっとう動きがあったようですよおおおおお！！

(動きって何よナレーション！！ああ！もう緊張してきたじゃない！あんたのせいよナレーション！！)

ガタン、と物音がした。その音と同時にノエルもまた反応し肩を震わす。

(って何いきなり真面目にナレーションしてんのよ！)

まあそれが仕事ですからね。

(せ、正論・・・ってほらあ、なんか来たじゃない！！)

その物音を鳴らしたであろうその人物が距離を縮めて来ているのはつきりと分かった。およその距離はもはや2mも無いであろう。

(き・・・来たのね、お兄ちゃん。どうしよう、ほんと緊張してきたじゃない)

その思いとは裏腹に時は待つことを知らずに進んでいく。

ポンと肩に手のひらを乗せられる感触がいきなり襲いかかってきた。

突然の事態に驚きを隠す事が出来ないノエル、もはや脳内の思考回路はショートする寸前である。

(どうしようどうしようどうしよう！！ええい！！こんな時はお兄ちゃん対応マニュアル第6巻2章その13だったはずよね！そのはずよ！)

そんなにマニュアルがあるんですね。

(こんな時に出てこないでよおおお！！この馬鹿ナレーション！頭の中が真っ白になっちゃったじゃないいい！！)

いい事を教えてあげましょう、ノエルさん。恋と言うものはマニュアルなんかじゃないのです。当たって砕ける、行けば分かるさ・・・

ありがとうおおおおお！！！！

(何一人でテンション上がったんのよ！へたれナレーション！)

よし、頑張れ！

(何よ！頑張れって。何ガッツポーズして・・・あっ・・・)

ほら彼が来ましたよ？アナタの優しさで包んであげればいいじゃないですか。

(分かってる・・・わよ。私だってやる時はやってやるんだから！)

覚悟を決めたようです。こうなったらやってしまいましょう。さあ、さあ、さあ！！

(分かったわよ！この・・・akameipargma!!やればいいんでしょ！やってるわ！)

よし、その意気だ。何を言ってるかは分からないけどその調子だ。

(私だって・・・やる時は、やる時はああああ！！)

そしてノエルは勇気を振り絞った。差し出した勇気の証、それは自らの水面よりも柔らかく、誰にも譲る事なく守ってきた唇。それを今日、お兄ちゃんへ・・・そう雅人へこの想いと共に捧げる。

(お・・・お願いだから黙ってなさいよ・・・恥ずかしすぎて死んじゃいたいくらいなんだからね・・・)

ほら！それよりも来たみたいですよ？彼もそれに応えてくれたみたいですよ！

とうとう来ましたね・・・

（ふふ・・・ふふふ。とうとうお兄ちゃんとノエルが結ばれるわ！そう、とうとうここまで来たのね・・・この瞳を開ければそこにはお兄ちゃんがいてノエルを優しく抱きしめてくれて・・・）

そうそう、これでああなたの今までの苦勞が報われるわけなんですね。おめでとうございます・・・これで私も報われるものです。

（待って・・・アンタは一体）

それより早く彼の元へ行ってあげてください。そこには彼の笑顔が待っているのだから・・・

（そうね・・・ノエル頑張るから。アンタの為にも頑張るから！）

ノエルは今日、ナレーションと言う名も無き者に出会った。そして新たな決意と共に瞳を開く。

（一応ありがとうって言っとくわ・・・ありがとう）

いいえ、礼には及びません。さあ、これからはあなたが頑張るので

す。
（言われなくても頑張るんだからね！）

ほら、彼がもう待ってるみたいです。早く瞳を開けて・・・

(うん・・・ありがとう！)

瞳が優しく開かれた。同時にまばゆいばかりの光の世界が広がる。そこには彼がいた。

「大丈夫かい？おじょうちゃん」

ノエルの白馬の・・・

校務員様・・・

う。そこで思いついたのが深呼吸だ・・・

はるか後方ではおそらくノエルのものであろう轟音と悲鳴が近づいてくるのがはつきりと分かる。

俺は瞳を閉じ一つ深呼吸をした。体の奥深くから体の芯を通して悪いものが吐き出されていくのが分かる。

（大丈夫。これで落ち着いたし大概の事は耐えられるはずだ）

と思いましたけど所詮って無理なもので・・・瞳をゆっくりと開けて見えた世界はとても酷いものでした。

バツバツバツバツバツ！

「お`兄ち` やああああん！！！！」

うわっ！！ヤツパリ来たああ！

なんか見た感じなんか凄い事になってるんだが！？

「っってお前ええええ！！そりやないだろおがああああ！！」

見てみる！すごい事になってんぞ！ノエルが・・・ノエルが『翼』を羽ばたかせながら飛んでるし！？

「お前っ、ほんとにヴァンパイアだったのかああああ！？つうかさっきの翼と違って・・・でけえええ！？」

「お`兄ち` やあああん！！お兄ち` やああああん！！！！」

うん、まさかここまで会話が成り立たないとは。

「とりあえず落ち着けええ！！そしてここは神聖なる学校だ！まずその翼をしまつてくれええ！！！」

「お、兄ちゃあん！！私・・・私、ナレーションに汚されたああああ！！だからもうお兄ちゃんと結婚するしかないのおおお！！！」

何の話だよ！？なんだナレーションって！汚されたってなんの事がさっぱりだつての！いや、しかも結婚って・・・ナニヲイツテルノ？

「落ち着いてくれ。まず言っておこう！何を前提に結婚とか言つて・・・いやいやそんなのはいいんだ！とりあえずその翼をしまつてくれ！じゃなきゃヴァンパイアだつてばれるじゃねえかああ ムギユフ！！！！！」

「もうあのナレーション倒すしかないの！！この手で討ち取つてやるんだからああ！！！」

もうすんごい号泣しながら飛んできて俺にダイビングしてきやがったよ！

なんたるな・・・どうしてこんな風になったのかな。

とりあえずここらで我慢の限界かな？

「つとおおおおい！！さっさと落ち着きやがれええええ！！！！うらああああ」

その場はもう戦場と化した。

飛び交う机や椅子・・・主に俺が投げた。

こだまする嵐のような悲鳴・・・主に俺のせいだ。

校内に響き渡る非常ベル・・・完全に俺のせいだ。

今日と言つ日・・・プライスレス。

辺りが静かになり始めた頃、俺は意識を取り戻した（正確には自我を）

「ぜひーぜひー、やっと落ち着いたかよ・・・」

そおつと周りを見渡してみる。

廊下の片隅でガクガク固まりながら震えてシクシクと泣いているノエル。

金切り声を発しながら泣き叫んで逃げていく女子生徒達。

その場に立ちすくんだり腰が抜けたように倒れ込む男子生徒達。

あれ、おかしいな。こんなはずじゃ無かったのに・・・とりあえずどうするか？

必死にない頭をひねりながら俺は考えた・・・

そこで思いついたのがこの『最善の策』だった。

「と……とりあえず落ち着いたな！ははっ、ははははは！」

うん、とりあえず俺……落ち着け。

今日も最悪な日々が始まりの予感がします。

第4夜 泣きたい時は空を見て (後書き)

「俺って・・・なんか辛い立場だよな」

荒野のような静けさに包まれた廊下で俺は1人たたずんでいた。すでにそこには誰一人として居なく孤独な空間だった。

その時、ポンツと誰かに肩を叩かれた。そこにはなぜか百樹がいた。

「雅人・・・」

普段はうざくてたまらなく居なくてもいい存在なのに・・・なんでだろ、その時だけはやたらと百樹の顔が優しく見え

「さあ、早くオジサンと病院に帰ろうか」

前言撤回

たいがーあばかつ!!

そして百樹の亡骸を拾う者は誰一人としていなかった・・・

第5夜 瞳をトジテ

しかしあれだな。少し疑問がある。

俺にだって残虐的な姉貴がいるし、その姉貴の弟として下の子の気持ちつてのは少しぐらいは分かっているはずだった。

そこでみんなに一つ、聞いてみたい。

妹って・・・こんな酷いものなのか？

「おっ兄ちゃああん!!!」

正直言っぞ？ウザいよホント・・・

いきなり俺の目の前1m地点で叫んでくるコイツは『ノエル』

先ほど俺はコイツの兄になりました。

と言うわけで付きまとわれまくりな感じでお兄ちゃんと呼ばれ早くも30回ぐらい・・・このままいけばトラウマになること間違いないだろうな。

何がそんなに嫌だった？バカ言うなよ。これから説明してやるからよく耳をかつぽじって聞いてくれ。

トイレに行くたびに男子トイレに惜しげもなく乱入してきた

「お兄ちゃああん!!」と叫ぶ。

昼休みに入ったらもう大変だ。

「お兄ちゃん!昼休みはノエルと一緒に遊ぶんだよ!ずっとずっと一緒なんだからね!」とか誤解を招く発言はやめてくれ、マジで。

逆に授業が終われば教室にズガズガと入り込んできて

「お兄ちゃああん!!」つてああああああ!!

「ウツゼえええええ!!」

おっと危ないまた机をひっくり返しそうだった。そうだな、落ち着け俺。

「お兄ちゃああん!!」

本日早くも31回目・・・いや、ホントどうしよう?このままだとまた暴れちゃうぞ?

しかしコイツは・・・いきなり抱きついてきたり男子トイレに侵入してくるとか人としての恥などを持ち合わせてないのだろうか、と本気で考えてみた。

(あ、人じゃないんだっけか)

昼休みの独りツッコミとはこんなにも虚しいものだったとは、とても悲しすぎる。

「あ・・・」

待てよ？なんか忘れてる気がするんだよな。なんだっけか・・・ああもう、喉の真ん中まで来てるってのに・・・

「そうだ、杏樹の事忘れてた」

気づいたら俺は走り始めていた。

はるか後ろからは既に俺の事をお兄ちゃんと呼びながら闘牛のように真っ直ぐ俺をめがけて走ってくる恐ろしい子がいるが構わず走り抜けた。

いやむしろ構ったら負けだと思っている。

「お兄ちゃああん！！」

負けそうだわ・・・

見えてきた保健室の白い扉。

あそこに着いてしまえさえすれば全てはこっちのものだ。

むしろ50mを6秒ちよつとで走る俺の後ろを余裕でついてくる奴をどうにかすればまるでこんな問題は無いのだが・・・

ええい！もうどうでもいいわ。今はとにかく前に突き進むのみなんだ！

「なんだ・・・！？」

保健室の手前まで到達したところで俺の目の前に奇妙な光景が広が

った。

そこには保健室のドアを挟むようにして狭い廊下を無数の男どもが息を荒げながら固まっていた。

「コイツら、どっかで見たような・・・まさか」

突然地響きのような男どもの歓喜の声が廊下中に唸る。

はたから見たらとんでもなく醜い事限りないだろう。

そして男どもの間を割ってバカ皇帝たる男がどこからともなく出現した。

・・・

(やっぱりお前か、百樹・・・)

あらかた予想がついていた答えに動ずる事はしなかった。

「貴様等！俺の名前を言ってみろお！！」

『ジャ・・・百樹様あつ！！』

「ふふふ、良い響きだ。本題に入ろう！諸君等【杏樹ちゃんファンクラブ（非公式）】に集まって貰ったのは他でもない！今、この保健室に杏樹ちゃんが眠っている事はご存知かあ！？」

うわっ、すごい興奮してるよ。しかもコイツの考えてる事はお見通しなんだが・・・

「そこでファンクラブ会長として貴様等会員にサプライズイベントをくれてやるわ！！名付けて【杏樹ちゃんの寝顔を間近で見ちゃいましょうの会】を開催じゃあああ！！！！」

予想通りか・・・俺は百樹の行動よりも百樹の行動を簡単に予想出来る自分がなんか悲しくなった。

「まあタツプリお仕置きしてやんよ」

自分でも今俺は恐ろしい顔をしているのだと思った。でもね、間違っている事は正さなきゃね！

「ようし！これから一人づつ会場に入ってその目にしかと焼き付けてくるがいい！トツプバッターは俺様じゃああ！」

男どもは変なオーラを発しながら百樹の勇姿に固唾を飲んで見守った。

「どけい！どけい！俺様の夢のロードを邪魔する奴は許さんぞお！」

なんか男達をかき分けながら悠然とこつちに進んでくるよ。

「どけい、どけい！ふはははは・・・はは？はは・・・？」

百樹の笑い声が止まった。そりゃまあ目の前に俺がいるんだからな、南無・・・

「よ、よう雅人！どうした？こんなところで！」

ポキリ、

「いや〜偶然だな！ほんつと今日はなんかあるのかもな！あはははは」

ポキリ、

「待ってくれ、話せば分かる。まず落ち着いてくれな」

ゴキリ、

「ここは平和的にいこうじゃないか？何か誤解しているようだがこの際ちゃんと俺の事を理解して欲しいんだ！」

ゴキリ、

「……あえて言おう！これは俺の『趣味』であると！！」

ほう……？

次の瞬間には百樹の体は天井へと垂直に突き刺さるようになり埋まっている。

その惨劇を目の当たりにしていた男達はただただたじろぐばかりだった。

「ふう、すつきりした。さて・・・と」

俺が一步步く事に男達はたじろぎ道が出来る。遂には保健室のドア

が現れるほど綺麗に見えた。

やっこのことで着いた保健室のドアに手を掛け引いた。
たったそれだけの行動だったが何かその時不思議な感覚に陥った。
そのドアは余りにも軽すぎたのだ

そつと、俺が手を掛けた瞬間にドアの向こうからは誰かが引いていたのだ。

開かれたドアの対面に杏樹はいなかった、
が代わりに別の女が何事も無かったかのようにそこに立っていた。

女は不思議だった。

格好は確かにウチの制服を着ている。
だが見たところ俺の記憶が正しければ『あんな女は居ない』

「おいっ
」

声を掛けようと俺はそいつの肩に触れようとする、
寸前女はそれかわすように駆けていった。

「んだよ・・・あいつ
」

気になるところであったが今はそれどころで無い事は分かっていた。
だから再び保健室に視線を直そうとした時

女は唾った

その違和感を覚えた時は余りにも遅く 全てが無意味過ぎた。

さっきまでいた大勢の男達の声がしない、それに気づいた俺は恐怖
を体の奥底から感じた。
体がそう気づかせたのだ

やがてそれは雅人の中で恐怖から確信となった。

これは『凶』なのだ

ふと、何か音がする。床一面を這い回る音・・・それは無数に蠢き

回る百足だ。

蠢き・・・そして死の触感を携えて体を蝕んでいく。

俺はソレに恐怖した。

目の前に広がる光景は現実には起こり得ないはずのものだという事は分かっている。だがこれは

枯れず、誰にも届かない叫びにもならないものを繰り返す。

窓の外は白と黒の世界で覆われていく。やがて自分もそれに染まるのだという実感すらあった。

もがき、必死に抗い掻き分けながらその先に微かな希望を信じ進む。

それは刹那に絶望へと変わる。

狂い 悶え、変わってしまった部屋を見渡す中はようやく見つけた。俺は『黒く染められた血溜まり』に沈むベッドを覆うカーテンに手をかける。

叫べば楽になる事はとうに分かっている

彼女であったものはもう動かなかった。

彼女であったものはもう喋らなかった。

彼女は、杏樹はもう

『どじつて』

「さどくん」

誰かが叫ぶ声がある。俺は消えゆく意識の中、聞いた事のあるその声に耳を澄ました。

次にぼんやりと虚ろだった瞳を開こうとした。

瞼を開いた筈なのにそこにあるものは歪んで見えた。

そうか・・・

瞬時に理解した。俺は泣いていたのだ。恐怖に怯え、絶望に打ちひしがれ、泣いていたのだ。

涙を拭うはずの手さえまだ震えている。あれは常識の域を外れ、死ぬのが恐ろしいというごく当たり前の感覚さえ刹那の絶望と恐怖の固まりによって『壊された』。

つまり俺は死んでいるのと同じものだと思った。

あの混沌の中俺が『手にしたの』は『失うもの』だとそう問いただされた。

そして

「雅人君っ！」

俺は失いたくなかった

「大丈夫・・・もう怖くないから」

彼女はそう一言優しい口調で言った。
そして俺を抱きしめてくれた。

優しく

優しく

「俺は・・・」

やっと口にする事が出来た。言葉と言うよりは嗚咽に近いように吐き出していた。

個というものを失う事が怖かったのではない。
失う、ということの意味が怖かったのだ。

「大丈夫・・・私はここに居るから」

彼女はそう言ってくれた。

「お兄ちゃん！！ここにいたの！探したんだか・・・ら」

その場を取り巻く空気が180度、全く逆に回転するほど雰囲気
がらりと変わる。

そう、誰が見ても分かるようにコイツのおかげである・・・

「ま・・・」

ゴクリ、と俺は息を飲んだ。これから起きるだろう事があらかた予
想出来るからである。

どうかこれ以上荒れませんように・・・

「また貴様かああああ！この小娘がああああ！！！」

大変だあ！変な翼とかまがましいオーラがそこら中に飛び交って
るよー！！すごいコウモリとかいっぱい飛んでるしー（最後まで
棒読み）

こうなったら・・・

「杏樹」

あくまで杏樹にだけは届くようにその声を出す。

「逃げんぞっ！！」

地面を蹴り上げる

「えっ・・・」

杏樹は気が抜けたような声を上げた。当然の事だ。

一瞬にして杏樹の軽い体は宙を舞い雅人の手によって背中に掲げら
れたのである。

「まっ、雅人君！？どうしたの！いきなり それにあの女の子はっ
！？」

「今は何も言うな！とにかく逃げんぞっ！！」

その一瞬すらノエルは見逃す事はなかった。

全身のまだ未発達としての筋肉、それら全てを緊張し爆発させる。

背中の漆黒の翼はその色と同じ色に染め上げるように天を包み込む
ように広がり部屋中をコウモリの群れと共に埋め尽くす。

「geashiladolgamura!!gem・・・baz
lalaermgattillem!!」

その言葉は何を意味するものだったのか、その時は分からなかった。だが振り返った時、その視界に写るものが全てを物語っていた。

(なあって!?)

とてつもなく恐ろしい 巨大な質量の塊。

コウモリが巨大な螺旋のように連なって殺意を持って襲いかかる。

(待てよっ)

刹那の殺意が飛び交う中、ふと疑問が思い浮かぶ。

(これは杏樹や俺どころか 校内全部が・・・)

儂き想いだった。

雅人の想いはそれほど強いものだったが無意味だった。

悪意無き殺意を放つ ノエルにとってその想いはガラスのように簡単に踏みにじっていく。

それだけのものだった。

「essaablisso・・・ifebrina」

手を上に掲げ、そして決意をしたように握る。

放たれた言葉はそれこそ『想い』だ。

そしてもう止まらない 止められない。

コウモリの大群は弧を描くようにまるで一つの塊が蠢くようにそれでいて鋭く一直線に杏樹へと向かう。

(やっ!?)

これを避ける事は最早不可能だ。本能がそう告げた。

ノエルは本気で終わらせるつもりだった。

そしてノエルは今、その力や覚悟を持っている。

これを止める事が出来るのは操者であるノエルだけだとおそろくそう考えた。

つまりこれは止められない

待つものは何もない、そう思った時だった。

コウモリ達が止まった

現実はその受け止めるしかなかったのだ。

まず一言、『なぜ』と考えた。

頭の中であらゆる状況を考えてみた。だが答えは一向に出ようとなない。

そして答えは目の前に広がる状況ではつきりとした。

止まったのではない、コウモリ達は避けたのだ。その『存在』に怯えて。

「アンタ・・・何者？」

忽然と砂ぼこりと共に現れ立ち尽くす男に疑問の言葉を投げかける。雅人も同じ疑問が浮かぶ。

そしてそれは疑問からある確信へと繋がる。

「百樹」

俺はその名を呼ぶ。

「まさか・・・人間！？ノエルのあれを初めてかわしたのが人間だつていうの！？あんた・・・人間？」

百樹は不敵に笑う。その笑みは突然現れた不確定要素に戸惑いすら隠せないノエルとは対照に余裕を持ってしても余裕を持て余す表情

の表れだった。

「これでも・・・っ!!」

目の前の不安に必死に抗うため手を掲げる。

先ほどと同じようにコウモリを操り目標に向かい攻撃するためだ。

「行つて・・・っ!!」

普通なら このまま全てが終わるはずだった。

だがこれはノエルにとって普通ではなかった。

「なんで？」

コウモリ達は怯えていた。それも酷く、何かに怯えるように一匹一匹震えていた。

それはノエルも例外ではなかった・・・

「なんでよおおおお!! なんて行かないのよおおお!!」

恐怖だった。生まれて初めて感じた恐怖、それを今克明に感じているのだった。

それでも百樹はじりじりと距離を縮めようとしてくる。

最早追いつめられているのは自分でそれにはさほど時間が掛からない事を理解した。

「これが」

この事実ばかりは素直に受け止める事が出来た。

それ程に、あきらめが簡単につく程に力の差はハッキリしていたのだ。

「敗けつて事なのね・・・」

天に掲げた手を下ろす。その瞳にはもう一片の殺意などは残らずただ覚悟を決めている、そんな感じだった。

「さあ人間・・・アンタの名前を教えなさい。この胸に刻んであげる」

少しだけ、困ったようにそして真っ直ぐに伝えられない言葉を一生懸命に声にしてみた。

「い・・・」

それに応えたのか百樹も先ほどから沈黙して閉ざしていた口を開いた。

まああれだ。気づいた時には遅かったと。それで百樹ってこんなやつなんだなって事を改めて思い出した気がしたわけで・・・

「妹祭りじゃあああああああ！！」

「・・・え？」

数秒たらず、それも一瞬のうちにその場の空気が凍りついた事に誰もが気づいた。

百樹・・・ある意味凄いよお前。

「ものどもっ！出あえい出あえい！！！」

『うおおおおおつす！！！！』

何が何だか分からない状況の中、ノエルはそのまま男達に担ぎ上げられる。

「えっ、ええっ、えええええ！！！」

ノエルの表情が困惑から恐怖へと変わる。おそらくこれほどの恐怖体験は彼女のこれからの人生の中で最初で最後となるだろう。

そしてこれがものすごいトラウマになる事は誰もが安易に想像出来た。

ノエルはようやく事態を把握出来た。コウモリ達は百樹に恐れたんじゃない……『気持ち悪がっていた』のだと。

「い」

迫り来る男達の波、波、そして波！！
ノエルは忘れる事はなかった……

「いやあああああああ……」

生きてくれ……

「まあおかげでこうして杏樹と平穏な時間を弁当を食えてるからよかったですよ」

ここは橋ヶ谷学園の第二屋上、向こう側に見える第一屋上と違い普段からここは解放されており昼休みとなればカップルの巣窟となっているわけ……

ポフンツ!!

「げほっ、げほっげほっ!!がほっ!」

「大丈夫っ!? 雅人君? なんか詰まらせた?」

少しちゃんと考えてみた・・・

俺、そういえばあの時・・・どさくさに紛れて・・・

ポフンツ!

ダメだ・・・思い出しただけで恥ずかしい。なんであの時あんな事を・・・

「顔・・・赤くなってるけど大丈夫? 風邪でもひいたの?」

「って杏樹、お前非常に顔近っ　!!」

いちいち大変です、今日の俺。

「そっ、そっいや杏樹! 今日の弁当なんだよ!」

「えっ? 私はいつものやつだけ・・・」

「いいから見せろって!!ほらっ」

カパッ

そこには丸々とした依然変わらぬ輝きを放ち鮮度そのままを保つ緑色の宝玉があった。

「.....」

何?その同意っていうか意見を求めるような輝いた目は・・・俺は何かを言えいいのか?

「ウン、マンマキャベツデスネ」

「そうなの!!でもね!これはまた形も一級品で八百屋さんが言うには味のほうも最高なんだって!それで1玉50円なんだよ!

元々キャベツってのはねヨーロッパ原産の越年草で葉っぱは厚くて大きく、巻いて球状になる種類の多い作物なんだよ!それでね・・・

「いやもうその説明だけで腹いっぱいだから・・・むしろ勘弁してくれ」

しかし疑問だ・・・杏樹は狼男ならぬ狼女なわけで、普通に考えてみたら狼って肉食じゃね?それを好んでキャベツなんて・・・つか・・・

さっきから凄い殺気を感じるんだが？

そこでやつともものすごい音が耳に入ってきた。いや、しかしものすごいな・・・

あれ？なんだろ。人がぼんぼんと宙を舞ってるのが見える気がするんだが？しかも凄い数だぞ？平和な日本でこんな事が起こるんだな・・・

「ははは、凄いな。見てみるよ杏樹。なんか出し物でもしてるのかな？」

「あれ、雅人君・・・なんか女の子が叫びながらこっちに猛スピードで走ってくるんだけど？」

やつぱりですか・・・

これは避けられない運命ってやつなのか？何が因果で

「あの小娘ええええ！！この世から二度は滅してやるんだからあああ！！」

はい、ちゃんと聞こえましたよ。

なんか知らないがおそらく杏樹に怒り浸透中だし・・・

(そろそろ片をつけなきゃいけねえな。いつまでも逃げるわけにはいかないしょ・・・)

ゆっくりと下ろしていた腰を上げ気だるそうに雅人は立ち上がった。

ふと今までの人生を振り返ってみた。考えてみれば本当に不思議なものだ・・・

ガンガンガンッ！！

杏樹に会ってからというものの全くツキに見放されこうして毎日毎日災難に押しかけられ

「ちよりゃあああああ！！！」

そう・・・今回のこれも試練なんだな・・・

雅人は見えていた。

まるでゼロコンマ単位の世界になったような感覚に襲われスローモーションのように目の前に起こる全ての光景が時が止まったかのようにならなっていた。

当然それも

依然雅人に向かって一直線近づいて来るのは屋上と階段を繋ぐ鋼鉄製でやけに錆び付きが目立つ扉だった。

そして向こう側に見えているのはそのあくまで『鋼鉄製の扉』を軽々と蹴飛ばした人間としての能力を軽く超越した存在であるヴァンパイア、ノエルである。

そして俺も

鋼鉄製のドアは今も真っ直ぐに向かってくる。

無機質でいて巨大な鉄の塊は直撃などでもしたらそれだけで人を殺めれるものだとも誰もが理解している。

たとえそれがそういう用途に使われていなかったとしても結果、人を殺めたとしたらそれは紛れもなく危険物の類に入るものだという事も

俺の目の前に広がる世界ははまだスローモーション映像のようにゆっくりと動いている。だからこれも何の問題はない。

飛び交い襲ってくるそのドアへそつと手を『添える』
後はそう こうしてしまえばいいのだ。

噴煙が巻き起こる。それはまさに一瞬の事だった

「まさか・・・お兄ちゃん？」

ノエルは後悔し自負の念にとらわれた・・・突発的に起こしてしまった行動とはいえ蹴り上げたドアの先には

「あ、あ・・・」

噴煙を巻き起こしなお勢いが落ちない程の殺傷力を帯びて襲いかかった鋼鉄の塊は全てを終わらせてしまった。

辺りが静かになり始め、ただ夢のごとく虚ろになった時だった。

雷鳴のごとき轟音が甲高い悲鳴のように辺りに轟きわたりその場を圧倒し支配する。

『それ』はほんの数えるまでもない数瞬でノエルの前を過ぎ去って後ろに位置する壁へとこすれ、金属音とコンクリートの無機質な音が混ざりあいながらぶつかりそして一気にめり込んだ。

『それ』は金属製のドアだった。

先ほどまでは形どころか原型そのままに残りただ飛んでいったはずのドアが今はその形すらおろかドアだったという面影さえ分からないうまに捻れ、歪み、破壊されていた。

なんで

最初に生まれた言葉がそれだった。

その疑問ははたして疑問として受け取ればいいのか自らさえ分からなかった。

だから

なんでと

ふと物音がしか事に気付く。それは噴煙がいたずらに舞い続ける彼の者がいる場所だった。

ごくり、と息を呑みこみ目をこらす。

そこにいるのは『影』だ。影が一つ浮かんでいる。

影はゆらりとする。一つにも関わらず犇めき合いながらゆらりと動き続ける。

だから奇妙だった。

「お兄・・・ちゃん？」

震える声でその先に投げ掛ける。

答えは帰ってこなかった。しばらくその空間は無言に包まれていく。

何も無いその空間でそれは語りかけてきた。

「ノエル・・・」

緊張が破られた瞬間だった。

「良かった、お兄ちゃ・・・」

奇妙な違和感に包まれていた中、そこにいたのは紛れもなくいつもの雅人であった。

やはりさっきの影に見えた幻は自分の見間違いだろう、とそう呟いた。

今はこうして安心出来たのだから。

「もうさ、終わりにしようぜ。こんなんじゃみんなに色々迷惑とかかかっちゃうし、何より俺らが迷わ ムグツ!？」

「やだやだやだやだやだ! 絶対やだああ! 絶対将来お兄ちゃんのお嫁さんに…つなるんだからあ! 子供の頃からの約束なんだからね!」

こいつ… いちいち抱きつかないでくれ。しかもなんか凄い話が展開してるし第一子供の頃からなんて会ってないからな? 妄想もはなはだしい…

「いやまず落ち着け、そして一旦深呼吸して…」

「だからそれにはまずっ! 小娘!! あんたを細切れ八つ裂きのけちよんけちよんのメツチャめちやにしなきゃノエルの気が済まないのよ!」

「だからそういう事はこじややるなと・・・」

「滅してやるわ！さっきのあんたが送り込んできた変態達のようにね！ノエルが受けた辱めを10億倍にしてお釣りが出るくらいとこんと追い詰めてやるんだからああ！」

その変態達つてのは百樹達だつて事は間違いないな。いや、それについてはすまないと思つてる。

というかなんかヤバイ雰囲気になつてるからそろそろ逃げたほうがいいぞー杏樹。

「あははは。ノエルちゃんつて面白いね！」

「つてお前は落ち着きすぎだ馬鹿者！！少しは場の空気読んでくれ！」

「あ・・・あなた、この期に及んで・・・ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」

ほら、だから言つたろうに・・・またノエルから変な殺意がひしひしと向かつてきてるし。

効果音すら自分で言つてるのはもう末期症状つてやつですな。

と言つかヤバイヤバイ！またなんか構えてるし！

皆さーん、逃げて下さーい！何かが飛んできますよ！

「喰らいなさい！消えなさい！滅しなさい！最終奥義〜！」

「いや、流石にそれは俺もやば・・・」

突如出現したそれはあきらかに元〇玉にしか見えなかった。それは置いて問題はそのものを喰らったら、と思った事だ。

「百樹もないし、つうかこれはほんとヤバい状況だろっ!？」

「喰〜ら〜い〜な〜さ〜い」

今もノエルは呪いの言葉を杏樹に向けている。ていうか杏樹も・・・いい加減笑ってないで逃げるコラ！

「滅〜し〜な〜さ・・・おっとと・・・」

絶対危ない！危なすぎるっの！そんなもん掲げながらバランスくずすんじゃねえよ・・・ほんとハラハラさせるやつらだよ。

そしてほんとピンチだ。もうアイツの目には杏樹しか定まってないな。

杏樹を連れながら後ずさりをするうちに既に後には大きな壁が迫り、そして前にはノエルが恐ろしい剣幕で迫っていた。

蛇に睨まれたカエル、と言う言葉はまさにこんな状態なんだと実感した・・・

「さあ・・・これでおしまいにするんだからあ・・・」

ニヤリと口元が笑っていたが顔は本気そのものであった。

「まてまて！ちょっと落ち着いて目を覚ませ！そうすりゃ少し落ち着い……」

「滅しなさい！この悪魔ああ！！」

「全然聞いちゃいねええええ！むしろ鏡見る！！お前が悪魔だと……っ！！」

バカでかく巨大な、そしてその塊は標的を確実にしとめようと殺意をもって向かってくる。

大気は震え感覚的に諦めがつきそうになってきた時、その音は鳴った。

キーンコーンカーンコーン

錆び付いたような壊れかけの不器用なその音は昼休みの終わりを告げるチャイムだった。

普段から聞き慣れた不協和音はこの状況ではかえって惨劇にほど近い。

長く永遠のように続いたチャイムが終わる。
ふと雅人はある異変に気づいた。

(妙に静かだよな・・・)

その疑問は正しかった。先ほどまではこの世の終わりではないのか
というような光景だったのに今はこうして不気味な静寂が広がって
いる。

ゆったりと恐る恐る瞳を開けてみた。

やはりそこにはノエルが元〇玉を掲げたまま立っていた。
しかしその姿は彫刻のように固まっていた。

タイトルにしたら『元〇玉を掲げる少女』だろう。

冗談はさておき問題はなんでこんな事になっているかだった。

チャイムが鳴ったからと言ってノエルが攻撃を止める理由が全く思
いつかない。

ましてややると決めた事はやるといふ恐ろしいやつだ・・・大抵の
事じゃその信念は尽きる事はないだろう。

そうしてる間にも時はどんどん過ぎていくのが分かる。

そんな中、その緊張を解いたのはとうの本人が放ったその一言だっ
た。

「戻らなきゃ・・・」

静かに言い放たれたその一言は俺の耳にもハッキリと、そう聞こえた。

はい？とクエスチョンマークが沢山浮かんだもんだがそんな俺らをよそにノエルは間髪入れずに喋り続ける。

「教室に……戻らなきゃ……」

その言葉を最後にノエルのそのつぶらで大きな瞳からはダオツ！！と溢れんばかりの涙が豪流のように流れ出た。まるでその光景は下手な漫画の1シーンのようだ。

「戻らなきゃ……お母さんに叱られる」

ノエルは何を思ったのか両手に掲げた元〇玉を突然光の粒のように消滅させた後、ドアに向かいトボトボと歩き始めた。その後ろ姿はとても哀愁が漂っていた。

「っと待て！ノエル……いきなりどうしたんだよ！」

と、引き寄せたノエルの顔はそれはそれはヒドいものだった。

「成績が……」

「はい？」

涙を滝のように垂れ流し、その瞳は涙でコーティングされてある意味凄くある意味近寄りがたい。

「これ以上学校の成績が落ちたらお母さんに……ガクガクガクガクガクガク」

膝から合わせて全ての四肢が笑って震えている。なんていうか……ゴメン、面白いわ。

「今日はノエルが来たばかりなのに小テストがあるみたいで……もう絶対テストで一桁の点数とかとっちゃいけないから……お母さんに……ガクガクガクガクガクガク」

(そうかつ!!)

俺は瞬時に分かった。

ノエルはアホな子だと……

ノエルはそのまま見たことも無いような萎んで倒れそうな顔をしながら、途中で足元に落ちてる空き缶に躓いて盛大にこけながらもそれを気にしないように起き上がりそして恐ろしくゆっくりと這うようにして歩いていった。

その顔はまさしく助けを求めているような寂しい顔だった……助ける気は全く無いんだがな……

しかしノエルがいう母さんの『叱る』とはどんな行為なのか……知りたいような知らぬが仏なのか……知らない方がよほどいいんだろうな。

世の中には知らない方がいい事もあるんだろっし・・・

何にせよ学校のチャイム・・・助かったぜ。

第5夜 瞳をトジテ (後書き)

「ところで雅人君・・・」

ふとしたタイミングで杏樹が話しかけてきた。

「ん？何？」

「雅人君は授業出なくていいの？」

「いや俺ぐらいの男になると・・・」

それ以上、言葉が出なかった。理由などはとっくに分かっている。

「戻らなきゃ・・・教室に・・・」

こっちも小テストだよ、バカやろう・・・

第6夜

Standing alone but together

(前書)

1ヶ月ちよつとに一度更新ペース・・・もうちよつと早く書けるよ
うになりたいな・・・

第6夜 S t a n d i n g a l o n e b u t t o g e t h e r

学生にとって一番の至福の瞬間。

下らなく長いと感じる授業が終わるとそれが学園中に鳴り響く。

ある者は自分の将来を担うだろう部活動にひたすら汗を流し青春を謳歌する。

ある者はアルバイトをして自分の欲しいものを買うために必死に頑張る。

その者達はそれを待っていた。

135

キーンコーンカーンコーン

帰りのHRの終わりを告げるチャイムである。

学生の幸せといたらそんなものだ。

だけどそんな幸せを誰もが幸せだと思える事が本当の意味での幸せなのかもしれない。

起立と礼、というごく当たり前の言葉の羅列が学生達を昇華させる。

そんな放課後の過ごし方など人それぞれだ。

人それぞれ

なかには無機に過ごしている者だっている。

この少年、山本雅人もその一人だ。

高校二年生という中途半端なポジションにいる中、何に熱中するわけでもなくなののである。

元々運動神経がずば抜けて優れていたから部活動の勧誘などは星の数ほど受けさせられた。

けど雅人にはその中に熱中するものなどなかった。

彼は何も無かった。

幼い頃から闇の中、暴力にあぶれ支配し誰も近づかなくなった時人はどこか彼を敬遠していた。

ここには何も無い……

そう思ってきた頃だ。

彼女はやって来た。そんな世界に彼女は 俺の世界に光を差し込んだ。

死んでいるように生き、生きてるように死んでいた俺にとって彼女は光だった。

眩しく、いつでも強く逞しく生きていた。

俺は幸せだった。

彼女がいる世界は輝いていて楽しかった。

俺は思ってしまった。

こんな日がいつまでも続けばいいと

俺はそう願ってしまったんだ・・・

「お兄ちゃん・・・帰りはどこ行こつか！！ノエルはね、日本に来てからまだ美味しいもの食べてないんだ・・・だからさ・・・」吉田屋』の血肉したたる牛丼が食べたいな」

「だ、か、ら・・・」

ノエルがこの学園にやってきてから半日が経った。正直なところノエルのこのバカっぷりには心底困り果てている。ある意味尊敬出来るほどだ。

だ、っ、て、さ、・・・

「ノエル・・・？今は何の時間か分かっていらっしやりますか？」

「帰りのホ〜ムル〜ム〜」

よく分かっていらっしやる・・・

「じゃあ出ていこうか」

相変わらず俺もアツサリ言うものだ。つつかこんぐらい言わなきやコイツは効かないしな。

「やくだ〜っ！！だつてノエルはお兄ちゃんと吉田屋の血肉したたる牛丼を食べないと気が済まないんだから〜！もうこれは絶対なんだからね！」

あつこりや全然効いてないわ・・・

「だからまずアンタよ！ノエルとお兄ちゃんの仲を引き裂こうとしてるこの悪魔めっ！！今から成敗してやるわ・・・」

ビシィッ！と人差し指を向けられた方向にいたのは杏樹だった。まあ当然と言えば当然なんだがな。

でもとりあえず杏樹としては全く身に覚えがないわけで・・・ああ、もう理解出来ないでポケットとしてますね。

いやまずその無垢な笑顔を向けるのは止めてくれ。ノエルが暴走するだけだから！

「や、や、ヤッパリやるしかないわ・・・やってしまっしかないわ・・・」

「頼むから本気になるのはやめてくれ・・・頼むから平和に過ごさせてくれ」

俺の切な思いはコイツら（主にノエル）には届かず教室の中はホームルームそっちのけで『たかし！見ちゃいけません！』コールが共鳴するように聞こえていた。

何？これ流行ってんの？

その略して『た見』コールが鳴り響く中、いつもの（とりあえず今日からだな）やり取りが始まった。

- 1・ノエルを必死に宥めてみる
- 2・杏樹がノエルに優しくしてるつもりが逆効果
- 3・俺が一番とばっちり

もうほんと散々です。

ああ〜なんかまた変なの飛んできた〜

「ぐわばるっっ！……！」

「こうして俺の平穩な筈だったホームルームは無惨にも過ぎていった・

「やつくそくやつくそく!!お兄ちゃんと吉田屋!吉田屋・・・・
・ってなんでアンタがいるのよ!この小娘ええええ!!」

これはまた綺麗なご対面ですな。

ノエルにはちよつとトイレに行くからって言って脱出したの
に・・・どうしてこう・・・勘のいい子!!

「お兄ちゃん!!アイツ始末しなきゃ私達幸せになれないよ!吉田
屋の牛丼食べれないよ!」

そうか・・・お前の幸せは牛丼が食べればいいと・・・

「血肉したたるやつだからね!!」

「いや、ちゃんと教えたいんだが吉田屋にそんな裏メニューは存在
しないだろ」

そう言ったらノエルは頬をプクッと膨らませ不服そうに俺を見て
きた。

その光景はなんかの新しい生物を見ているようで面白い。

俺は少し悩んでいた。それは『今日』であるが故の事だったから。

「えつとさ……」

理由を考える事にけだるさを感じたのか髪をかく。

「いや……なんてかさ、今日は俺と杏樹で行くところあるからさ……」

「じゃあノエルも行く……!!当然貴様は無しだ小娘……!!ふあふあふあつ!」

「……ちよつと今回は違うんだ。悪いな、ノエルは連れてけない」

ノエルの言葉が止まる。突然だ。

あれほど騒がしくしていたノエルが俺のたったその一言により黙り込んでしまった。

「悪いな……なんか気悪くしちゃって。だけどちよつとこればかりは違うからさ……」

「でも・・・っ!」

はっと出たノエルの一言。共に顔は悲しみに歪んでいる・・・

「一緒に行くくらいは・・・いいでしょ?お兄ちゃ・・・」

今のノエルの気持ちぐらい俺にだって分かっていた。だけどその時はなんて伝えればいいか。それが分からなかった。

「悪い」

それは圧倒し、否定する言葉だった。それを放った俺にさえ少なくともその時、そう感じた。

「そう・・・」

返ってきたのは素っ気ない返事だ。ただ返しただけという。

だけでもその瞳は違った・・・冷たく深い溶けない氷のような瞳だ。

それはまるで俺を睨めつけるようにじっとりと見つめている・・・

「いいよっ！しょうがないよね、それなら！じゃあノエル行くから」

途端、人が変わったかのようにいつもの明るく気楽なノエルがいた。全く別の者に、人はこれだけ変われるのだろうか？

「ノエ……」

どうしようもない気持ちに襲われ、声を掛けた先にノエルはいなかった。

「悪い……」

分かってるさ。『今日』は仕方ない……その言葉が何かを押さえ込む。

そして自らをも

人は何かにつけて『白』を好む。

清楚で汚れ無きその色は人から愛されはする。

だがなぜ人はこの色を身にしないか・・・

答えは一つだ。

罪の意識を持っているからだ

人はある日、汚れ無き純な『白』として生まれその生の始まりとす。そして長きに渡る人生を様々な出逢い、出来事と共に生きていけばそれぞれ別の色となる。

青、黄色、緑、赤にも、そして朱にも・・・黒にさえも染まっ
ていく。

だから人間は様々な罪という色を背負いながら生きる。

故に『白』とは罪なのだ

真っ白な壁、真っ白な天井いつまでも続く真っ白な廊下。

まさにここはそれらを象徴とする場所である。

学校から歩いて30分ぐらいに位置する、『百合ヶ咲病院』は隣に教会までも設置する大きな都市型の私立病院だ。

ここに俺と杏樹は来てる……

今日はあの『日』だからだ。

売店に立ち寄り見舞い用の菓子を買う。店員に一言、どうもただけ添えた。

それから後は単調な行動だ。真っ白に広がるカーペットのような廊下を渡るだけだ。

コツコツと廊下を歩めばそれに反響して甲高い音が淡々と返ってくる。

そんなつまらない反応に耳を向けながら俺は少し考えていた。

(俺は……お前に何か出来たのかな……)

ずっとそれを今まで考えてきた……

全ての物事には限りなく意味がある。

あの日俺が手にした力、それはとてつもないものだった。だから今もこうして杏樹がいて歩いている。

だけど その影で色々なものを失いかけた。

それは幼い頃から今までを共にしてきた大事な……大事な仲間だった。

(なあ・・・孝太郎)

103号室。なんともキリが悪い数字だ。だが通い慣れた今では何となく嫌いではない・・・

そしてここまで来れたのも考えてみれば1ヶ月ぶりだ。

今まで来てみれば面会謝絶、面会謝絶の繰り返しだったのだから。

考えてみれば当たり前の事だろう・・・あの3ヶ月前、孝太郎は生死の境をさまよっていたのだから。

(それでもお前はあの時、俺を送っていつてくれたよな・・・)

深く、深い傷が蘇る。

こうして部屋の前まで来ているのに・・・それ以上が踏み出せない。

ずっと今までもそうだった。会おうと思えば部屋に入っていけば会えるのに・・・いつもそんな感じだ。

(なのに・・・俺は何一つお前にしてやれなかった)

あの日の『大災』によってもたらされたものは母さんによって人々の記憶から消されていた。それどころか崩壊した建物、公共物すら

元の姿に戻った。

ただど人々の心や体の傷は癒える事は無かった。

一夜にして人々に降り注がれた原因不明の大災害。

ニュースではそう報じられてた。

建物などの建造物は全くの無傷なのに人々だけは大小問わず原因不明の怪我などを負った。

だから病院などは日夜怪我人に追われここ何ヶ月かは大変な騒動だった。

孝太郎のやつもそうだった。あの日、母親を守るために自らを省みず守ろうとした。結果としてはよかったはずのその出来事は

(くそっ・・・！)

自らに問いかける。お前は何か出来た、何をしてやれた、と。

だけど浮かぶのは罪の意識のみだ。

親友すら守り通せなかった無意味な力だと

俺は咎人だ。

「へ・・・」

息をついた。何も変わらないし変わろうとしていない自分がこれほ

ども情けない存在でしかなかった事に気づいた。

「また、だな。・・・」

そつとため息をつく・・・それは俺の心の叫びだったのかもしれない。

「杏樹、やっぱり帰・・・」

俺の告げようとした言葉よりも早くにそれは来る。俺の手にそつと何かが触れた。

とても暖かい・・・振り返って見えたそれは杏樹の手だった。

彼女は下を向きながらずつと俺の手を握っている。微かに震えている事にも気づいた。

「杏樹・・・」

だから俺は動く事も出来ずにただ立っていた。

彼女が言わんとしている事はよく分かる・・・それぐらいは俺にだって分かつている。

だけど行けないんだ。俺にはその資格など、無い。

「ねえ、雅人君」

彼女は口を開いた。手だけでなくその口調すら震えているようだ。

「ゴメンね・・・」

俺は自分がどうしようもないバカだという事に気づいた・・・彼女は、杏樹はあの日の事を覚えているんだ。そして自らの暴走した刻印の力によって・・・

俺は とんだ大バカだ

俺は1人で苦しんでいる気ですらいた。

「杏樹」

なのに彼女は一言も言わずずっと自らを罪として背負っている・・・そんな彼女に対して俺はなんて言えばいい。

「俺は・・・」

もう迷いたくはないんだ

「悪かった・・・」

精一杯に言った一言。俺はその後顔を上げた。

「行くよ。もうアイツに背は向けられない」

放たれた言葉は真つ直ぐに貫く事が出来なく今まで悔やみ過ごしてきた自分への意志の表れだ。

そんな俺に彼女もいつもの、そんな笑顔で応えてくれる。

「行こう。雅人君」

手を繋ぎ、俺は彼女の手を引いた。そして目の前にそびえる今まで越えられなかったその壁へと2人で手を添えた。

もう迷う事は無かった、迷っても仕方なかった。

ずっと思ってた。

何がしてやれたか

答えはこうだ。

結局俺はあの時何もしてやれなかった。

だけど

今は踏みだそうとしている。たとえ果てしなく続いていく先の見えない闇だろうとこれからはそれを照らす仲間がいる。

信じる仲間が

それが今、自分の出した答えだ。それに変わりはない。

扉を開ける。

今の今までずっと迷っていた。だけど今はもう迷わないでいける・

・結局それは確信でもなんでもない。
だけど

そうだと信じていける

単調に鳴る電子音。それは心電図だ・・・人の命の現状を告げる、
いわば目安のようなものだ。周期的に安定して聞こえるその音から
してアイツは安静なんだと思う。

目の前に視界を覆い隠さんとする存在に気付く。その真つ白なスラ
イド式のカーテンは静寂に包まれるこの空間にはよほど合うように
不気味だった。

その向こう側に、ずっと辿り着けなかったアイツがいる。
今だってこの心臓がはちきれんばかりに鼓動を打ち上げる。ちょっ
とした拍子で体から削がれてしまっそうだ・・・

時計の秒針が刻を指す音がハッキリと聞こえる。それほどに神経が逆立ち俺を狂わそうとしている。

(らしくねえ・・・)

ふと自分に問いかけた。

(らしくねえよな・・・)

いつもの俺はアイツのところに転がり込んでズガズガと押しかけて行ってたはずだ。なのに今はこんな目の前に立ってるはずなのにこうしてただ無駄にたたずんでるだけだ。

こんならしくない・・・

「ああ！！・・・くそっ！！」

もう我慢の限界だっ！クソ野郎・・・

俺の体は一線にベッドへと向かっていた。体が、今までしまい込んでいた俺自身がそうさせた。

カーテンを思い切り引っ張り上げるようにして開ける。

そして最初に見えたのがえらく簡易的なパイプ椅子だ。それ目掛け他は見ないようにしてズガズガと駆け寄り・・・一気に座る。

そのままフウ、と深呼吸をして自分を落ち着かせる。
幸い、そこにはいつもの自分がいた。

もう大丈夫だ

紙袋を抱えた右手を『アイツ』に向かって突き出す。

「よ、お・・・久しぶり・・・」

それでも俺は照れくさかったのか顔だけは合わす事が出来なかった。
それが精一杯だった。

153

「・・・雅人？」

返ってきたその声の主は驚きを隠せない様子だった。

「・・・まさ・・・と」

なんか気まずい雰囲気広がってる事に耐えれなくなった。だから
チラッと視線をアイツに向けたんだ・・・

「ごめんごめんごめんごめんなさいごめ……………久しぶり」

……………

「ええ……………なんでそんなきりの悪いところで区切るかな……………」

ようやく、コイツ向き合うことが出来た。

長く埋まることの無かった空白を今はかつての親友がこうしていてくれたから……………

「まあ……………久しぶり」

今はこうして笑える

俺達は笑った。

「杏樹さんも元気そうだね。すんごい嬉しいんだけど……………雅人はやっぱり変わんないや。良くも悪くも」

「ほう？最後の言葉は余計だと思うんだがな……………」

「ああ〜ごめん」

いつものやり取りだ。その日常が戻ってきてくれたのだと少し嬉しくなった。

「・・・まあまたこうやってみんなと会えて良かったよ。つい最近までほんとりハビリ漬けで誰とも遊べなかったしつまらなかったからさ」

その言葉が不意に記憶を引きずりあげる。

今までなんて言えばいいのかわからなかった自分 何をすればいいのかわからなかった自分。

だけど今は迷いなんてさほども無かった。

「悪いな・・・今頃になって来ちまってよ。なんてか自分の中ですつと逃げてたつてのかわ、今までそうだった。自分の都合のいいように考えて苦しんでるものから目を逸らしてきたんだと思ってる。だからこれからは・・・」

「もういいよ。雅人、お前が思ってるよりずっと僕には伝わってる、届いてる。だからもう大丈夫」

不意に孝太郎は俺の後ろにいる杏樹へと声を掛けた。

「杏樹さん、ありがと。雅人が今こうして『ここに居る』のは杏樹さんのおかげだと思う・・・雅人ってみんなが思ってるよりずっと

脆くてさ、弱かったりするとこもあるんだけど・・・それでいてキレやすいしすぐ手はあげるしそんでもって意外に細かいところにはほんと細かいし」

「オイツ、ちよつと言つ加減を考えて・・・」

孝太郎は突然、頭を下げた。杏樹へ向かってだ。

「だから僕はお願いする。これからも雅人を支えてくれ・・・」

誰もが予想すらしていない事だった。それは言葉を掛けられた杏樹でさえそれに吞まれているものだと思っていた。

「それは違います、孝太郎君。かつて・・・私も独りだった。ずっと独りで今まで生きてきた。どんなに苦しんだって独りだったから、しつかりしなきゃって・・・でも内にある自らの闇にとらわれるような気がして毎日怯えてた」

杏樹の口調は強く、だけどどこか悲しいようだった。

「でもそんな時に私は雅人君に会う事が出来た。だから今はどんなに苦しんだって怯えていたって雅人君と一緒にならどんな事だって前を見上げて進んでいける・・・」

それが彼女の胸に秘めた想いだった。

「私はそう想っています・・・」

「杏樹、お前・・・」

少なくとも俺が考えてるよりはずっと杏樹は強かった。その強さに俺は今でも支えられている、そう感じた。だからこそ杏樹の存在は大きくなっていった。

「は〜いつ!! ！つたく怪我人にそんなイチャイチャしたもの見せつけるなんて・・・ああもう2人も帰りなさい！オジサンは耐え難いです！そんな雰囲気は後で2人で楽しみなさいよ!!」

その雰囲気を作ったのはどこのどいつだバカやろう・・・なんか恥ずかしくなってるのはこっちなんだよ。

ほら、杏樹も恥ずかしくてなんも喋らなくなったし・・・それに気づくのも遅かったけどな。

「なあ孝た・・・」

「はいはいはいはいいい君達が帰らないんだったらこの邪魔者は去りますよ〜。そうさせたくないならさっさと2人で帰路に行きなさいな!!」

こいつ・・・無駄なところだけは計算だけえんだよ、このっ・・・

生寝てやがれやああああ！！

きらめく俺の連撃は病院内である事を忘れ、1人の男を絶滅させる勢いで刹那に放たれていった

「ああ〜もう分かった分かった！帰っからよ・・・じゃあな！！行こうぜ杏樹」

「え・・・あ・・・あ、はいっ！あ、待って雅人君・・・」

そこにいる息も絶え絶えな生き物に杏樹は未練を残し、それでもその場を後にした。その姿は見るに耐えないものとなっている。

「じゃまた来るからよっと。そんじゃな・・・」

扉を閉めようとした時、静かな空間である事が当たり前前の病院に怒涛が響き渡る。

「雅人っ・・・！！」

それは孝太郎の声だった。

「僕さっ！今週中にはここを退院出来るからさっ……また楽しみに待ってるよっ！！」

俺らは2人で笑ってやった。

「当たり前だろうがよ……」

俺は後ろを向いたまま親指を立てた右手を上げ、アイツに掲げた。

「待ってる……」

アイツも笑ってる。そんな気がした

いまだ微妙な空気が取り巻いている。これはどうしろってんだあのバカ孝太郎め……

「まあアイツも今週中には退院出来るって言ってたしこれで当面問題は無くなったな！」

「……」

反応が無い

「しかしアイツも変わってなかったよなあ！あのアホさ加減といい

毎度の事ながら見てらんないしよ・・・って」

杏樹は俺に構わずドンドン歩いていく。

なんかそんな状態が辛かったのか俺はたまらずさっきまで喉に詰まっていた言葉を口にした。

「き・・・今日はさ、なんかありがとな。お前がそこまで考えてくれてるなんて俺、全然分かってなくてさ。なんてか・・・どう言ったらいいか分かんないけどよ。ありがとな・・・」

ピタリと杏樹は歩むのを止めた。どうやら俺の思いが通じたらしい。だけど顔が微塵も動かないで前を見ているようだった。

「・・・杏樹さん？」

変な予感。それが頭をよぎった。

「杏樹・・・おゝい、杏・・・やっぱりか」

俺はここまで信じてきた自分に、そして信じさせた杏樹に少し落胆した。

「こいつ・・・立ったまま寝てるよ」

見事な寝顔だった。首をかしげフラフラとしながらも絶対に倒れない、そんな凄いバランスで杏樹は立っている。これじゃあ俺の言葉が聞こえないわけだ・・・

「ったく・・・」

ただどこれじゃあ後に倒れる事は目に見えている。俺は杏樹の体をすくい上げおんぶした。

「世話かけさせやがって、男にこんな事させんなよ」

ぶつぶつ言いながらも俺は少し安心していた。彼女があの時口にした言葉によって・・・

(まっ、なんつうのかな・・・)

今までは恥ずかしくて言葉にする事が出来なかった。ただど今日まで、支えてくれた彼女に対してこれだけは伝えたかった。

「ありがとな」

今出来る精一杯のありがとうをキミへ

第6夜

Standing alone but together

(後書)

「うん・・・」

・・・待てっ！？まさか今ので起き・・・

顔が思わず赤面した。

「うーん、ファンタスティック・・・」

くそっ・・・なんで寝言なんだよ・・・

ちよつとベタな展開に期待した俺がバカだった。
そう思い正面に振り返った時だった。

その『殺意』を感じたのは

(なっ・・・)

それは先ほど向いていた後ろから放たれている。俺は一生の素早さ
で振り向いた。

待っていたのは大きな『口』だ。
それも杏樹の・・・

「杏樹・・・さん？」

反応がないところを見るとこれは寝ているらしい。

と言うことはこの状況を脱するのは『不可能』である。

「うーん、デリシヤス・・・」

その瞳からして多分彼女の視界には多分大好物が映っている事なん
でしょうな。

ああ、絶対そうだ！だって目が異様な輝きを放ちながらこっちに向
けてるからな！！

つうか無理だ！俺は逃げっ

逃げられねえ状況じゃんかよ！！

いや、よく考える？

そう言えば毎回こんな展開だったな・・・そう思えば諦めがつくか・

・ ・ ・ つてつくわきゃねーだろうが！！！！

迫り来る狂気・・・

「まっ・・・！！！」

そこに逃げる術は無い。

「うひゃああああああああああああ！！！」

その悲鳴は切なく誰にも届く事は無かった・・・

第7夜 | H a t e | (前書き)

随分更新が遅くなりました。なかなか大変な時期になってまいりました。o (| |) o

第7夜 I H a t e I

「そつと・・・そつと・・・」

皆さんこんにちは。山本雅人です。こんな登場ですみません。

そこはどこ？中身ボロボロ、外見ズタズタの我が家（和室6・5畳
台所トイレ付き）です。

はあ、それは分かってるんですか。じゃあ何かと？なんでこんな事
してるかと？

ぶっちゃければ俺にも分かりません。

いわば本能？

本能がそうさせてるんだね？よく分かってらっしゃる・・・

もうあれです。藤○弘。もビックリな臨場感です。アマゾンの奥地
に行つて変な遺跡を発見して他の隊員の安否を確認する・・・そん
な頼れる隊長に私はなりたい・・・って・・・

うわっ！！野生の狼だ！気をつける・・・奴らは匂いで俺たちの事
を嗅ぎつける。ここは慎重に行こう・・・

「雅人君〜！！そろそろ晩御飯だよおお！今夜の献立はいかほどなもので・・・」

ほんとまあ・・・

「お〜まあ〜えええ〜はああ〜なんでこんな・・・こんなベストでベタなタイミングでいつもやって来て俺に不幸を授けようとするんだああ！！！」

「えっ・・・えっ・・・なんでえ！もっもしかしてご飯の時間までまだまだでしたっ！？とりあえず雅人君おちついて ふあ！？」

「これのど・・・こ・・・が落ちて着いてられるんだ・・・杏樹、ええ！！！10秒で答えよ！！！」

「ふおぬあくうあぐゆをおあふえいまふいた・・・」

訳・お腹がへりました。

そうやって俺はここ目の前にいる狼女、杏樹の耳と口を同時に振りまわらせている。

「ふう……」

そして俺山本雅人は自分が振りあげてる事で杏樹のやつが喋りきれない事にようやく気がついた。

最近の自分はどうも乱れがちだ。そう思うのも無理はない……だって目の前にいる天然活力問題児な狼女とか、翼を生やした超絶吸血鬼な自称俺の妹とか……あの意味の分からないドが10個ぐらい付きそんなサディスティック生徒会長とかさ、んで一番の問題は……

忘れてた……

俺は絶句した。一番忘れてはいけないものを忘れてしまっていたのだ……

それは近代が生んだ科学的大量破壊兵器や人を生きる屍にしてしまうウイルスなどでは無く、まさに『それ』だった。

グウォンッ!!

何かがその場を飛翔する音が響いた。

焦り、辺りを見渡す。何があっても驚愕を隠せない　まさにそんな
雰囲気か漂っていた。

今更ながら端から見たらそれはもうバカらしい光景だどつくずく思
う。

うんほんと・・・

ここはほんとに日本かよ、ってね。

なんで家に帰ってきてまで・・・いや違う！家に帰ってきてるから
こんな事になるんだ。

・・・って自問自答してる場合なんかじゃないんだよ！

「やられるわけにやいかねえん・・・」

刹那、右後ろから殺意を纏った気配がこちらに向かってはぜる。

「　　だいよつとおおおー！！」

間一髪、まさに避ける事が出来なければ一撃で葬られる。

まさにその本気で放たれた一撃だった・・・

「この・・・ってホントに死ぬところだったじゃないか！このバカあ
・・・」

「あ、がなんだって？続き言ってみな？」

その言葉に俺は怖気をこの身に感じた。まるで生きた心地がしない。俺の視界に映る杏樹は何かに酷く怯えるように部屋の端でその大きな目を丸くしながらガクガクと雨に打たれた子犬のように震えていた。

そして杏樹の指は不意に俺を指さす・・・

何をさしているか、もうそれについて考えたく無かったが・・・と言いか答えは1つしかない事はよく分かっている。

人間諦めが肝心だ。

かの偉人、なのか・・・？そんな人がそう言っていた気がするよ。

そうだな。諦めが肝心・・・

「た、たたたたただいま！！」

緊張と恐怖が混ざり合った変な感覚に陥って嘔みまくったあげく語尾が甲高く跳ね上がったのはよく覚えている。

そんな俺に対して目の前の悪魔は

すごい笑ってるよー！（もう棒読み）

途端、湧き上がったように轟音が悲鳴のように部屋全体が震え上がる。

そして彼の悪魔はあの満面の笑みから一転、いつもの破壊神へと姿を変えた。

「 . の 全々っ〇¥@* ああ ー！！！」

その悪魔はネジが一個二個ぐらい飛んだように何か叫んでいるようだったが、もう誰もその呪詛を聞き取る事は出来なかった。

宙に舞う紙切れが如く、ただ無力に消し飛ばされていく俺。

そして目の前に広がる世界は霞んでいき全てが真っ白になっていった・・・

今日初めて、たった1体の悪役怪人に対して5人で闘う戦隊ヒーローの気持ちってやつがちょっと分かった気がした・・・

「さああてゝさあてゝ楽しい楽しい時間の始まりだね」

ぜんぜん楽しくありません・・・

「ほら・・・もっと楽しそうな顔して笑ってみるよ？ああ？」

って言ってる我が山本家最大の戦闘魔獣的姉の山本幸の顔は全然笑っていない。

むしろこれは完全な臨戦態勢な顔である。見れたものじゃ

「ん？何か仰りましたか？私の大切な弟君よ」

「いえいえ、とんでもありませんがな。お姉様」

逆らわない方が賢明である・・・

「んで？なんで白昼堂々こんな可愛い可愛い女の子のお部屋に侵入し、かつ何かを漁ろうとしたのかね？君達は」

「お姉様、口を挟めて誠に申し訳ありませんが今はもう夕方です。」

それに自ら可愛いブツ・・・女の・・・子とは・・・ブツッ!..!

空白の五分間。

「さて、喋りすぎた弟君は静かになったところで」

まるで吐き捨てられたボロ雑巾のように、いやボロ雑巾のほうがつぽと扱いがいいほどだ。そのぐらい今の俺は悲しい姿だ。

「そこんこの説明夜露死苦う! 犬っころ!!」

「.....」

「夜露死苦う!!」

「.....」

「夜露死苦う!!」

「.....」

「いい加減夜露死苦う!!」

すんごい異様な光景だ。

杏樹はその場に正座しながら顔を伏せ姉貴の言葉を微動だにせず一蹴している。だけどよく見てみたらこいつ・・・この状況でよだれを出しながら爆睡してやがる。よっぼどいい夢を拝んでいるのだから、その根性は素晴らしい。

そして姉貴は姉貴として一昔前に流行った今は死語として指定されている『夜露死苦』を熟睡中の杏樹に対して連呼している。しかも穏やかな顔も今となっては般若も卒倒させるぐらい恐ろしいものと化している。

これを異様な光景と言わず何と言おうものか。

「待て！！」

突然響き渡る声、誰も予想しえなかった声に皆がおののく。

そこには確かに奇跡が存在した・・・

「般若をバカにするなっ！！！！」

一言、般若である。

よく言えば般若のお面を被った学生服を着た変態が微妙にカッコイイポーズを取りながらドアの前に立っていた。

でもそのポーズ・・・やっぱり微妙です。

そんな一見して分かる微妙な般若に俺は少し期待していた　こんな未知の生命体が俺らに何をしてくれるのかと。

「ふはははははは！！！！さらばだ！！！！」

・・・

えゝえゝえゝえゝええええ！！

逃げた！般若逃げた！般若逃げたよ！逃げちゃったよ！！

しかもすごい速度なんだが・・・って何このオーラ！！

うわぁ、お姉様だいぶ怒ってらっしゃる。誰が見てもヤバいオーラ放っちゃってるよ。こりゃもう誰も止められないわな・・・

「雅人・・・」

「は、はいいい！！！！」

どす黒く突き刺さるような鈍く鋭い声が耳に届く。誰でもない、目の前にいる姉貴のものだ。

「ちよつとよ・・・殺ってくるわ、アイツ・・・」

異論などない。あるわけもない。ましてやそんなものがあつたら今この目の前にいる顔中切れそうな血管だらけなのに楽しそうに笑つてるに人に俺まで滅せられてしまふ、そう俺は感じた。

静かに俺は親指を立てて姉貴に向けた。

その瞬間、姉貴は飛翔した。

間もなく悲鳴がこだまのように聞こえたのは聞こえなかった事にしておこつ。

嗚呼、明日はワイドショーのインタビューに答えなきやいけないのか・・・

「あの野郎・・・結局あのバカみたいなお面は剥がせかつたぜ・・・」

ドタンツと力強く開いたドアからは姉貴がなんか満たされたような笑顔で入ってきた。きつとアイツも刀の錆びにされたのだろう。

同情する・・・

「お疲れさんつす！姉貴ぶぎゃつ！？」

機嫌を取ろうとジュースを持ってきた俺は床の畳に押しつけられた。何をされたかわけが分からなく俺はただひれ伏されていた。こうして何も見えない状態でもよくわかる。

きつと姉貴はそれこそ般若のような心と恵比寿のような笑顔で今の俺を見ているんだと、俺はそう思ってる。

「んでえ・・・」

そしてこう言う。いつも頭に血が登り全身にアドレナリンが駆け巡っている時はいつもこんな喋り方なんだ。

「どうしてこのうら若き神聖な乙女の部屋に侵入を試みたって？理由を原稿用紙一枚程度に抑えて簡潔に述べ、かつこの心意気に感謝して粗品を添えなさい。以上、さあ粗品よこせ」

人類至上これほど異常な物欲に長けた人類はいたのだろうか・・・とりあえずこれ以上突っ込まないのは俺の身の安全を考えてやめておこうと思う。しかしまあ・・・非常に残虐的な言葉だ。きつとこれだけで人を殺められるのだろう。

「ああーもう分かりました分かりました!!」

覚悟を決めるしかない・・・

俺は起き上がり事の真相を事細かに述べた。

「・・・なんて言うかアイツにさ、会ってきたんだよ。今日」

「まさか・・・」

「いやまさかって言うかアイツなんだけどさ」

「あの『戦慄！恐怖の膝蹴り』ボルケーノ・マリアか!!」

「いや誰だよ」

後に分かった事だがその『戦慄！恐怖の膝蹴り』ことボルケーノ・マリアさんと言う方は姉貴の謹慎が解けて最初に闘う相手の事らしい。

身長192センチ、体重105キロ。ホントに女性の方なのか心配だ・・・

「じゃなくて孝太郎だよ。孝太郎」

「んだよ。ビビらせんじゃねえよ全く・・・」

勝手に話を進めたのはアンタだろ。そう言いたいのは山々だがそれ

じゃあ俺の身の安全を保障出来ない。

俺も結構学んだものだ・・・

「んで孝太郎の見舞いに行った時さ・・・お見舞い買ってたんだよな。売店から」

「はいはいはい」

あんまり聞く気無さそうだな実際。

「んで見舞い渡して話して帰ってきたわけだ」

「ふん、いやはいはいはい」

「んで気づいたわけだよ・・・」

「へいへいへい」

「お金が無くなったので貸してくださいお姉様」

「断じて一切断る」

こいつ・・・さっきまで聞いてないような雰囲気だったのにいきなり拒否しやがった。

「いや〜そこをなんとか」

「これ持って部屋に帰れ」

と言って姉貴は何かを投げてきた。

よくよく見るとくしゃくしゃに丸められた紙のようだ。とりあえず原型に戻す作業をする事にした。

た、宝くじ・・・

「あのお姉様？」

「男なら夢を追え」

その冷徹な一言を言い終えると姉貴はいきなり目の前にそびえている襖を閉めた。そして俺らは部屋から閉め出された・・・

あの、この宝くじ・・・去年のです

「お姉様？この宝くじは去年のやつかと」

「大丈夫。当たってるには当たってるから、3000円」

「それじゃあ夢も何も・・・」

途端、空が暗雲に満ちる。今日の予想降水確率は全くの0%の天晴れなのに有り得ない雲行きだ。

あー雷まで。どうなってるんでしょうか。

それに答えるようにそのドアの向こう側からしっとりとした冷たい熱が語りかけてくる。

「滞納してる家賃今月分を合わせまして合計3ヶ月〜3ヶ月〜3ヶ月ついたら3ヶ月。ついでにリフォーム代合わせましてうん十うん万うん千うん百円〜ついでにそこにお気持ち代を含めましてざっと
　　天文学的数値」

「いやないないない」

ピカッ！ゴロゴロとなんとも古めかしい雷の表現がアパートの前を直撃する。

「うわっつと・・・」

雲行きがヤバい事になってきてる。てかホントにこの宝くじ(300円)でどっしると！！

「いや姉貴ホントに」

それ以上ドアに近づこうと試みた。

結果 全く近づけなかった。そのオーラのせいか・・・

ドア、というかアパートをどす黒い塊が覆っている。

ゾゾゾつと背筋をムカデがはつような感覚、そしてそれを超える恐怖が遅いくる。

「分かってるよな・・・？」

「はっ！はいいい！！！」

正直なところ少しも分かりたくはない・・・

でもね？逆らったらどうなるか知ってるから・・・ね？

しょうがないよな？うん。

「今月中にな。小僧」

ああ、不条理だ・・・

諦めて外へと俺は歩き始める。この目に映る光景はさっきまで暗雲立ち込めるような暗黒の世界だったのに・・・今となっては夕方だというのに小鳥がさえずりスッキリと晴れ渡った景色が広々と広がっていた。

ホントにあの人何者なんだろう・・・

それ以前に部屋へと置いてきてしまった杏樹の安否を俺は盛大に願いまくった。

そんな疑問と思いを胸に俺は旅に出る。

お金探しの旅へ

プルルルル、プルルルル

凍てつくような緊張の中俺は携帯電話という現代の象徴とも言える高性能な機械を駆使している。

普段は絶対に押さない番号、電話が来ても出たことがない、そんな番号に俺は電話を掛けている。

今となつてはこの番号が一筋の光であり希望なのである。信じがたいがこの状況では仕方なすぎる・・・

『もしもしー！ー！』

通じた。

光明が見えた！

「あ、俺俺！じゃあな」

じゃなくてじゃなくて・・・

「俺だけど、雅人だけどさ・・・」

そのたった一言がこの電話の相手の『スイッチ』を入れてしまつらしい・・・

それからの会話と言うものの・・・まさにそれは俺に対する機関銃のごとし異性への告白より甘い言葉の羅列だった。

「いや、ちょっと寒気がするわ。んで今日は、いや今日はな？ちとお願いがあつてよ」

そして本題へ切り出す。話した！全てをぶちまけた！もうプライドなんてなんのその。

『余裕でOKつす！』

というわけでOKらしいです。

『そう言えば兄貴い！！俺、兄貴の事がヤバいぐらい好き好きす
プープープー』

うん、即電話切ったよ。キモイし。

というわけで残すは本番のみ・・・

いざ行かん。戦場へ・・・

「ここ、か・・・」

アイツに指定された通りに来た場所。そこはうちのアパートから遠くかけ離れた所にある繁華街、古い言葉でネオン街と言われる場所である。

様々なビルが建ち並びそれぞれに煌びやかな装飾が施されており見るもの全てを魅了する。

その中で異彩を放つ、と表現すればいいのか他を圧倒するビルがここに『君臨』する。

「・・・入りたくねえ」

さつきから入る事を躊躇している俺はある事に気付いていた。このビルの周りにだけは人が寄りついていない・・・

「んなどこで俺は一体何をさせられるんだ？」

そんな疑問を胸に抱えたまま一步、また一步とビルへと向かう自分がいた。

もう分かっていたのだろう・・・後には引けない、と

稼ぐしかないんです・・・

ここはどうやら一階が貸事務所になっていて例の場所は二階にあるらしい。階段を一步步上がり、その度にこみ上げてくる緊張を抑えこむ。

そうこうしているうちに入り口まで来てしまった

そつだ。後には引けないんだ・・・

後はこの扉を引くだけ引くだけ・・・引くだけ引くだけ引くだけ・・・

「うおりやああああ・・・ああ・・・あ？」

『いらつしゃいませ!~!ようこそ、クラブ【STiEE】へ!』

「っへ?」

疑問、どこだつて?

誰もそれに答える気はないらしい。

その場に緊張と静寂がிரり混じつたような環境が出来上がる……

「ーにきい~!~!」

よし、嫌な予感がして来たぞ?

「あ~に~きい~!」

さて帰るか……つてうおおあああ!~!

「あ~にきい~!~!」

ムニユ

問1、これは何でしょう

答え、唇

唇、かぁ・・・

キレてしまうまで3秒前・・・3、2、はい

「って唇じゃねえんだよ、しらあああああああ！！」

残り1秒が来るよりも早く、手が出ていたのは必然だ。

とつても危ない放送禁止用語を発していたのかもしれない。

でもコイツ・・・よりによって、俺の・・・俺の、唇・・・

「うわああああああああん！！」

メロス、いや雅人は激怒した・・・

我を忘れ、建物を破壊しつくす。失ってしまった青い春への悲しみは癒える事は無い。

いつまでも吐き出されるその切なき獣の叫び。

誰にも届かぬ・・・17歳の嘆きだった。

「シクシクシクシクシクシク・・・うっうっう」

失ったモノはそれ程に大きなものだった。俺は忘れる事も出来ずただ隅っこに丸くなりおもちゃを取り上げられた子供のようにいじけるしかなかった。

さらば青い春よ・・・

「あゝにきい、ホントに大丈夫っすかあ？」

ポンと肩に手を置かれた。一体大丈夫って・・・

「だゝれゝのせいでだよ手前！」

「あはは、兄貴！そんなじゃれ合わないでくださいよ！みんな見てるのに、あれ？腕なんか回しちゃって・・・なんか兄貴が積極的グボアア！！！！」

「だ〜れがてめえなんか手え出すか！アホが！アフォが！」

極まった・・・この時、完璧に入った首締めをそのまま極めてしまえばどんなに楽だった事か、悲しみばかりが募る。

事実―それ以上腕に力が入らない・・・

それを意味するかのようにコイツはワザと視界に映るように『白い封筒』をヒラヒラと揺らして見せた。

瞬時にそれに反応したように俺の手は一瞬のうちに伸びていた。と同時に、それより早く封筒も視界から消え失せる。

「あ〜〜お金」

力すら入らない俺の声は情けない限りだ。それを見てか首締めから逃れたソイツは封筒と共に俺の手から逃れる。

「だ〜めっすよ ことわざでしたっけ？『働かざるもの食うべからず』って・・・ヒヤハ」

そう言つてコイツは封筒に愛を与えるようにキスをする。しかもこつちを見ながら・・・正直そんな趣味は無いから安心してやめて貰いたい。

俺はコイツを・・・この変態ヴァンパイア・シュリアをこれほど恨んだ事は無かった。

見た目は普通の人間と変わりない。それを利用して生き血をすする冷酷な生き物、それが俗に言うヴァンパイアである。

コイツもそう・・・あの日敵として目の前に現れた。

目的は分からないが杏樹の刻印を狙う『シュベルヌ』と行動を共にし俺らを苦しめた・・・はずなのだが今はこうして日本にすら馴染んでいる。

だけど正直毎日気を抜く事は出来ない。どこでまた前のような行動を移すのか・・・

そして今やそれだけではなく俺の貞操すら心配なのだ。連日連夜コイツと思われる視線に襲われているし、全く気が休まれる状態ではない。

そして今日の前でこんな事やってるし・・・

「あのさ、とりあえずなんで両手両足を捕まれてるんだ？」

現状としてはこうだ。なんか大の字の状態に仰向けにされて両手両足を他の男達がガツチリとつかんでいるという現状なのだ。

「んで？どうなるの俺？」

そこでシュリアの顔が素晴らしい勢いで俺の顔へと迫ってくる。いやほんと近すぎだし、もう3センチぐらいで接触だったの。

ふざけるなこの変態と・・・

「兄貴？」

「なんだよ・・・」

「お金、稼ぐって言いましたよね？」

ただ一言、その一言だけ言ってシユリアは立ち上がった。

そして俺に見えないように向こう側でゴソゴソと何かをしている。

「Let's・・・」

「は？」

「Show timeだこの野郎おおおおお！！！！」

『うおおおおおっす！！！！』

大地が揺れる、とかこの事だろうか。そこにいる皆の声が共鳴し合
い一つの声となっていた。

「なっ！なっ？なっ！？何iiiiiiiiiiii！？」

「お金が必要、って言いましたよね」

その瞳はどこか・・・真っ黒だった。
瞬時に俺は想像してしまった。

よくテレビのドキュメントで紹介されている夜のお仕事の数々を・

「おい！シュリアっ！！」

前方に小さな、薄暗く目立たない扉があった。

「はい」

立ち入り禁止と赤字で書かれているのが涙目になっている俺にもよく見える。

男達の中の1人がそのドアを躊躇なく開けた。

「俺って・・・どうなるの？」

震えるような声で必死に問いかけたその言葉ははたしてシュリアに聞こえたのかどうかは分からなかった。

でもアイツは確かに・・・

笑った

「汚さないでええええええええええ！！」

扉は閉じられたー

『さあ、始まりました始まりました始まりましたー！！今宵もお越しいただいたお客様の感謝デー！！』

「ねえシユリア・・・」

「はーい、なんですか？兄貴？」

「ここって・・・ヤツパリあれ、だよな？」

「なぐに言ってるんすか？」

豪華、とも煌びやか、とも違う独特の妖しさを放つ室内。そして立派にスーツを着こなし今宵も来てくれたお客様を存分におもてなしするあの仕事・・・

「ホストクラブスよー」

ヤッパリだ・・・

最悪だ。最も最悪なところに来てしまった。さっきは多分シユリアが指定してきた時間に来たから開店前だったんだろっから客なんて一人もいなかったけど、この光景は・・・

満員御礼じゃないか・・・

しかも最も俺のイメージでやりたくない仕事N01だよ。

なんでだつて？女の人多すぎじゃねーか！！

「つつわけで帰るわ。じゃ」

ガシッ

「兄貴い・・・」

必死でこの場から逃げようとする俺を逃がさんとするようにシユリアは俺の後ろの襟をガッチリと掴んで離さなかった。

「これだけは、譲れられまへんなあ・・・」

シユリアさん・・・なんか見たことないような口調に早変わりですね。

なんかVシネを生で見てるみたいだ・・・

「とまあ そんな流れで兄貴には今日1日ここで働いて貰います！」
さっきとは打って変わってVシネから恐ろしいほどの早変わり、流石です。

「……どうしても？」

「稼ぐためなら何でも頑張るって言ってましたよね」

あーあ、シユリアの顔がイラッと来てるのが目に見えて分かるわ・

「とじろでれ」

「はあい、なんですか？」

「何、この髪型……」

ホールの一角が鏡張りになっていた。そこで俺は確かに見失った……

流石のシユリアも口をしぼめて何も喋らないようにしていた。

「なあ、なんで教えてくれないんだよ……」

シユリアは……口を閉ざしたまんまだ。

俺は叫んだ。

「なんで・・・なんでリーゼントっぽい髪型になってんだよおおお
おおおい!!」

「すみませんすみません・・・でも、似合ってますよププッ」

「ほお、貴様笑う余裕があるとはな」

指をコキリポキリと鳴らす。十分に怒りと憎しみを込めて・・・

「それは・・・うちのスタイリストさんの趣味なんすよゝなんて言
うかあの人リーゼントとかパンチパーマとかが異様に好きで・・・
あれ？兄貴？」

『ぎゃあああああああ!!!!』

数秒後、俺はスタッフルームからその拳を真つ赤に染め上げながら
抜け出してきた。

「兄貴、あ・・・頭戻ったんすね!! そういうえばスタイリストさん
は・・・」

「あああん!？」

凄い剣幕で睨みつけていたのだと思う。おかげでシユリアはビクビクと震え逃げた。

ふう、と息を吐く。こんな騒動も今や普通の事となったものだ・・・
・大人になつた俺。

「・・・しゃあねえ」

「おおっ！兄貴！」

「だつてしゃあないだろうが。今夜は絶対金を稼がなきゃいけないんだ、ここで悲しんでも、こんな事で萎んでもしかたねえだろ！」

「兄貴い！やる気になつたんすね」

「まあ、な」

やる気、というか生きる為です。

お金がなきゃ今夜は・・・これからは生きていけないんです！
切迫した思いから生まれた『誓い』は俺の心を揺り動かすには十分だった。

「っしゃあ!!行ってきてやんよ・・・夜の街に・・・スーツを貸してくれ!シユリア!!」

何故か応答は無い。やる気を削ぎ落とされたような感じだった。

「おい、シユリア」

違和感を感じながらも俺は誰かが答えてくれるのを待った。

「すみません兄貴……」

そしてシユリアはそう答えたんだ

「今日はボーイさんとして働いてもらいたいんですけど……」

「そっつすよねそっつすよね……シクシクシクシクシク……」

冷たい、冷たい一言でした……

「い、いや別にやる気は無くならなくてもっ！影から支える縁の下の力持ちっすから！無くてはならない仕事ですからね！まあホストをやるにはいきなり来てポンとやらせろってのはやっぱり他の奴ら

に示しがつかなくなりますし・・・分かってくださいよ兄貴い!!」

ホストさんもボーイさんも高校生ではなる事は出来ません。ご注意ください。

「シュリア・・・」

「はいっ!」

もう・・・逃げられない。

なら

「おい新入り!フルーツ盛り足んねえぞ!追加しとけ!」

「はい!」

「おせえぞ!ついでにストッカーからシャンパン出しとけ!」

「はい！」

やるしかないじゃないか・・・どんなに辛くたってこうなったら働くしかないんだよ。

「まったく使えねえなあ！新人さんはよお・・・」

「つつ・・・！？」

「ほらっ！コイツでも飲んで目でも覚ましてやんよ！」
目の前の男はワインの瓶を高く上げ、そして逆に持ち変え俺に中身をぶちまけた・・・

こんな

「・・・てめえ」

「あん？なんか言ったか？新人さんよお。こちらに文句ある前にてめえの心配でもしてりああいんだよ！」

殺意、怒り、負を意味する二つの感情が交わる。それは今までにならぬような自分がある事に気がついた。

体が、驚くほど軽い。

「あ・・・？てめえ何笑ってんだコラ・・・ム力つくなあ」

気が付かなかったがどうやら俺は男を前にして笑っているらしい。何がおかしいのだろうか、何に対して笑っているのだろうか、それは今の俺にすら分からない・・・目の前の男は酷く苛立つのも当然だと感じる。

段々とその俺に対しての怒りを感情の外へと露わになって来ているのが嫌でも理解出来た。

「・・・決定え。教育的指導な。恨むんじゃねえぞコラ」

ソレは降り降ろされた

「ガアツツ・・・!？」

皆が予想出来なかった光景だった。降り降ろされたのは拳、それもソイツのものだ。

「なぐにやっちゃっててくれるの？俊慈君、それが君の教育的指導ってやつ？」

拳を放ったのはシュリアだった。

重く鋭い拳は誰の目にも止まらず、故に俊慈と呼ばれる男は一撃にて床へと叩きつけられた。

「何い、その目？」

狂気

真っ直ぐで純粹な瞳だ

それだけに、皆はそれを『知っている』故に恐怖で動けずその場に膠着させられていた。

「もっかい分かるように言っよ？仕事辞めたいの？」

俊慈のスーツのネクタイを掴み上体を軽く持ち上げながら静かにそして強く語りかける。

「ああそうそう。お前らもさあ・・・この人に手え出したらよ」

辺りはピンと静まる。シュリアは半ば意識の無い俊慈の体をその場に無造作に落とす。

俊慈の口元からは一筋の赤い線が走り始めていた。

それを人差し指で掬って・・・口に含んだ。

その異様な光景にそこにいた者は誰一人、ホストやお客の人例外なくゴクリと息を飲んだ。

「まあいいや 忘れちゃったし。はいみんなー仕事仕事！」

恐ろしく外れたのは言うまでもない・・・ずっとこける者さえいたのは当たり前だった。

それに本人が納得しているのだから問題が無いのだろう。皆もそれを『理解』している。

触らぬ神に祟り無しと言ったところだろう、それ以上誰も突っ込む事は無かった。

店の雰囲気も戻り辺りは何も無かったように正常と化す。

その中でシュリアは未だに倒れ込む俊慈にこう告げた。

「兄貴に手え出したらさこつなるんだって事頭によく積めときな・・・
・後は無いってよ」

途端に俊慈の顔は青くなりその場を後にした。

「そつと・・・」

シュリアは向かう。

「あゝにぎ」

「……ああ」

「どうしたんすか？あんなやつ兄貴なら」

「……」

「なんか最近兄貴様子が変わッスよ？なんか変わったって言うか……」

「そう、自分でも分からないが自分の中で何かの変化を遂げつつあるのだ。」

「それは侵食し徐々に俺の自由を奪っていく……」

「ん〜」

「困るような顔をした後シユリアは俺にこう言った。」

「昼休み、入れましょ 兄貴も疲れた事だし」

「ちょ……っと待て！なんだいきなり！手え引つ張ってんじゃねえよ！！」

「グイグイと手を引つ張られまるでオモチヤのように扱われた。」

「店内案内しますって！俺ここの店長なんすから」

「えっ……いやマジかよ……ってうおあああ！……マジで引つ張る力強いんだっての！！」

っている。

驚きながらホールを見渡すとそこにはところどころに『花』を『華』にするような、素人目の俺から見ても分かるような見事な花のアレンジメントが並べられている。バラ、カーネーション、スイートピーやガーベラがまるで一つの生き物のように華やかに、そして凛として飾られている。

本当に素晴らしいものだった。感無量とはこう言った事を意味するのだ。

本当に素晴らしいと感じた時、それは言葉にすら表せないものだと・

「これ、一応俺が全部セッティングしたんすよ」

「これ……!？」

「やだな〜普通に照れるじゃないっすか。そんな見られちゃったりしたら 兄貴はこういったのは嫌いっすか？」

嫌いも何も……本当に言葉が出なかった。

「……こんなとこいるのもなんっすから次!次行きましよ!！」

「あ……あぁ」

まだ圧倒されている俺の手を引つ張りシュリアはグイグイと先に進んでいく。

「兄貴さあ、なんか今悩んでるっしょ？」

突然掛けられた言葉だった。

「あつ凶星って顔ツスよ？それ」

まさに当たっていた。コイツはこんなところが鋭いらしい。心を読まれるのはあまり好ましくは無い……

「なんてか……すみませんね。さっきみたいな事とか……」

「さっき？」

「あの俊慈とかがっていたじゃないっすか……」

ふと思い出した。何故かは分からないがいつもはすぐ手を出していた筈の俺が

「なんか 分かんねえよなあ……」

確かに自分でも分からなくなっている。昔は何も考えずにやってきた筈だった。でも今はよく分からない。こうなった事実は認められない、認めざるを得ない紛れもない事実なのだ……ヴァンパイ

アだつてなんだつて、ヴァンパイア

何かが胸に未だ引っ掛かる

「なんつーか大変ツスよね。ほんと」

言葉を詰まらせた俺に対して気を紛らわそうとしてかシュリアは話しかけてきた。

「俺だつてホントは・・・アイツと、シュベルヌのやつと杏樹さんの刻印を奪おうと兄貴と対立したのに・・・今は何でかこうしてここにいて兄貴と一緒に歩いてる」

まさにそうだった。気が付けばこうしてこれを日常として過ごしている俺がいるんだ。

「まったく人間つてのは大変なもんっすよ。相手は人間っすからね。もうわけ分かんなくて毎日大変っすよ。しまいには今日みたいな事にもなるわで・・・」

「でも・・・それでも頑張ってるすよ？俺」

一点、まるで辺りには誰もいないように俺のみをその瞳に添えて言った。

「毎日毎日、この仕事に誇り持ってやってますけど毎日辛い思いばっかなんすよ。お客様の対応とか、他の店のヤツら事とかね。それでもこうして兄貴と喋れて、兄貴と顔を合わせて、兄貴と笑えるのが楽しいから・・・」

「だからこうして頑張ってるんすよ」

「お前・・・」

「だから兄貴も、力入れるとは言いません。むしろ肩の力抜いた方がいいいつすよ。てか俺頭悪いからなんて説明すればいいか分かんないすけどこれだけは言えるつす・・・」

凜としたシュリアの目、あまり見たいものでは無かったがその時ばかりは真剣だった。

「兄貴は強い人つす。俺はそこに惚れたんすから。頑張らましよう」

よ
」

なんて言うか、凄い気持ちは分かった。俺の事心配してくれたり何を伝えたいのかも大体分かった・・・

だけど・・・気持ちだけ受け取つときます。

「あゝもう！こんな事言わせるなんて！真っ赤っすよ！俺の顔、今バラより！！何てこと言わせるんですか」

「ハイハイ、ソレハドウモ」

コイツの真剣な冗談はさておき、疲れも幾分取れた。不思議とコイツと居ればホントに単純に疲れがないから面白いものだ。その辺は感謝すべきなのかもしれない・・・

「つてと、まだ洗うもんとかあるし厨房に戻るわ」

「はいゝ 兄貴い大好きっすよゝ」

最後言われた言葉は出来るだけ早く頭の片隅から消し去ってしまおう、そう思った時だ

その場全体が吼え震え上がった。

ビリビリと轟くように歓声がこだましクラブ全体を覆い尽くす。

「何？なんだこれ・・・」

思わずシュリアのところへ駆け寄り事態の把握をしようとした。

「アイツ　　つすよ・・・」

呆れ、今までに見せた事の無いような困ったような顔でシュリアはスーツのポケットから携帯を3つ取り出した。

「あつ　島田さん。俺です、ええ今日も　はいお願いします。どうも」

「石垣ちゃん？悪いけど今日も頼むわ！悪いねいつも！んじゃ」

「はいよ。俺だけど今日いつものやつ頼んだわ、取れないとか無しな」

それぞれ違う番号の相手だろう。事細かに説明しなくても『今日』
と言う言葉が入っただけで要件が伝わったようだ。
電話を終えたシュリアが話しかけてきた。

「またやりやがりましたよ。アイツが・・・」

「誰だよアイツって」

言葉は不要と言わんばかりに人差し指をその方向に指す。

「アイツは毎回やってくれますよ。ここに入って三日目、それで今やうちのNo.1・・・常識外れもいい加減にしろってやつですよ。一体誰が初めて経験したホストで每晚ドンペリの嵐を生むってんすかね。ったくさっきの電話もそうなんすけどね、毎晩業者さんのとこに注文するこっちの気持ちに」

もう声は聞こえていなかった。無意識のうちにそこへと歩み寄っている自分。まるで引き寄せられるように。

客、ホスト、それらの歓声の中別なものがそこにあつた。

ピンと張り詰めるような空気、恐らくここにいる誰もがそれに気づいて無いことだろう。

ソレは俺に向けられているのだから・・・

鋭く、血すら凍てつく程の冷たい狂気の刃

かき分けた先

視線のその先の彼はそう答えた。

『山本、雅人』

「ふう、終わった終わった」

玄関のドアを開けたどり着いたのはアパートの俺の部屋だ。

今日は色々な事が起こりすぎて大変な1日であったと、そう告げるように『ソイツ』へと声を届かせるように言った。

「しかし……まさかうちの学園にホストをやってる奴がいたなん

てな・・・」

雅人の視線の先にいたのはいかにも頭の良さげな眼鏡をかけた整っている端正な顔立ちのスーツを着た男だった。その姿は男だという事実を忘れさせるぐらいの美しささえ放ってさえいる。見覚えがあった。そう、見覚えと言うかそれは確信だ。ノエルが転校してきた日、同時に転校してきた男だった。一瞬だが視線を感じた取れた事を覚えている。

「で！何？やっぱりこんな事隠れてしてるぐらいだからなんか家とか貧乏とかか？なんかさ、そんな感じがしてならなくてさ！」

同じ境遇、同じような不幸、そんなものを持つている人がいないのかと雅人は探していた・・・むしろ自分以上の不幸を味わってる人がいたらちよつと会いたい気持ちでもいた。

「いや、すまないがウチの家系は何故かお金には困っていない。話題にならなくてすまない」

初めて聞いたその声は顔に負けず劣らず強く、美しいものだった。そしてお金さえ持っているとは・・・神はにぶつを与えないとはよく言ったものだー雅人は神に激怒した。

「日本にはある用事があつて来ている。ホスト・・・と言うのか、あの仕事は。あれも日本の文化を知るためにやっている。やはり女性を喜ばす、と言うのは簡単な事ではないものだな」

そこまで言うか、そう思った。イケメン、金持ち、モテモテ、こんな最強の拍子が苦勞するのを見てみたいと俺の中の黒い部分が泣いていた。

そんな時、目の前に手が見えた。ソイツの手だ・・・握手を求めようように差し出されている。

「自己紹介をしよう。君とーそして僕の」

「あ、ああ」

不思議と悪い気はしなかった。先程からイヤミ（被害妄想）を言われて心をボコボコにされたはずだったがコイツの言葉には優しさがあった。

「俺は、えとマイネームイズマサトヤマ・・・いやなんて言うかお前ハーフっぽいじゃん？だからちよつとさ・・・」

・・・口を押さえて笑われた。そんなに面白い事だったか？むしろコッチが嫌ってほど恥ずかしかった。

「いや、なんて言うか面白いな。僕はさっきまで日本語を話していたのにそんな改まらなくても・・・」

もう顔が真っ赤です。どうにでもしちゃってください・・・

「僕はハーフでもクォーターでもないんだ。生まれはドイツ。でも知り合いが日本語を教えてくれたから分かるんだ。だから大丈夫」
「どうやら深くは追求しないやつらしい。なんか知らないが助かった気がする。」

「じゃあ、俺は雅人。山本雅人。一応これからもよろしくな」

これでひと安心だった。恥ずかしさから解放したい一心だったからひとまずは安泰だろう。

そして待つのはコイツの答えだった。

「僕はリーヴァ。エステント・リーヴァだ」

彼はそう言った。

力強く信念のある声で―

「つとまあ玄関で話すのもなんだからとりあえず上がって話そうぜ」
部屋に一步踏み入り暗い部屋の左側の壁を手探りで触る。
あつた・・・

触れたスイッチを押すと部屋全体に明かりが灯された。

シュリアのクラブを目の当たりにした後では天と地の差ほどだった
が俺にとってはなかなか住み心地がいい。あのバカ姉の存在以外は
・
・

そういえばリーヴアはどうなのだろう、そう訪ねようと振り返った
時だった。

「へえ、これはまた珍しいね。日本古来の縦穴式住居をイメージし
たような暗さがまた味があつていいものだ。しかも一定の湿度を保
っているようだしワインセラーのような造りになっている・・・こ
こを管理している人は相当愛情を持つてるみたいだね」

まあ・・・ある意味は合つてるかな。『金』に関しては惜しみなく
愛を注いでるしな。

それに・・・いや〜とりあえず確信が持てたよ。

コイツは『天然』だ・・・

なんで俺の周りって天然ばっかなんだらうね・・・って一人で呟く

のは危ない人みたいだからやめておこう。

「え〜と・・・なんか飲む？こらこら初対面の人の家を漁るのはやめなさいて」

何が珍しいのか・・・この寒い季節の中熱くなってる人がここにいますよ。

「・・・おつと」

いいものを見つけた。飲み物を探してる最中にちょうどよくテーブルに置かれたコーヒーが目に入った。

「特に飲ませるものとかないけどさ、そこにコーヒーあるから勝手に飲んで・・・早ああ!？」

リーヴァは先程いた位置から一瞬のうちにコーヒーのカップを悠長に持ち正座している。

その落ち着きっぷりは現代日本人などよりよっぽど様になっている。

「コーヒーや紅茶は好きなのでいただくよ・・・ん・・・何か日本独特の特殊な香料でも入れているのだろうか？ひとまずいただこう・・・」

と、飲んだと同時にまるで喜劇のようにリーヴァは大粒の涙と共に飲んだコーヒーを滝のように吹き上がらせた。それはもう虹のように芸術の域にさえ達していた。

何故か・・・

「日本では・・・もてなしに墨汁を飲まずのが主流といったところか・・・」

「え、え!？」

紛れもない・・・あの姉貴だった。あのバカならやりかねない、もしかしたら保険金をかけてこの墨汁コーヒーでシヨック死させようと企んでいたのかもしれない。誰よりも早くそんなバカ姉貴が浮かんだのは至極当然の事だった。

程なくして誰かがくしゃみをしたのは別の話である。誰かは言わずとも、である。

「なんてかとんでもない事して悪いな・・・初めて来たつてのにこんな事になっちまって」

そう言つてジュースを渡す。アパートの外から急いで買ってきたも

のだ。

勿論現時点での全財産をはたいて缶ジュース二本とはなんとも言い難い悲しい現実である。

「構わないよ。それより君の話を聞きたい。山本雅人」

聞かせられる話など到底あるわけが無かった。俺が学園中、それだけでは無く付近の地域まで恐れられている男などと。

そして、

ヴァンパイアなどとー

「顔色がー大丈夫なのか？」

「あ、んああ！何もないから心配しないでくれよ。それよりさ・・・お前の話が聞きたいんだ」

「僕、の？」

少し言いづらそうな雰囲気だったが、その後本人からゆっくりと口を開いていった。

「ある用事・・・僕はさっきそう言ったよね」

「ああ」

「僕の彼女は―殺された」

息もつまるような答えだった。予想もしていなかったその言葉に何を言えばいいのか、なんて返せばいいのか分からなかった。

「僕は彼女を殺した奴を―殺すために日本に来た」

「お前……」

「……すまない。今日初めて会った君にこんな事話すなんてね。悪かった、気分を悪くさせたね」

「いや、なんかこっちもそんな事聞いちまってさ……」

明らかに空気を変えてしまったのは自分だ。それを元に戻そうと別の話を持ち上げる。

「てかさ、はは！こんな話するのもなんかだけどいくら日本文化を学ぶったってホストなんかするのはないよな。でも聞いたよ！入って3日でN01だとか前からやってたんじゃねえの？俺なんかボーイだったし・・・よっぽどシュリアのお気に入りにならなきゃー」

「シュリアー」

ここまで雰囲気が悪くしてしまったのは自分だった。それを戻そうとして口に出したのはクラブの話ーそしてシュリアと言う単語が出た時、リーヴァの様子は変わっていた。

「あいつの事、知ってるのか？」

そう尋ねた俺の言葉は届いてるようには見えなかった。

「ギョー」

窓から放たれる月夜の光は『ソレ』を照らし出す。

闇夜の中で銀色に輝くその狂気。
長く、鋭利な牙のような殺傷力を放つその銃身。

(コイツー)

「シュリアー円卓の」

渦巻く憎悪の塊を見逃さなかった。

「ヴァンパイアー」

(ヤベえ・・・ツッ!!)

リーヴァの両手に握られていた銃がモデルガンか本物なんて事はどうでもいい事だった。

俺の体がつた行動、それは殺されないため、それより先に相手を殺すため。

本能がそうさせたのだ。

ジュースを置いていた簡易テーブルを蹴り上げる。まだ中身が残っていたジュースの缶はしぶきをあげて宙に弧を描き舞い上がる。

全てが俺の目には『見えていた』

(・・・つくそ!！)

どこかでそう思っていた。

入学式、ホストクラブ、いや違った。

最初から分かっていた。

(なんでこうなる・・・!なんでコイツと戦わなきゃいけないんだ!！)

しょうがない事だった。

それ以前に生きるか死ぬか、その生死を賭けた戦いににその思いは不要なものだった。

それを意味するように、来たのは『ソレ』だった。

(いなー!！?)

衝撃が腹部へと『突き刺さる』
それをマトモに頭で、目で理解出来たのはほんのコンマ何秒の事だった。

「か・・・うあ・・・」

痛覚は最後の最後にやってきた。
実際目に入ってきたのは肘打ち、だが実際の重さはハンマーそのものだった。

耐えきれずその場に膝をつく。意識を保っていた自分がまるで嘘のようだった。

それをバカにするかのように胸の辺りを前蹴りが襲う。
こちらは衝撃は無かったがおかけで壁際まで軽く叩きつけられてしまった。

間髪入れずリーヴァは迫る。意識をなんとか保っていた俺は瞳を向ける。

そこにいたリーヴァは先程笑顔で話をしていた『彼』などではなく、鎖から解き放たれた獣のようだった。

左肩に何かが乗せられた。リーヴァの右足、そう分かった瞬間体が壁に叩きつけられる。

意識もとうとう薄らいでるのが分かった。ただそれを叫べずにはいられなかった・・・

息も切れ切れで放った言葉などは届く筈も無かった。

「だけど・・・神の前で彼女は殺された」

悲哀と暴虐に抱かれた言葉からは恨みの念が吐かれていた。

「彼女はヴァンパイアに殺された・・・!!」

重く鋭い銃口が殺意の塊となって俺へと向けられる。

「俺はーヴァンパイアをこの手で滅する。そして神をも蹂躪する」

「貴様もだー山本雅人」

銃口は俺から反れる事無く向けられる。

「刻だー」

消えゆく思い、そこには悲しみしか残らなかった。

彼は言い放つー

「刻が来たら貴様らヴァンパイアを全てこの手で蹂躪してやるー」

第8夜 抗えぬ、そこにある闇

『刻だ』

『刻が来たら貴様らヴァンパイアを全てこの手で蹂躪してやる』

彼はそう言い放った。

エステント・リーヴァ

あの時、橘ヶ谷学園に転校してきた1人の男。

そして

「くっそがああああー!!」

畳へと拳を叩きつけた。思い切りだ・・・

何を悔やむ

手も足も出す事が出来ず圧倒的にやられた事？

違う

「まだ・・・何を迷ってるんだ。俺は・・・」

あの時、蹴り上げたテーブルを盾にしてあいつへと近づき一撃さえ当てていれば勝てる。その確信さえあった。

なのに 出せなかった。

今更何を迷う、何故手を出すことが出来なかったか・・・ただそれだけが頭の片隅に焼き付いて離れようとしなない。

何があっても迷わない いつの日かそう誓ったはずなのに

「おはよー！！雅人く・・・ん」

いつもの通り同じ時間に俺の部屋に入ってきた杏樹。
さぞ驚いた事だったろう。

彼女の視界に映るのは転がる二本のジュースの缶、そして一面にぶちまけられたその中身。

そして情けなくうずくまる俺・・・

「雅人・・・君？」

「・・・おう」

しばらくの間沈黙が続いた。それもそうだろう、こんな光景では。

「なん・・・かさ！」

なんとか笑おうとした、それがかえってよくなかったのか自分でも

分かるぐらいバカらしい顔をしていたのだと思う。
杏樹はそんな俺を見てか何も喋ろうとはせず中に踏み入って中身が
零れて空になった缶を拾い集めている。

「ジュース・・・こぼしちゃってよ！テーブルなんか突っかかる
とか馬鹿らしいよな、俺！！まあ待ってるって。すぐ行くからよ！」

滑稽だ

ピエロのように振る舞い、自らをバカにしそれでもなおかつ笑う。

だけどそれほど信じようとしていた・・・

(なんでだよ・・・)

いつものように笑い通せばどれほど楽か、だけどそれが出来ないの
が人間だ。

だけど彼はまるで機械のような眼で俺を下した。

蹂躪すると

（お前に何があったんだ・・・）

その思いは何なのか、どこから来るものなのか、今はまだ分からなかった。

分かるうともしない自分がいた。

「んじゃ・・・行くうぜ」

ただ冷めたようなドアを閉じた。

「ねえ、雅人君！」

「あ？どした？妙に元気だな・・・」

杏樹といえはいつも通りに明るそうだ。

それは俺には無いもので今となっては心の拠り所のようなものになっ
っている。

「……………」

「……………」

「……………」

「喋れ!!!」

ビシッ!!!と空手チョップ一閃である。
今のはツッコミとしては芸人に並ぶぐらい素晴らしいものだ。

「痛い!?!?……………痛いです」

「いいから喋りやがれ。それも簡潔に!」

「……………痛いです」

ちよつと強すぎたのだろう。

杏樹は頭を押さえながら地べたに座り込んだままだ。

「んゝ・・・」

かと思えばいきなり顔を上げてこちらを向き頬いっぱい空気詰めて俺の方を見つめる。

本人としては怒っているのだろう・・・けど他の人から見たらどうやっても笑える姿である。

「わ、悪い悪い。んで何だっけか？」

そんなある意味必死な姿にある意味で圧倒された俺はとりあえず折れる事にした。

それで納得してくれたのだろうか杏樹も起き上がってくれた。

凄く単純すぎる・・・

そうして歩き始める俺にそれこそ必死に追いつこうと走って追いかけてようとしている。

しかしどんくさいといえばどんくさいがそれはそれで・・・

って何俺バカな事ほざいておりますか!?

「まゝさと君!!--」

それはまさに不意な一言だ。

スピードといいタイミングといい今の俺を『落とす』には造作もな
いような強烈な口調だった。

「まゝさと君！」

また、だ。

どうしてコイツは・・・こうもいかにもなタイミングで狙ったかよ
うに俺の心を揺れ動かすんだ。

俺ってそんな趣味が とまで自分を疑ってしまうほどに、だ。

しかしそこで疑問が湧いた。

（なんか・・・変だな）

疑問と言うよりは直感のようにそれを感じた。

（若干、声に変な気がするんだが？それに杏樹は・・・）

その聞く事に慣れた声の中で微かに生まれた変化は俺の中で過敏に
反応していたのだ。

「まゝさと君！」

俺の後ろから幾度となく聞こえる声に対し、即座にそれに反応する。

「お兄ちゃん！ノエルねえ！！他の人の声真似なんか出来るようになったんだよ！とりあえず今やってみたのはこやつ・・・」

『こやつ』とノエルが指して言っているのはどうやら杏樹の事らしい。しかしそんな事してなんになるやら・・・？

「雅く人くん！！」

「はあ〜い？・・・つてあああああ？！いやこしすぎるんだよテメエええ！！」

なんのために！？んな事もう考えてられつかあ！あつちにも杏樹、こつちにも杏樹つて混乱してしょうがねえ！！

「雅く人くん？あれ？」

「参りました・・・もう十分つす」

文字通りお腹いっぱいです。

もう許して欲しいと懇願した時・・・その思いは伝わった。

「なんで謝るの？ただノエルは・・・お兄ちゃんの好きなパターン

を探してみようと思ったただけなのにね。・・・雅人君！」

全然思いが欠片も伝わって無かったようで何よりです。

「・・・もうやめてください!!」

意外、本当に意外だった。

その声は俺とノエルの間を割ってはいるように光臨した。
精一杯の勇気、その言葉が相応しい杏樹の一言だった。

「杏・・・樹？」

「雅人君・・・嫌がってますよ」

震えるような声でノエルの前に立ち尽くす。その様子をまるで怖がらないようにノエルは対照的に鼻で笑っているほどだ。

「フフっ、小娘が出しゃばっちゃってノエルの前に立って何をしようって言うの？」

本当だ。冬だから寒くて手が震えているとかそういうわけでもなくただ単純に杏樹も恐怖しているのだ・・・

「雅人君は・・・」

手だけでは無い、体全体が震えている。そんな中で放ったその言葉。

「渡しません」

その言葉に俺は感動していた。普段は何もしないようなやつなのに・・・何故かこの時だけは違って見えた。

ええ、その言葉が来るまでは　ですけどね。

「雅人君がいなくなったらご飯を用意してくれる人がいなくなりますからね・・・」

人間、本気で悲しいと思ったのはどんな時ですか？

僕はこんな時です。

b y 俺

とそんなおふざけもほどほどに時は進みます。

「ふふふ……」

流石ノエル、杏樹の馬鹿げた言動に対しても挑発に乗らず余裕しくしゃくといった様子だ。

まあ普通であればそうでなきゃ困るんだが……

「それじゃあ一層負けてられないわね……!!」

このアホ娘……なんか勝負に乗っちゃいましたよおおお!!
今……確実に分かった。

この2人、どうみても『一緒』だ……

「っと待て!はい、ちよっと待てええ〜!」

そりゃ一時中断させざるをえないだろうな、このバカっぽい雰囲気は。

「ところでお二人さん、何に対して争ってるのか言ってみ？」

「ん・・・」

「ん〜」

うわっ真剣に悩んでるよ！真面目なぐらい真剣だ！

「何に対して・・・ですか？」

「そうだよ！もう何に対してとかよく分かんなくなってきたてか・・・あああ！もうわけが分からん！とつとと学校行くぞ！！」

俺もこの通り制御不能だ。どうにかしてくれ。

いやほんとどうにかしてと・・・

「んでこれは何よ？ああ？」

「こら！小娘が、お兄ちゃんにこれ以上近づくな貴様！ほらお兄ちゃんも嫌がつてるし！シツシツシツ！！」

「はいはいお前の事だ。落ち着けノエル」

右腕が引きちぎられるぐらい捕まれている。

どうやらノエルはさすが人間離れしたような握力を持って俺の右腕を引きちぎようとしているのだろうな。絶対に離そうとはしない。ついでに杏樹に対して嚴重と言っていいほど素晴らしいセキユリテイーの警戒網をしている。どうやら半径5m以内は蟻一匹すら入れないらしい。

そのおかげか杏樹との距離はどんどん離れていく……

それに比例するようにノエルはギツチリと腕を掴んで離さない。こりゃ尋常じゃないわ……俺だって痛いもんは痛いってのって！

痛い！痛たたたあ！？

「痛った……？」

明らかに　ノエルの表情に変化が表れていた。

いつもの、さっきまでの明るい表情から何か悲しいものを見つめるような深く悲しい顔。

それは一度だけ見た……

孝太郎の見舞いに行く前、振り払うようにして拒んでしまったノエ

ルが俺に向けた氷のような瞳。

忘れる事は無かった。

「……わい……の」

「……ん？」

微かに、震えるような今にも消えてしまいそうな声

「……怖いの」

ノエルは確かに言った。

「お前……？」

普段の様子からは感じとれないような、普通じゃないその雰囲気

俺は微かではあったが違和感を覚える。

震えていたのか・・・それだけにその一言に確信が持てなかった。

「なあ・・・」

「なぐんで！！ビックリした？お兄ちゃん！今朝からドツキリ企画をお届けしたノエルでしたあ！！」

勇気を振り絞って声を掛けようとした。が、返ってきたのは元気で
あるいつものノエルであった。

「はあ？・・・いや・・・それドツキリにもなんにもなっていないし、
てないし、それにさ・・・」

「いや～いや～いや～、今日はまたお兄ちゃんの違った表情が見え
てノエルも嬉しい限りです！ご協力ありがとうございます！」

一切、言葉を通そうとはしなかった。

その姿は今の俺にも似ていた。

「そ～言えばお兄ちゃん？今噂になってるあの『事件』って知って
る？」

「は？事件・・・？なんだよいきなり」

「そう、今すごい噂になってるでしょ？あの『連続無差別意識不明事件』！」

「なんだその凶悪そうな言葉を無理やり取っ付けたような怪しい事件は。つうか俺の部屋にテレビなんか上等なものはないぞコノヤロウ」

冗談はさておいて、本当にそんな事件など耳にした事は無かった。

杏樹の『あれ』以来

「そつかあ・・・でも凄い気を付けて。ほんと危ないの・・・お兄ちゃんにもしもの事あったら」

「もしも・・・？」

「お母さんにも言われてる・・・この事件は何か変だって。絶対何かあるって・・・」

その緊迫した言葉から推測される通りこの話はよほどの事なのだろうか 全てはノエルの瞳が物語っていた。

「一昨日から今朝まで6人、若い人間から老人子供まで・・・そしてノエル達みたいなこの街に住むヴァンパイアまで犠牲になってる。ニュースとかではまだ発表されてないみたいだけどもう凄く噂になってる・・・」

ヴァンパイア

その単語が耳についた時俺は態度を改めた。

「分かるよ、お兄ちゃん。『信じられない』んだよね」

まさにその通りだ。今挙げられたように人間ならば ましてや老人子供ならば話は分かる。

だがその単語一つに問題があるのだ。

「ヴァンパイア、が・・・」

「そう。信じられない話だけ」

ノエルが冗談を言っている様子は 無い。

ヴァンパイア、それだけに関してでは自分が十二分にも分かっている。

自ら体現し、そして対峙した。

シユベルヌ、シユリア・・・いずれも人の域を越え、人外としてこの世に位置しているものと対峙したのだ。

『コレ』と対峙する意味、それは『死』そのものなのだ。

人を殺す事に躊躇すら無く、そしていかに残忍に生命を踏みしじる。それが人外というものなのだ。

それが

「信じられない話よね、ほんと。でも起こってしまった事なの・・・

」
「どうなってる

」
「え・・・」

「犯人と犠牲者は・・・どうなってるって聞いてんだ!」

吠える

朝の寒気は飛び散り、もう冬になろうとするその季節に地を覆うアスファルトは確かに熱を帯びようとしていた。

「確かな事はまだ・・・でもみんな魂が抜けたみたいに抜け殻になつてるって・・・今分かってるのはそれだけ、それに お兄ちゃん？」

既にそれ以上の言葉はもう必要無かった。故に向かう矛先は変わるジャリツと乾いたアスファルトを右足で噛み締める。

「充分、だ」

ただその一言を吐き捨てる。視線はもうノエルを捉えてはいない。そして動き出す。地面を アスファルトを駆り次には踏み抜く。全身に巡る血管がたぎるように熱くなるようだ。

『蹂躪する』

それがアイツの示した答えであるならそれは仕方がない。

だったらその答えを俺は 砕く。

初めて生まれた負の意味での『殺意』はこの抑えきれぬ体を駆り立てるには充分過ぎた。

頭は考えるのを止めた。

文字通り真っ白に

それぐらいがちょうどいいと俺は思った。

「また・・・かあ」

深く、ため息をつく。吐いた後は自らに対して何が笑えるわけでもないのにただ笑った。

「ノエルちゃん・・・でいいよね？」

後ろから誰かに声を掛けられた。

唐突ではない、先ほどから後ろにずっとついていたのだから。

「何よ、狼女。近寄らないでちょうだい。ノエルの鼻がひん曲がっちゃうから」

言葉は遮断される。それに何かを感じた。杏樹の瞳だ。

「それはあれ？なんで自分が狼女だって事を知ってるのかって顔？答えは簡単よ。全部お母さんが教えてくれたの・・・全部ね」

「違う」

「はあ？何よ。それとも何？お兄ちゃんとノエルの仲に嫉妬した？」

「違うの・・・」

「じゃあ何よ！？はっきりにいなさいよ！...」

「ノエルちゃんは何を隠してるの・・・」

間を置いて、それでも拍子抜けした一言だった。

「何を・・・って何そのバカな質問」

「違うの！ノエルちゃんは何かに怯えてる・・・私とは違う何かに・・・！！！」

「ふざけないでっ！！」

怒鳴りつけるようにノエルは息が途切れるほどに強くそれを吐いた。

そうする事で全てを拒絶した。

当たり前のように会話が止まった。

そこに元々会話など存在していなかったようにそこに静寂が走る

「ふざけないでよ・・・」

ノエルは怒鳴るのを止めた。そして疲れた様子で杏樹へとその背を向けた。

途中、冷淡な視線が送られる。

だけど

そこには悲しみしかなかった。

「おい！雅人お！」

校門を過ぎた辺りで走り込む俺の名前を叫び追いかけてくる声があった。

百樹の声だ。

その声に反応する余裕などは無く、気付いた時にはそれは遠ざかっていきそして消えていた。

学園へたどり着く。

生徒が巻き起こす喧騒すらもう耳に入らない。
吐く息からは季節を表すように白く霧がかったような息が広がる様
子が窺える。

玄関、歩みを進めた先に教師達が連なっている。
それもそのはず今日は今日も加わった挨拶運動の日だ。

教師である宮穂 武の姿を捉えた時俺はそうだと思い出した。

「こら、山本雅人、お前も今日は挨拶運動の係の1人だろ。早く準備を・・・お前、どこに」

言葉は途切れた。俺は歩むのをやめようとはしなかった。理解したように宮穂 武も一旦は喋るのをやめた言葉を続けようとはしなかった。半ばそれは呆れに近いものだ。

玄関に踏み入った。
やはり朝だというのに他の生徒達の声が響き校内に活気というものを生み出している。

そんな学園の雰囲気から見たらとても合うとは思えない、その無機質なげた箱から中履きの靴を取り出して履く。

呼吸を置き、辺りを見渡した。
見つけようとしている人物はただ1人だ。

そこに焦りはなかった

だけど高騰した思いはそれだけに重く、止む事を知らずに爆ぜようとしている。

再び見渡した先に人の集まる1つの空間が在った。

見た限り女子の集団で構成されており端から見たらウルサイ限りなのだろう。

だけどきつとそこに『アイツ』がいると根拠のない確信が告げていた。

珍しく内履きをちゃんと履き、廊下を踏みしめる。

そこにある女子の集団を手でかき分けるようにして足を進めていく。

「・・・君か」

確かにソイツはそこにいた。

おそらくは朝早くから来たにも関わらずここにいる女子によって質問責めにあっていたのだろう。

でも既にそんな事は関係なかった

女子の悲鳴はそこで止まり、まるで愛する母親にしかられ意気消沈した子供のような表情になっている。

異質な雰囲気と悲鳴を感じてか玄関から教師達が宮穂 武を先頭に走ってきた。

「おい・・・お前らなにし」

その凄惨な状況を見てか一目で見えてわかる状況で問題を起こしたであろう雅人へと声を張り上げ止めに入ろうとする。

その目だ

そうしようとさせないものがそこに存在していた。

だから誰も止める事など出来る筈もなかった。

そうした中ゆらりと、ただ1人だけ動き出す者がいた。

リーヴァは立ち上がり口元から僅かに滲んでいた血の後を手で拭いた。
何も無かったように、しかし言葉だけは確かに怒りを露わにしていた。

「酷い事だと思わないか・・・理由も無しにいきなり。どういふ事が説明してもらいたいものだ」

「説明・・・だあ？」

お互いに全くの引けを取ろうとはしない。
そこにいた誰もが分かるように今はまさに一触即発といったところであろう。

必然に静寂が訪れる。

「それは殺意か・・・？山本雅人」

抑えきれぬその思いの重さを集約したように瞳に殺意が宿る。
それは威嚇のようなものではなく確かに体全体に帯びるような明確で分かりやすい敵意であった。

「君が何に対して怒りを覚えたかは分からない。だがこれだけは
っ!？」

時が爆発する。

人知をも凌駕するスピード、それを超える。

一瞬、遅れて雅人が立っていた位置から砂塵が舞う。それは見る者
全ての視界を遮る。

しっかりと握り締めたその右拳は一直線にリーヴァと言う目標へと
向かい、そして一撃にて倒す 筈だった。

「……ガハアッ!？」

そこにある答えは違った。

飛び散りまるで花びらのように舞う『朱』と言つ色。

伏していたのは雅人だった。

「まるで猪のようだな。猪突猛進と言う言葉は君の為にあるような言葉だ」

吐き捨てるように向けられる言葉。

たった1つの情も無くまるで道端に落ちているゴミに対して吐き捨てるように

「……やるじゃねえか。クソが!」

他の者には見えていない世界がそこにはあった。

研ぎすまされた右の拳は真っ直ぐにリーヴァの顔へめがけ、そしてなぎ払うように向かっていった。

だがそこまでだった。

結局それは届かず逆に拳を受ける結果となった。

何があったのか リーヴァという男にはそれは愚問だった。

向けられた拳、それは単に『直線』でしかない。

直線はその名の通り『まっすぐな線』でしかなく、それを避けた時それは再びリーヴァへと向かう事は無い。

故に避けるのは容易い事であり、その無防備になった雅人の顔面に拳を入れるのは簡単な事だった

「また来るか。その分かりきった攻撃をいつまでも続ける気があるなら来ればいい・・・何度でも」

問いかけは自信の現れでありそこに誇張などは無かった。絶対の自信、それがリーヴァの突きつける問いかけと言う名の言葉だった。

その問いかけに答えるように雅人は立ち上がる。そこには半ば笑みを浮かべる雅人の姿があった。

リーヴァはその笑みの理由が分からなかった。実際のところ分かったところでどうなるわけでもないと理解しているからだ。

「一撃・・・たった一撃入れただけで俺に勝ったとかほざくんじゃ

ねえだろうな・・・」

膝に手を置き力を入れやつの事で立ち上がったのだ。

リーヴァの一撃は確かに効いていた。

そんな状況下で雅人が放った一言にリーヴァは気圧される事はない。

だがそれでもなおその言葉には力があつた。

「ざけてんじやねえぞ・・・来いよ」

階段を指差す。

それが何を意味するのは分からない。

「その階段を登っていけば君が勝てる、そうとでも言いたいのか？」

もつともな一言だった。

実際に全く根拠も無い自信の表れである。

しかしそこにはそれに乗るリーヴァの姿があつた。

階段を登る雅人を追うように一段、また一段と歩いていく。

二階、三階と歩を進めていくことに辺りにざわめきが走る。びっしりと各々の階は生徒達で埋め尽くされていく。

蹴られ飛ばされたコンクリートに叩きつけられるドアの音。無機質でいて乾いた金属音は校内中に兎玉して鳴り響いた。

屋上のドアを越え淀んでいた灰色の校舎に光が入る。

その光の先にはまた、無機質なコンクリートの壁や錆び付きかけたフェンスが広がっているだけだ。

「1つ聞くぞ・・・」

鉄製のドアを閉めた後、低くも力強い声でそう言った。

「お前・・・何をした」

「何、を？」

あらかた予想がついていた問にあっさりとしたまるで興味などは微塵もないような態度で告げる。

「なるほど、そういう事か。」

だが 君は勘違いをしている・・・僕はまだ何もしていない。言
ったはずだ 刻が来たらと」

「勘違い、そう言うんだなお前・・・普通の人間を巻き込んでか！
？」

「そうか・・・」

ゆっくりと距離を取り始める。それに気付いたか雅人も応じて動き
始める。

「ヤツか・・・動いたのは」

ヤツ、と言う単語に思わず体が反応していた。

「何を言ってるんだ。おい」

言い切るより一瞬早く雅人は駆ける。

怒りを露わに飛びかかろうと距離を縮めあと少しでも、あと一歩で
も踏み込めば捕らえられた。

だが返ってきたのはその洗礼だ。
たった昨日同じものを雅人は受けていた。

深く抉り込む刀のような斬撃。

それは 肘だ。

「あガアっ!?!?・・・かはっ
」

馬鹿げたスピードだった。

それは体の内側から衝撃が二倍、三倍にも膨らみそして爆ぜる。
時が経つごとにそれは顕著に表れ痛みがハッキリと脳内を通り信号
となって全身へと伝わる。

「どうした。僕を殴りたんじゃないのか？座ってばかりじゃ何も出
来ないだろ？」

余裕の表れだった。

まさにその通りだったのだから・・・

「ふざけんじゃ・・・ねえ
」

マトモな状態ではない。それは確かだった。
雅人は自分の肘を支点にし上半身を起き上がらせ必死にやっとの思いで立ち上がった。

「マトモじゃないな。起き上がるだけでも必死な筈だ。そうまでして僕に向かう。その理由が全くと言っていいほど分からない・・・聞いてみようか。何故 そうまでする？」

嘲るように笑う。実際のリーヴアの態度としてはそうではなかったが端から見ればそうにしか見えない。

「ざけんじゃねえ・・・」

やっとの事で雅人は壁にもたれ掛かるような形で起きる、と言っよりは這い上がった。

一歩、また一歩と両の足を引きずるようにして徐々に進む。
その確実な一歩はリーヴアの元へと届いていた。

「まだ・・・聞いてないんだよ」

足が上手く噛み合わないのか、雅人は左足に突っかかり前に倒れ込んでんむ。

それは止められる

真正面に立ち尽くすリーヴアが抱え込みそれを阻止した。

「意外に長くかかったものだ・・・もう一時限が始まっている」

何故かは分からない。

こんな茶番は自分にとって何を得られるわけでもない。得られたからと言ってそれははっきり言って大したものではない。

だから茶番だ

（ヤツが言っていたよりも特にどうと言う事も無かった。やはり彼の能力を少し買いかぶりすぎてるように思えるが・・・）

予想はどうやら外れたようだ。

それを明確に示すように今の現状がこうして『結果』としてここに存在しているのだ。

しかし別のものが疑問として生まれていた。

(何故・・・発現しない)

大いなる疑問だった。

リーヴァは認識していた。山本雅人はほんの最近だとはいえ、ヴァンパイアとして『発現』した紛れもないリーヴァにとっての憎み忌むべき標的、獲物である。

それは『ヴァンパイア』を倒す事で果たされるもので『人間』としての山本雅人を倒す事は意味の無い事だった。

だがそれは仕方がない。感情を押し殺してまでもコレはやらねばいけない事なのだ。

リーヴァには『成し遂げねばならぬ』事がある。

それは彼女を、レミアを殺したヴァンパイアを一掃し同じ痛みを与える。

蹂躪する

それは恐怖だ。

恐怖が全てを覆い尽くす。戦慄と混沌とが混じり合い、まるで『死』を具現化したように降りかかる。ゆっくりと　そして徐々に染み渡るように浸食する。

そこにあるのは確かな　死　のみだ。

「な・・・んだ」

揺らめき、確実に迫り来る恐怖と言つ名の感覚を確かに感じた。

「何が起こっている・・・一体何が　」

言葉は続かない。それは最早当たり前の事だった。

彼がそこにいたから

「　　っ！！」

瞬間、空間が爆発する。必然にそれが狼煙となった。何が起こったか、そんなものばどうでもいい事だった。

考えるという事・・・それはこの局面ではそれこそ死を意味する。

リーヴァにとって『思考』する事は物事を『确实』へと運ぶ材料なものだと考えていた。

それを否定されたのだ。

そうだ。そう言わんばかりの事態が起こる。

左腕から滴る赤い雫。しかしそれは最早雫とは到底言えない量の血液である事は明らかだった。誰から出ているかそれは分かりきった事

「ははっ・・・恐ろしいな。酷く恐ろしい・・・」

その言葉の恐ろしさ、それはリーヴァの左腕から流れ落ちる血液の量を見れば明らかなものだった。震えるリーヴァのその声は自分の置かれた状況を克明に物語っていた。

ヴァのその声は自分の置かれた状況を克明に物語っていた。

本当の人外を

『ソレ』を纏う辺りの空気は揺らめき全ての生き物は息絶えようとしていた。

コンクリートのタイルの隙間から必死に『生きたい』と生えていた植物は枯れ果て黒く荒んでいく。纏うものはそれだけではない。

絶望　それが全てを蝕んでいく。

「なるほど・・・」

その状況、リーヴァは理解した。危機を感じた、そんなものではない。

それはすでに死と対面しているのだ。

その意味を理解したと

妖しく、そしてソレへ向けられる銀を纏いし狂気の刃。

二挺をして構成された美しき銃身の獣は鎖から今まさに放たれようとしている。

「そうか・・・」

リーヴァは笑う。何がおかしいのか、それは第一に自らに問いかけられた。

答えは出ない 当然だ。

この問いに答えなどは無い。

「ソレが『お前』か 山本雅人！」

時は動く。

放たれるは戦慄、山本雅人であった。『ソレ』は雅人の四肢を軋ませ肉体の限界をこえようとする。

片足を一步踏み出しクラウチングスタートのような体勢を作り上げる。

やった事はそれだけだ。

それだけの『行動』とは到底言えない単純なただの動きの中で丈夫であるはずのコンクリートは破砕音と共に砕け、粉々に飛び散り空へ舞う。

重力と言うものは便利なものだ。

それは地球を構成する物理であり万物はそれを覆せない。

砕かれたコンクリートの破片もそうだ。

宙に浮いたそれもやがては1秒とかならずに真っ直ぐ、元あった場所へと落ちる。

だが 違った。

それは『線』だった。

ただ真っ直ぐに音も無く引かれたライン上を駆ける。

それは飛ぶと言うよりは進んできた。

コンクリートの破片は姿を消し、そこに巻き込まれる。

二挺を構える。

既にその時は銃を構える判断が遅い、と感じる事さえが『遅かった』。

左腕から流れ落ちる血液を纏いながらその銃身はなお美しく輝く

銃身を構成する金属と金属とが僅かに擦れあう音。

僅かにそれを聞いたのちリーヴァは躊躇わずトリガーを引いた

はずだった。

時が停まる

風は鳴くのを止め、
雲は動くのを止め、

全ての生き物は静止していた。

鳥も、木も、川のせせらぎも

全てだ。

まるで死んでいるかのように

リーヴァはその瞳を疑った。

トリガーを引いて確かに放った銃弾はその銃口から僅かに顔を出し
今にも目標へと向かい貫かんとしていた。

だがそれは、それ以上進まなかった。

何故

手が覆っている。

確かにその瞳に映っているのはその場面だ。
手は銃身を覆い耳障りな摩擦音を放ちながら佇んでいる。

誰の手だと、リーヴァはそう疑問を感じた。
誰が銃弾を止められるものかと、そう疑問を感じた。

答えは『ソコ』にある。

「真祖・・・アルベリウス エル・・・ヴィレイナ」

その言葉に対する答えは返ってこない。
返ってくるはずなどないのだ

「君は、何を願う」

奇怪な問いだ。

求めてもない問いがそこにあった。

「君は、何を祈る」

また、その問いだ。その指す意図すら読み取れぬうちにそれはリーヴァの瞳に恐怖をもたらして魅せた。

「 !? 」

ソレは事切れていた。

先ほどまでリーヴァが対峙し死すらも脅かした、いや確実な『死』であったソレが力無くその場に伏している。
山本雅人であったソレからは既に生気の一片すらも感じる事は無かった。

「何を」

それから言葉は発する事が出来なかった。

発していれば確実に今の瞬間『死んで』いた。

「なるほど」

嗤う

一片の悪も無く、一片の善も無く、それはただの笑うというだけの行為に過ぎなかった。

故に『空』である事にリーヴァは本当の恐怖の意味を知る。

「さすが本物といったところか・・・」

その言葉に意図は無い。ただ感じたありのままの感覚をそのまま吐いただけの事だった。

刹那 銃身を向ける。一瞬の迷いも無く目の前の脅威であるそれを抹消するため、それを弾こうとする。

だが、出来ない。

五本の指は目に見えないものに打ちひしがれたように動かなかった。酷い事に体は正直だった。

しかしそこにある殺気だけは消え失せる事だけは無かった。

銃口だけは確かに目標へと反れる事無く真っ直ぐと向けられている。

それが今リーヴァに出来る『最期』を覚悟した行為だった

「懸命」

吸血鬼は嘲笑う。

「適した判断ね」

それは咲き狂う花のように

「・・・待て!!」

踏み入るように人外へ叫ぶリーヴァの怒号。
意外、と思ったのかそれが止められる事は無かった。

「貴様は」

ピンと張り詰められた空気の中、リーヴァは放つ。

「知っているのだろう。ソレを」

理解と言う意味に言葉は必要無かった。

その吸血鬼はその『意味』を知りながら笑い、『意味』もなく笑ってそう告げた。

「いずれまた逢おう、その時は」

その言葉を最後に吸血鬼は消えた。

時が戻る。全ては生を取り戻したように動き始める。

風は冬の訪れを告げるように冷たく鳴き、
雲は灰色を彩り、

全ての生き物は生きていた。

鳥も、木も、川のせせらぎも

そう 全て

ただ1人

復讐鬼は哭く

第9夜 冷たい黒 (前書き)

久しぶりに更新出来ました(汗

今回の話ですが文中の後半に残酷な描写が含まれています。そのため今回から小説のカテゴリーに『残酷な描写あり』を追加させていただきます。

宜しくお願いします。Revです。

追記・6月6日一部修正しました。

第9夜 冷たい黒

いつ頃か

失う事が怖くなっていた

平静と言つ名の上に偽り、作られた平穩の中

いつかそれを崩された時

それはもう戻らないと分かっていたのに

目の前を柔らかくない、人工的な光が俺の視界を覆う。

最初に感じた物はヒンヤリとした机の冷たさだった。

「つつ・・・」

どうしようもない痛みが襲いかかる。

鈍くそれでもまだ響いている。

まだ・・・？

疑問を問いかけた。

やっと思い出したのだ。さっきまでの光景、出来事、それら全てを。

結果、伏していたのは俺だ。

こうして教室の机へともたれかかり今の今までこうしていた。

(つつか・・・)

立ち上がる。当然痛みは激痛となり体全体を襲ってくる。

だけどそんな事どうだっていい。

「なあ、俺ってどんぐくらい寝てた？」

近くに座っている女子へと声をかけた。

意外、だったか突然の事に驚いたのだろうか声を暫くは出さない。

しかしその後ようやく言葉を返した。

「ようやく起きた〜大丈夫？アタシらすんごい心配したんだよ〜」

その甲高い声が耳に障る。しかも俺が放った質問に対して全くの答えになっていない。

「つつ・・・あ？」

何かが手に触れた事に気がついた。さっきまで視界に入っていないかっただけのそれは今こうして俺の目に映った。

「それね、リーヴァ君がっ。雅人君が起きたらやってあげてくれだっでさ〜」

「あいつが・・・？」

「何があつたの〜？アタシらすんごい気になるし、2人で屋上なんかに行ったりしてケンカでも始めると思ったら」

それは誰もが飲んだ事があるであろうスポーツ飲料だった。

あいつが 俺に？

そういえばこう言っていた気がする。

まだ何もしていない、そうあいつは自分の口からそう告げていた。その中で俺は一体何をしていたか、その答えはよく覚えている。有無を言わずあいつへと敵意を持ってその拳を放ったのだ。

明らかだ

「馬鹿か・・・俺」

「え？雅人君？どこ行く」

答えなかった、と言うか答えなくてもどうするべきなのかはもう分かっていた。

駆けた。

ただひたすらに

今何をやるべきか、その答えがこれだった。

ただがむしゃらに

それを叩きつけた。

「 やっぱりここかよ」

体を吹き抜ける風、今となっては心地よいものだった。

何故 またこの屋上にやって来たのかは自分でも分からなかった。ただ、体がそうさせた。

その答えがそこに在るからだ。

「 リーヴァ」

冬の寒空に冷たさを纏った風に靡く髪、一目見て冷徹にそして感情すらを押し殺すようなその鋭利な瞳。

「 どうしてだろうかー 授業が始まっているにも関わらず僕はここにしようと思った」

力の抜けた、半ば落胆に近いような声を向けられる。

「きつと来るのだと、君がそうする事が分かってたようだ」

「ああ・・・」

お互いそれ以上は喋ろうとはしなかった。

「悪かった」

それが俺の放った言葉。

何を言うかと思っただであらう、この場の流れからはよほど予想もしていなかった状況にリーヴアは驚いたような顔でこちらを眺めていた。

「何を謝る、いや・・・意外だ。君がそんな事をするなんてのは予想もつきはしなかった」

リーヴアは半ば構えていた。山本雅人がここに来るであろう理由はただ一つ、今朝の出来事の『報復』である。

だからこそ今日の前にある光景は意外なものだった。

「俺は・・・守らなきゃいけない」

強く、いつにもなく迫真の思いだった。

「アイツを・・・今こうしている時間を・・・」

「それで・・・今こうしているわけか」

言葉はない。

その意味を理解して、それでも放った一言だった。

「興ざめだ 山本 雅人」

その冷たい目はあの時と一緒にだ。

それと同様にほど冷え切った銃身を向けられた時のようなあの感覚。
忘れようもないあの冷たさ

だけど

「それでもアイツを守らなきゃいけないんだ!!」

叫ぶ。ありきたりだったその言葉の中に全てを込めて叫んだつもりだった。

「五月蠅い……」

「……!？」

一瞬の出来事、その場を『ありもしない』空気が生まれそして淀む。息苦しささえ感じさせるほどの醜悪なそれはリーヴァの体から現れ出ているものとは違うものだと言う気さえした。

そしてその中のさらなる刹那、2人の空気は動く。

チツと乾いた大気がかすれるように爆ぜた。同時にリーヴァが動く。

雅人もほぼ同時に動く事が出来た。だが結果は一瞬早くリーヴァが抜けた、雅人が遅かったのではない。

リーヴァが速すぎたのだ

戸惑いは無かった。

だがその一瞬の中ではそれは1つの方向、すなわち『死』と言う選択肢にしか通じなかった。

まるでその格好は刀を腰から抜き目の前の相手を両断する、まさに居合いそのものだった。

構えた右腕が腰へとのびていく。途端、そこにはどこから現れたであろうさつきまでは無かったその銀の銃身が姿を現した。

ガチリ、無機質でおぞましくも美しい旋律の音が鳴り響く。

それは

それ以上鳴る事は無かった。

「　　ツッ!」

銃のトリガーは最後まで引かれず、まるで『別の生き物』を拒み、必死で抑えつけるようにリーヴァは己が身であるその右腕を縛りつけていた。

「分かるか、山本雅人……」

不意に放たれる一言。他でもなく雅人へと向けられた言葉である。

「これがいずれ貴様らヴァンパイアへと放たれる『獣』だ。それほどに、それほどに僕は貴様らを恨み憎むッ……!!」

「お前……」

「いずれ自分でも抑えきれなくなるだろうな。だから僕は貴様らを蹂躞する。そう」

『刻が来たのだ』

「そう言ったな、リーヴァ」

それは同時に2人の口から飛び出した。

「最初にお前の口からそう告げた。いや、それが最初じゃないな……」

リーヴァは嗤う。これから俺が言おうとしている事、感じている事、それら全てを分かった上で嗤っているのだろう。

雅人はそう感じた。

「初めてお前を見た時、お前は『俺の名前を知らなかった』なのに山本雅人、確かにそう言ったな」

リーヴァは語らない

「そして何で俺がヴァンパイアだって事」

「死神だ」

それはやってきた。今までいくらでも感じてきたその独特の感覚。

痛みとも違う快感でもない、それは露骨に伝わってくる。

闇

「やつの名……いや、やつは死神。山本雅人、貴様の全てを教えこの僕を復讐へと走らせた化け物だ」

「な
」

「ヤツに初めて会った時、この上ない恐怖を感じたよ。
『ヤツが彼女を殺したのではないか』そうとさえ思った。そしてヤツはそんな事をまるで道端に生える花を踏みつけるように軽く出来る、僕はその時化け物がいるのだと初めてそう感じたほどだ」

突然、この状況では理解出来ないような言葉がまるで箍が外れたようにリーヴァの口から出るとは思えないほどに溢れ出す。
それはとめどなく、負の連鎖となり雅人へとのし掛かっていく。

「想像出来るか！そんな奴が現れ 何を言う！ヤツはこう告げた
！！『ヤツらがお前の彼女を葬った』と・・・」

悲哀

まさに今のリーヴァを表す言葉だった。
そんなリーヴァへなんと声を掛ければいいのか・・・

一向にその答えは出る事は無かった。

「だから」

「貴様らヴァンパイアを恨む、ってか」

突然に、全く自分でも不意に放った一言。

「復讐に駆られヴァンパイアを全て蹂躪する　　そう言いたいんだ
よな」

「ホントは、そんな事したくはない筈だ」

今までこんな事は一度だって無かった。

全くの他人であった筈のリーヴァを何故・・・

彼女の話聞いたから？

リーヴァのその身に突然降りかかった不幸、それに感化されて、そんな事を言ったのか

「だから俺が起きた時・・・目の前にお前からの差し入れだって

」

「もう、いい」

そこで再び開いたリーヴァの声に俺はそれ以上何も言う事は出来なくなつた。

雨が降る

「強くなりそうだ」

リーヴァのその姿からは先ほどの殺気は微塵も垣間見える事は無かつた。

「いずれ雪になる　そうだ、彼女が死んだのもこんな、雨から雪になつて僕らに降り注いだ日だつた」

雨は次第に強くなっていき容赦なく打たれその身を震わす程に濡らしていく。

「話は終わりだ、山本雅人。これが・・・全てなんだ」

舞台の終焉を告げる幕引き、それが今この時。

全てが終わった瞬間だった

「リーヴァ・・・」

「どう足掻いても貴様と僕は敵同士、それは抗える事はない。そう
いずれ刻が来たら」

そう言い終えしばし雨音が2人を包む。

ただリーヴァは屋上に唯一ある出入り口のドアへと歩いていく。

「・・・そうだ、いい事を教えてやろう。これから君に降りかかる
僕ら『凶』の話を」

それは突然の、全く構えていない時だった。

突拍子もなくかけられたその言葉は確実に俺の中の『異質』を蝕

むよつに浸食していく。

「何を」

「さつきも言ったであろう、『死神』　そして『魔女』。奴らが君の全てを奪い尽くすだろう」

頭が混沌とする。新たな敵、リーヴァの口からそう告げられた存在・

死神

魔女

それらをイメージさせるものは、何なのだろうか。リーヴァは何故このタイミングで語ったのか。

そして

「だが『貴様』は……この僕が狩る。だから刻が来るその時まで・
」

全ての答えは明確だった。胸につかえていたであろう思いまるでが紐のように解かれていく。リーヴァが放った一言、それはいずれ敵となりて全てを賭けて闘い合う。

たとえ命を賭けてまでも守り通すもののために

「貴様は貴様の守るべきものを守るがいい」

そこにはもう言葉など必要無かった。

必要なのは「誓い」
それを貫き通す覚悟だ。

今はまだそれが分からなくても構わない。
大事なのは

「つと・・・じゃあ俺行くわ。まあ、なんか色々助かったわ」

「ふん・・・」

そして雅人は駆けた。

自分には待つ者がいる・・・今はただその者の元へ行けばいい。

ただ自分の信じた答えのために・・・

「酷く時間が掛かったものだ・・・もの分かりの悪い者に教えるのはどうも苦手だな」

少しばかり疲れた。

リーヴアはそう感じた。

しかし山本雅人、その本質たるものを一瞬だけでも垣間見る事が出来た、その事は確かだった。

（山本雅人、君は何を思い何を貫く。次に対峙する時はその答えを見せてくれるのだろうか）

ふとその時腕に違和感を覚えた。

あの時だ

山本雅人の、その『何か』に触発されたように自ら内に隠し通そうとしていた獣を放とうとしている自分がいた。それは恐ろしく蝕むように抑え込む鎖を引きちぎる。

いつかその鎖が消え去りし時、どのような事が起きてしまうのか・
・リーヴァ自身がソレに『恐れ』すら感じている。
震え恐れる己が腕に視線を向け哀れみを放つような瞳で見る。

(ふっ……くだらないな。いつ頃からだ、こんなにも……『楽しく』感じてしまうようになったのは)

今朝、山本雅人から見えてしまったあのおぞましくも歓喜を覚えさせるような存在。きっとこの生きているうちに二度は会わないと思うえた

圧倒的なる『黒』

あれほど恐怖と言う、その根源たるものは見たことすらなかった。

(それに真祖アルベリウス エル ヴィレイナ、あんなものをこんな僻地で目にするとは思えなかった。きっと山本雅人とは何かしら関係があるのだろう。全く 興味に絶えないものだ)

左手で腕を無理矢理に押さえつける。そうする事で自然に今までは治めてきた。

そして今だって・・・

（しかしだ。僕は一瞬でもあの真祖と言つものにそれ以上の恐れを感じてしまった。

そつだ、あの感覚は間違い無くヤツに出逢つた時のような）

「あゝあ」

そこは本来、屋上という普段は誰もいない筈の空間。

そこにはさっきまでリーヴァがいて雅人の姿があつた。今雅人がいなくなつたこの瞬間、この空間にはリーヴァ以外誰もいない。

その空間に声が響いた。

それは突然、リーヴァ以外誰もいない筈の空間に響き渡つたのだ

一閃に鋭利な銃口がまるで抜き身の刃物のように煌めく。

冷たく鳴り響いたソレは銀の銃身、リーヴアの獣そのものだった。そんなものを向けたに何かがあるか、リーヴアは全てを分かっていた。

「勝手に行かしまいやがった……せつかくだからここで仕留めちまおうと思ってたのによお」

リーヴアは『ソレ』に向けて真っ直ぐに銃口を構える。

『ソレ』は恐れず、ただ淡々とリーヴアへ向けて愚痴を吐いていく。

「貴様か」

「貴様……だあ？名前呼びやがれ。俺にはちゃんとした名前がないあ」

「黙れ、『死神』」

その一切の容赦無き殺意すら感じさせる言葉に『死神』の口からは何故か満面の笑みが零れる。

「そう言っただけ……で？」

リーヴァは驚愕した。

『死神』がリーヴァが構える銃口にちよんと、まるで水面に指を這わせるようにして触れる。

やった事はそれだけだ。なのにその行為はリーヴァを驚愕させるまでに至った。

「こんなもん俺に向けてなににする気よ、ああ？」

銃口はその先から跡形も残さずに溶け出す。

熱くも無く冷たくも無い、そんな『無』に近い感覚を受けリーヴァは銃の全て溶けきる前に手から離れた。

「ごめんごめん、『つい』やっちゃった」

まるで純粋な少年のようにあどけこの世界をあざ笑うかのように微笑んだ。

「ふん。化け物め」

「うわっ！今更そのセリフ？おっかしいねえ・・・」

「なんで逃がした？」

言葉が同時にリーヴァへと襲い掛かる。

さっきまで明るくにこやかに話していた言葉と重なって、この世のものとは思えぬ負の念を固めてぶつけるような殺気をリーヴァへと押し込める。

「リーヴァ君もことん人がいいねえ。今なら『やれた』じゃん・・・

この反吐が

「彼は僕が片付けると散々言った筈だ。この死神ふぜいが」

気圧されず、それ以上の気をもって対峙する。

「まあ・・・いいや。どっどっ自由」

「用件が済んだならさっさとこの場から消えてもらおう。貴様のその存在すら目障りだ」

「おっ言うねえ。とりあえず言っとくけどこっちはこっちでやるからそこら辺覚えときなよお・・・」

途端、闇が現れる。その名の通り漆黒に染まる閉ざされた暗黒の空間だ。

「あゝ暇だ暇。こんな適当な仕事なんかやんなけりゃよかつたなあ・・・もつとも『やらなきゃ』いけねえんだけどな」

死神はその闇へと足を踏み入れる。

「覚えておくがいい」

「ああ？」

「貴様もまた　僕の獲物の1つでしかない。その事を心に刻んでおけ」

睨みつける視線、死神へと向けられる感情は怨みと言つ1つの念でしかなかった。

「あゝ恐い恐い。すんごい嫌われちゃってるなあゝ。恐い恐い・・・」

「

ただそれだけ言って死神は漆黒の中へと消えていった。
最後に見えたのはドロリとしたその闇のように、不気味なほどの作
った笑みに包まれた死に神の表情だった。

「ふん・・・化け物め」

先の行為で溶けた銃。

リーヴァの言葉に対して『怖い』、そう言った死神。

世界はバカげていると、リーヴァはこんなにもバカげているのだと
嗤った

「まったくアイツ素直じゃねえよな」

悩みも解け、軽快に廊下を駆ける雅人はそう思った。

「つつか・・・やっぱりいいやつじゃねえかよ」

だがそれと同時に先の会話リーヴァが伝えようとしていた事、雅人にはよく伝わっていた。

あの時、必死に説得していればリーヴァを止められるのか。それはきつと違う

多分これからもリーヴァのその深い悲しみは止められない。

そしていずれ『刻』が来る。

(だから強くなるしかねえ・・・今よりも、ずっと)

俺らはその現実を受け入れなければならない。今も、そしてその時が来ても・・・

だからこそ今こうしてある時間を

ゾクリと、背筋を這い回る冷たくもなく温くもない悪寒。

おそらくは雅人のような幾つも経験を経たほんの一握りの人間にしか分からない・・・そんな『何か』だ。

これは何者かが放つ圧倒的な程の『殺せる』圧力。

(は・・・あ？なんだよこれ・・・)

確実に何かが迫るような感覚、雅人は理解した。

この学園に人ではない、何かがある。

その予感はずつと当たっていると、雅人の本能は告げていた。

(何だっつてんだ・・・クソッ)

そして宿る。頭の中に巡る不安と言う名の実が

「杏樹っ！！」

どうして今まで気づかなかったのか、自分でもよく分からなかった。それはさっき誓った事なのに・・・

根拠の無い、決して欲はない不安だけが頭をよぎっていく。出てきて欲しくはないその言葉。

死神

そうだ。それはきつとリーヴァの言った通り俺の全てを蝕むように奪い尽くしていくだろう・・・今までのようにだ。

「くそッ！くそッ！くそおお！！」

たまらず体が走り出していた。体は相変わらず痛み出し所々悲鳴をあげている・・・

だけどそんな事など言っていられなかった。

杏樹は今何をして何をされているのかも分からない、そんな状況なのだ。頭の中は混乱を招いている。思えば思うほどに気持ちにはやり、いつしか苦しい息を吐きながら辺りを掛ける自分の姿があった。

『きゃあああああああ！！』

途端、どこからか叫ばれた悲鳴が校内に響き渡る。

教室にいる生徒がざわめき出す。その混乱を抑えるように教師達がそれ以上に声を張り上げて制する。

俺は気付いてしまった。

それはいつも聞いている筈の彼女の、『聞きたくは無かった』声だったのだと……

「あん、じゅ……?」

四肢からゆっくりと力が抜けていくのが分かった。

なんて言葉を放てばいいのだろうか。

何をすればいいのだろうか。

だけど 違った。

体から力は抜けていっても動くのはやめようとしなかった。

「まだまだ……」

ヴァンパイアとして格段に飛躍したのは聴覚だった。

先程の杏樹の悲鳴を漏らす事無くその耳が捕らえ頭の中で判断を告げる。

まだ間に合う

確信に近い、自らが下した結果に雅人は安心した。
だがそれより早く雅人の足は駆けその方向へと脱兎のごとく走り出した。

『貴様は貴様の守るべきものを守るがいい』

アイツはあの時そう言った。

わかっている

だから今こうしてここにいる。

もう失わないために。

『生徒会室』

その異様な構えにこの学園の生徒たちは一歩引かざるを得ない。

何しろその作りときたら学園に存在する校長室などとは比較にもならない程の素晴らしいものとなっている。まるで中世ヨーロッパの宮殿のような美しく芸術品のような輝きを放っている。

だから余りにもその場に似つかわしくないものにこの学園の生徒たちは一歩引かざるを得ないわけである。

1人、この男を除いては。

「・・・おおおおおおお!!!」

雅人は一直線に生徒会室へと走り出す。

ヴァンパイアとしての聴覚が示した先はまさにここであった。

抑えきれない衝動をこらえ、その前に止まる。

雅人の目の前に広がるのは誰が見てもあからさまに頑丈で丈夫そうな石造りの扉だった。きつとこれも中世ヨーロッパなのだろう・・・なぜ普通の学園などにこれを設計した人間の感性を疑ってしまう作品だ。

だがそんなものは雅人にとってはただの壁に過ぎなかった。

「この・・・！開き・・・やがれええええええええええ!!!」

ただ、思い切りにぶん殴った。

行った行動はそれだけだった。普通の人間であればそれを殴っただけでも骨が痛み二度とは殴らぬ、下手をすれば折れると思ってしまう事だろう。

ただそれは山本雅人である。

「邪あ魔、だああああ!!!」

だからこれからまずっとそうしていけると

「まあそんなに堅くならなくてくれたまえ、杏樹君。

君と私、この学園の最早主柱として存在する2人が今一つになる・
・それだけの事・・恐れなくてもいいのだよ」

「か、会長さん・・・?」

「いやいや、綺麗だよ。玉のように光る肌でその・・・いや綺麗だ」

さて・・・

これはどうしたものか

いやむしろ俺はどうすればいいのだろうか・・・疑問しか浮かばない。

(うん、こう言うのはさ・・・見なかった事にするのが一番だよな)

と思いながら木製のドアのノブに手を掛ける。
途端に何故かドアは崩れ去り後ろの瓦礫と同等、いやそれ以下にも
匹敵するガラクタと化してしまった。
最早コントのような光景だった。

「ええ〜・・・」

どうしようもない、沈黙の時間が淡々と過ぎていく・・・

そんな時、彼女はいつもそう言うだろう。

『ぎゃ あああああ』

だったり

『ぎゃ あああああ』

・・・だったり

『ちよりゃ あああああ』

とは確実に言わなかっただろうけど・・・

そんな感じでいつもその場の空気を和ませてくれていたのだ。

ただ今日この場に限ってはその『彼女』が重たい口を開いた……

「ふん……この変態め」

もう一度言おう。

これはどうしたらいいのだろうか。

『会長』である篠崎 明。その重たい口から俺の胸に突き刺さるようにして向けられたそのセリフ。

大体にして現状から見ても、平日のましてや授業中にかの生徒会長が後輩（女子）を連れ込んで大変な行為をしているなどという事は許される事なのだろうか!?

そしてそんな会長に変態呼ばわりされるような俺って……

「うう……ちくしょおおおおお!!」

とめどなく溢れる涙。それを手で拭って走り去る俺の姿。

全てが悲しくなった、そんな17の冬間近の肌寒い日だった。

酷い寒空の中、雨は止みあれからだんだんと天気は良くなってきた。

ああ、晴れ渡る空。

小鳥が鳴く夕刻の空。

爽やかな

意気消沈した俺……………

(どよーん……………ってか。うふふふ……………)

暗い顔で下を向いて道端にある草をブチブチとちよっとずつむしりながら歩いている少年。

社会から見たら確実に危険人物『少年M』だろう。

「うるせえええ！こんちくしょおおお！！！」

誰に向かう訳でも無くふと聴こえた心の声に叫んだはずの怒号。

それは見事に周辺の近隣住民・買い物中の奥様方・下校中の学生に向かつて叫ばれているようにしか聞こえなかった。

それからと言うものの、近隣住民は5秒も経たない内に全てその場から消え去っていった。

この地球上で最後の1人になってしまったような今の俺。

吹き上げる寒々とした風が心に染み込んでいく……

「ふん……いーもーんだ」

そして虚しさを抑えるべく路上の小石をえいと蹴る。その行為は虚しさに加えて寂しさを増すだけだった。

(泣いても……いいかな。うん)

「……って……さい〜!」

(もう俺頑張ったよね。うん)

「……ってええええええ!!」

(もつここらで休もうか。うん)

「止まってくださいいいいいいい！??？」

「黙らっしゃああい！！このこわっぱが　　！?？」

衝撃！！

「どうあツツはああ!?!？」

自転車が　飛んできた。

俺の視界に映ったのは確かにそれだった。普通だったら自転車は空なんか飛ばない。

待てよ・・・空飛ぶ自転車とかだったら21世紀の機械仕掛けの青い猫型ロボットだったら出してくれるかも？
だけど最初の色は青じゃなくて黄色だったわけで・・・ってそんな事なんかはどうでもいいわけで。

「うばはあああああほおあああ!?!？」

大事な事は今俺が確かに死に直面してるって事だ。

大体自転車が坂の上から高速で『飛んで』きて顔面にタイヤの跡が付くぐらい轢かれて無事な方がおかしい。

とりあえずこうしていてもしょうがない。早くこの場から去らなければならぬのだ。

何故ならば・・・

さっきまで人気がまるで皆無だったこの場に、杏樹が自転車で飛んで来て俺を思いっきり轢くなどする古来のコントをした事によって何故か近隣住民から笑いと拍手の喝采が起き、凄い人が集まって来ているのだ。

「うわぁ・・・凄いですね。あっ、ありがとうございます！ありがとうございます！ありがとうございます！皆さんありが　　！？」

「はい、帰るぞー」

いい加減最後まで杏樹につき合っていたら俺の身が保たない。杏樹のこの天然な性格というのはこういった事がいい事でもあり悪い事でもある。

絶対的な天然とはこうも恐ろしいものなのだ。

ああ、俺の顔真っ赤だよ・・・

ついでにコイツを引っ張って連れて住民が見えなくなる最後の最後まで杏樹は手を振りっぱなしだった。

とても笑顔でした・・・

「ところで・・・その自転車どこから持ってきた？」

「ええ」と・・・雅人君を追いかけてる途中にあつて・・・偶然鍵も掛かってなかったし凄い綺麗なフォルムだったから！！」

「うん、それ犯罪」

「あとさ・・・あの、言いくいんだけだよ」

「・・・はい」

杏樹のやつも俺がこれから何を聞こうとしているのだろうかということはどうやら分かっているようだ。

明らかにさつきと打って変わって顔色が凄く変化している。

一体何を振り返っているのだろう　顔がピンク色になって頭頂から火山のように蒸気を噴き出して爆発寸前になったのかと思ったら次の瞬間には真っ青に青ざめてガクガクガクと身を震わして口から魂が出そうな・・・いやちよつと出ているようだ。

地球上どこを見てもこんな事を出来るのはこの杏樹ぐらいしかないのではないだろうか。

いっその事『人間国宝』に登録してしまいたい。

さて、思い切って話を進めてしまおう。

「生徒会室」

と言っただけなのに・・・杏樹は見たことも無いほどにおもしろく焦っている。

それを言葉で表現出来ないのが残念で仕方ない。

「生徒会室」

「ひい・・・!?!?」

「生徒会室」

「ひゃうツツ!?!?」

いやゝしかし何度やっても杏樹をからかうのは飽きないものだ。

こうしていつもながらに平和な時間が過ぎていけば嬉しいものだ。

ずいじりじり

「杏樹」

「はいっ！はいっ！！」

「今日はさ……俺の言うこと聞いてくれるか？」

そうすると杏樹はプクっとした顔で俺に向けた。

「許しませんよ！今回はかりはく雅人君といえど！！！」

「帰れ」

静かに、そして強く俺は言う。

「えっ……」

「帰れって」

「ま……さと君？」

「帰れッ!!」

突然の放たれる怒号に杏樹は思わず一歩たじろぐ。

そして叫んだ

「逃げるッッ!!」

心の奥底から這い上がってきたのは大きな不安だった。巡ってやってきたおぞましきその感触。

そして……

杏樹は何も言わず、けど俺の顔を確かに見ながら走っていった。その方がいい・・・あと五分も走ればアパートに着き姉貴のヤツが何があっても杏樹を守ってくれるだろう。あとは自分が『これ』を片付けてしまえば済む事だから

「おい」

暗く、憎しみがこもった恐ろしい声が自分でも分からない間に出ていた。

「出ていよ」

いや・・・これが元々だった。

これが自分だったのだ。

『おおおおおッ!!--!』

何かがとてつもない勢いで俺に向かってくる。ソレは一直線に俺に

向かい『狂気』を振り下ろす。

だが俺はそれよりも早かった

ソレの『頭』を掴む。

ソレは勿論早かったのだ。だが雅人にとっては何をやるよりも簡単で

楽しいと思った。

「アアアあぁッッ!!?」

頭は雅人の側に建っている崩れかけたコンクリートの壁へと叩きつけられ何か形あるものが碎ける音と共にその息の根を絶たれる結果となった。

それは当たり前の結果だった。

一瞬で灰色のコンクリートは赤く染まり雅人の手をその色へと変えた。

「あつはは。すげえ、やつぱすげえよお前！」

どこからともなくその声は聞こえた。

それと同時に脇道や後ろから1人・また1人と男達が現れる。

全部で俺の前に出てきたのは16人。

そしてそのそれぞれがバッドや鉄パイプやナイフなど定番と言える、それ故の殺傷力を持つ『狂気』と呼ばれるものを掲げている。

「あゝあ！？」

それを一蹴するようにそれ以上の殺意を向ける。

その姿に対峙する事である者は慄き、ある者はたじろいでいく。

ただしその者だけは違った。

「お前……」

「いよおお……お久しぶり、かあ？」

覚えのある、苛立たせるその口調・顔・声。その全てに覚えがあった。

シュリアのホストクラブにいた・・・あの『俊慈』と呼ばれた男。

「てんめえ・・・何の真似してくれてんだこら・・・」

「おゝこわ！ってか？バーカ」

一目で見えて分かる通りコイツらの狙いはただ一つ、俺だった。

「なんのつもりだ、あぁッ！！？」

「なんのつもりねえ・・・ちょっといい事教えてやろうとしてよ」

酷くにやけた顔で軽快に話す。どこか楽しそうで、快楽に溺れたような顔

「あのクラブさあ、クビになったんよ。店長のお気に入り？そのお前に手え出したじゃん？」

それについてゴモゴモ喋ってたらよお！クビにされちまいやがったの！！！！」

まるで自分の話では無く他人の不幸ごとを楽しく語るような口調で話す。

「給料高くていいとこだったけどよお、どうもあの店長ヤバそうな感じだからこっちから出てきたわ！ヒヤハハハハア！！！！」

「ま、そんな話じゃねえけどよ」

雰囲気が変わった。

まるでソイツを覆う気というものが全くの別のものと入れ替わったような感覚だった。


「思い出したんだわ・・・お前、『アレ』だろ！『アイツ』だろ！」

物に対して投げかけるような言葉だった。喋るのは『アレ』や『アイツ』のみ・・・

だけど俺は理解していた。

「お前・・・『二年前』、俺のいた族潰しやがったヤツだろ。思い出すのに苦労したぜえ・・・？」

ニヤニヤと何を楽しんでいるのだろうか、男の笑いは治まろうとしない。

「いや〜星っしょ！つうが絶対そうだしな・・・まあとりあえず
さ」

男は手を上げる。

「死ねよ」

その合図一つで後ろに控えていた16人全員が動く。

「あつははは！楽しいなあ〜！」

最初に1人飛び出してくる。

バッドを持ち上げて構え俺との距離が1メートルも無くなった時、躊躇無く思い切りに振り下ろしてきた。

縦に対する攻撃は雅人の今の動態視力からは避ける事など非常に簡単だった。

それをあえて前に飛び出す。打ち込まれるバッドに対し雅人のとつた行動はそれだった。

次の瞬間にはバッドはひしやげ折れ、対するバッドを持っている筈の男も体をくの字に倒れ込み息をするのも出来ずに悶絶している。

「てめえら……やってみやがれッ！……！」

吼える

虚空へと轟くように雅人の声は響き渡った。

同時に三人、前に走り込んでくる。

ナイフが二人とバッドは一人、それでもいくら増えようが雅人には関係無かった。

赤く吹き上がる鮮血・・・何が起こるよりも早くナイフを持ったうちの一人が宙を舞う。

それをただ目の当たりにしていたもう一人にも一瞬の迷いも無く右の拳が叩き込まれ地面へと薙ぎ倒された。

バッドは水平に振られ、それは雅人を捕らえたのだと思ったのだらう。

だがそこに姿は無く気付いたら伏していたのは自分であるという事にすら数瞬と言う時間を費やした。

「こんだけかッ!? あアッッ!??」

目の前に立たれた雅人と言う人外。

男達はその名を思い出したのだ。

狂人

その名のごとき悪魔がここにいた。
肝を抜かれたのか、当然であるが男達はそれ以上出る事が出来なかつた。

「あゝあ、しゃあねえと・・・」

の中で俊慈は前に出る。
それを待っていたように雅人は立ち上がり手に付いた鮮血を払う。

「来いよ・・・来いよ!!この」

そしてそれは虚空に轟く。

乾いた無機質ななんの面白みもない金属音、そして左膝にバランスの悪い形に撃ち込まれた『腔』。

「てめ」

二発、三発 と

両膝は原型をとどめれないほどに銃弾を撃ち込まれていた。

「世の中にはさあ、凄い物好きがいてよお・・・お前凄く愛されるみたいだぜ？」

いつの間にか雅人の周りには男達を取り囲んでいた。当然だ、抵抗など出来るわけが無かった。

「昨日、だっけ？なんか変なやつがこの銃渡してよ・・・お前を殺して、だつてよお！！！」

確実に感じる感覚。

それは終焉だった。

多分呆気なく来るとは思っていた。それが今この時だとは・・・多分思いもよらなかった事だ。

「まあいいや・・・とりあえずさあ、天国の『アイツ』と元気にやっつてなよお・・・？」

最後の最後に俊慈が放った『ソレ』

「おい」

「ああ……？」

血を

「何て言った……」

俊慈は銃のグリップを握る。
煌めく銃口は真っ直ぐに雅人の頭へと向けられた。

「じゃ『アイツ』よろしくって言ったんだよ。バーカ」

血を

「お、おいしい！誰か説明しろよおおお！！」

悲痛なその声で叫び辺りを散らし千鳥足のような走り方で俊慈は自分がどこへ行くのかも分からずにただ逃げる。

他の男達も残る理由など無く、絶望的な恐怖に駆られて声にならない叫び声をあげながら走り去った。

残ったのは雅人1人だけだった。

現状は変わらず　むしろ酷くなっていくようだ。力が入らず声すら出ない、それでいて両膝から下は血だまりと化していく。

結局最後はこうなってしまうのだと、雅人自身感じていた。

「あゝあ、逃げちまいやがった！手が飛んじまったぐらいで逃げやがって・・・」

突然聞こえる

誰のものでもない、ただどこの空間に違和感無く響く声が雅人にも聞こえた。

「起きたな。つと……ほらよ」

冷たく無機質な感触。額にそつと当てられてそのまま置かれた。

「つ……めた」

「おゝ冷たいって感じるならもう大丈夫だな」

頭もまだガンガン響いている。億劫になるほどだ。

その中で覚えのある声が出た。

「あんだ、……誰だ？」

ポカンとした時間が流れる。よく見ると俺の目の前に男が1人ポカ
ンとしているのが見えた。

「この野郎！人が助けておきながらその恩を忘れるかこのガキは
ッ……！」

顔に向かって垂直に振り下ろされる拳、それは勢いといい躊躇の無
さといいどうみても本気だった。

「……どうあッ!？」

『立ち上がり』必死の思いでその攻撃を避ける事に成功した。その途端に地面はまるで爆発が起こったように轟音を散らした。

「じつ・・・」

上擦った声は今のこの必死さを表すには十分だった。

「殺す気が！テメエツツ！！」

地面にはとんでもなく大きな穴が空いておりあと数瞬でも遅れてしまえば大惨事となっていただろうと雅人は自分に嫌と言っほど言い聞かされた。

「ぷつ・・・はははははっ！！今の見たかよ？お前のすんげえ動き！？超必死だったのな！」

それは必死にもなるう。

こんな状況を見せられればなおさらの事だ・・・

「おいテメエ、悠々と笑ってんじゃねえぞコラ！いきなりびびらせやが
「

ふと違和感が生じた。それは自分に対してである。

歩いている、ただそれだけの事だった。

それなのに生まれた違和感、俺は隠しきれなかった。

「なっ……!?!?ああ!?!?」

膝は両方とも動いていた。

全く普通に前のように、それどころかいつも以上に快適なくらいだった。

あれだけ俊慈の放った銃で撃たれ出血も酷く意識さえ失ってしまうほどのものが、今こうして無くなってしまっていたのだ。

「すんごかったよなあ、お前。あんだけの奴ら相手しときながらよ」

そつだ。確かにあの人数を相手に、そして確かに銃で膝を撃たれて

(これが……ヴァンパイアなのか)

ほんの少し前の時間に起きた事だった。それがまるで元々無かった事なのかのように……

人の域を越えすぎた人外としての忌むべき恐ろしき力。

そして意識を失う寸前に一瞬だけ姿を表したかのように『見えた』
あの存在。

「そうそう、そういえば聞きたかったんだけどよ。お前、山本 雅
人だろ？あいつら見てて分かったぜ」

男が話す言葉には何も無かった。
ただ俺の名前を聞いてそれが確信であると確かめるため、それだけの作業。

「それがどうかしたのかよ。別に大した事もねえし、ただのそこら
にいるガキと変わらねえ」

男は納得したのかその顔はさつきとは何か違うものとなっていた。
俺がその時ソイツから垣間見たのは『歓喜』だった。

何を喜ぶ、何を感じている

必然と俺は言葉を放つ。

「あんだ、名前は？」

「杉螺 凜」

「覚えとくよ、どうやらアンタも普通、じゃないみてえだしな」

「へえ・・・やっぱ分かるんだな、そういつの」

疑問は確信となる。

「何しようとしてんのか分かんねえけどよ・・・アイツには、杏樹には出だしさせねえ」

「はいはいと、まあ今日は様子見？って事でこの辺で消えとくわ。アンタ『おっかない』しなあ？」

男は最後にまた笑った。

そして背を向け無言の笑みを向けたまま夕刻の闇の中へとその姿をうずめていった。

『じゃあ、な』

あの笑みだけは、ずっと離れる事は無く自身の全てを蝕んでいくのだと　そう思って仕方なかった。

あの笑みだけは

『おもしれえ・・・コイツは久々の当たりだ』

『今すぐ壊してしまいたえが、ウルサイ奴がいるからな』

『いいやもう収まらねえ』

何も見えないほどの夜霧が覆う、珍しく天候の悪い夜だった。
冷たく肌にまとわりつくような冷気が漂い歩きそこにいるものの命を奪いつくさんとするほどだった。
故にそこにいる者は皆無で『あった』

「ああ、久々に楽しめるってか？」

なのにその声はあった。

確かに、そしてその空間にほぼ似合っているかのような存在だった。

「アイツ・・・楽しそうだなあ・・・」

おかしい言葉だった。

相手に対して楽しそう、そう言っておきながら歡喜に顔を歪めているのは自分だったのだから。

その『歪み』は収まる事は無い。

徐々に酷くこの夜闇と同じものに成っていく。

「・・・ちっ」

なのに起こった舌打ち。

それは目の前に現れた『物』に対して発したものだっただ。

「てめえよ・・・随分ふざけた事してくれてんじゃないかよ!!」

現れたのはその男。

俊慈は明らかに不衛生であろう適当な包帯に巻かれた腕を必死に抑えながら出てくる。その後ろには取り巻きである男達が群を連れ俊慈に付いている。

本来それは耐えかねれるような痛みではなかった。

千切れたのでは無い、何かがやって来て確かに感じた『熱』のようなものと共に切断された。

気づいた時には遅く俊慈の腕はこれから永久に戻る事は無くなった。

「見るよこれをよおッ！！笑えんだろっがああああ！！」

狂気に取り込まれたような表情と化した俊慈。

そんな俊慈をまるで路上の石のような、在って無い『物』を扱っように見ている。

だがその視線は真っ直ぐに捉えてはいなかった。

「シカト、かよ・・・いいぜえ。そんな事だろっよお前はよお！！こっするだけなんだからよおッ!？」

殺意がこもり俊慈の狂気すら凌駕する脅威が向けられる。

鋭く霧がかつた夜闇にうつすらとソレが浮かぶ。

「あぁッ！こうなった時どうするよぉ！！どうよ！？自分が与えた銃を向けられる気分はよぉ！！！」

いつ撃たれるかも分からないそんな状況下でさえこの男、杉螺 椋は無言を通していた。

確かに男達へこの銃を与えたのは自分、全ては山本 雅人の『今』の能力を読む為の考えだった。

それでもしなければこの男達が山本 雅人に対してまともに戦えるわけもなく、銃というものは『それだけ』をするには十分なものだった。

「・・・ねえな」

「あぁッ！？何言ってるのか分かんねえてめえよぉ！！！」

そして今、それが終わった後では男達は

邪魔、だった

「お前らじゃ1つの
カウントにもならねえんだよ」

冷たく、絶対的にのしかかる『闇』

俊慈を含む男達は気付いてしまった。自分達が対峙しているのは人間では無い。

人の姿をしているが『コレ』は違うのだ。

死神だ。

いや死神でなかったら何であるのだ。
こんなものがこの世にいたのでは 自分達はとうしたらいいのだ
ろう。

絶対的な死を運んでくるその存在にもう勝ち目などは無かったのだ。

「だからってよあ・・・この腕はどうすりゃいいんだあ!???てめえがやってくれたんだッ!てめえにもその身で詫び
」

俊慈の横で　ズルリと音が鳴った。

ハッキリと聴こえたその音に俊慈は息つかず顔を向けた。

目を疑っただろう。

きつと『ソレ』は仲間の1人なのだと、気付くのに数秒の時間が掛かった。

しかしその数秒の果てに仲間の四肢は生ぬるい音と共に崩れた。

驚きよりも焦りが先にやってくる。

こんな事を行ったのは誰だ、と。

そして『応える』ように掠は笑った。

それは同時に俊慈の世界が音を立てて崩れた瞬間でもあった。

『あゝあゝアアああアああッッ!』

その叫びには歓喜と恐怖が入り混じりもうそれはどちらが叫んでい

るのかすら分からなかった。

理解出来たのは俊慈の目に映ったのは地面に伏した体、そして目の前には自分の足があった。

最後に見えたのは自分に向かってくる棕のその笑顔に満たされた表情。

そして次には何も見えなくなった。

ただ聞こえるのはその叫び。

歓喜、それだけだった

第10夜 F a i l (前書き)

お久しぶりな更新です。どうもRevです)・(/

もう今までなまりになまりきった…

これからは集中出来る筈だ！(オイ

第10夜

F a l l

崩れ落ちる骸

手を掲げる

それを掲げただけではらりと感った

こんなにもソレは儂かったのか

それもまた現に響く

それもまた

堕ちていく

「まあああさとおおくうううん!!」

目の前に広がる白いもの、多分制服。

それが分かったのはほんの数秒後の事だった。

最初は何が飛んできたのかと思った。

だけど顔にブワッとそれが覆い被さる事によって初めて理解出来た。

「ええい!例によって何者だ、痛い!苦しい!うるさい!暑い!・・・
ええい!離れる・・・やあ!!」

とりあえずひっぺがす。そしてぶん投げる。

予想通りピヨーンと言う普通は有り得ない音と一緒に綺麗に飛んでいった。

ついでに聞きたくは無い音も共に・・・

「まったくこんな寒い日に熱量を増加させるような奴はいった」

「痛え・・・」

「・・・はい？なんか聞き覚えのあるような、百獣の王のようにな
スの利いた・・・」

確かに聞こえた。それは確かに聞こえたんだ・・・暗闇の中に光る
猛獣の目ににじみよる化け物の気配・・・そう、奴は我々全てを食
い尽くさんとしているのだ・・・！！「昔孝太郎と見たB級モン
スター映画のセリフより」

「まゝさかそんな、なあ？日本なんかジャングルの猛獣なんか
いるわけもねえしよ・・・」

キュピーン！

などと言う効果音が適切なのだろうか、そんなありもしない効果音
が音と目の前に見える恐怖として襲いかかってきた。

「まっ、マジかよ・・・笑えねえ」

果たして動物園にいるような猛獣が日本の国土で野放しにされてい
る、そんな状況がありえるのか・・・だが今はそんな事など言っ
ていられなかった。

(やるべき事・・・先手をつくしかねえ！)

息を潜め、時には備える。

こんな事態を想定しての対策などがあるわけは無い、だが・・・やるしかないのだ。

しかし幸いどんな事態でもやる事はただ一つ。

先手をつき、そして一撃で相手を無力化する。

(いや、それが出来る相手だったらなあ・・・多分猛獣だとか言われてないだろうしなあ・・・)

一人で突っ込み一人で切なくなる、という事などをしてる暇は無い。

目の前にいるだろう猛獣は確実に一歩ずつ近づいて来ており殺気もどんどん増して放たれてきている。

(マズい・・・)

攻めるとしたら今しかない、逆に言えば好機である、そんな瞬間だった。

「くたばりやがれええええ！この化けも」

「誰が化け物だ、コラ」

「すみませんんんん！！」

そういえば我が家はいつもこんな流れだ・・・

「ったくよお・・・帰ってきていきなり人の事を化け物扱いしやがって。こっちもついつい手が出ちまうとこだったたるお？」

とか言いながら姉貴の野郎はニヤニヤとしながらこっちを見て楽しんでやがる・・・

「いや・・・どう見ても手が出ちやってるし、それもタコ殴りってぐらいやられちゃってますが？」

そう言う俺は顔面が腫れ上がりコフーコフーと息をするにも苦しいような状態だ。

「んん？」

相も変わらずニヤニヤしてる。なんて性悪で立派なお姉様なのであるうか……

「あれ？そついや杏樹の奴は？」

そつなのだ、さつきから杏樹の姿が見えない。どういう事なのだろうか、あんな事があり先に返した筈だが……

それを無言の圧力、いやいや失敬いやほんともう殴るのは止めて……

お姉様は無言で俺へと目掛け指を指してきた。

「ん……？俺がなんかした　　つてうおあつ！！？」

俺を指したのではない、俺の下にいる人物へと指を目掛けたのだ。

その先には勿論のごとく彼女がいる……

「もしかして俺ずっと踏んでた……？随分と感触のいい座布団だと思って正座してたんだけど」

うんうんと思いつき縦に二回頷く。
容赦なく思いつきり、だ。

「すまねえな・・・あれ？おーい杏樹ー？おーい・・・」

全く反応が無い。と言つことは・・・

「し、死んで・・・いや寝てるだけか」

素晴らしく爆睡だ。恐らくは

「俺がさつき投げ飛ばした後寝てしまったと？それもこれほどの爆
睡で」

またもや姉貴は首が取れてしまいそうなほど首が縦に振られた。

「ったく、すんげえ寝ちまって。こっちは大変だったっての・・・」

「おい」

それは俺が気付く暇も無くやって来た。

はっとした時にはびりびりと頬に響く痛みだけが残る。

「・・・つてえ」

そして休む暇も与えられず制服の襟を掴まれ姉貴の元へグイと引き寄せられた。

「コイツがなあ・・・どんな思いでお前を待ってたか分かんねえわけじゃねえよな。走って走って疲れ果ててそれでアタシに抱きかかってくるよお・・・」

ハツと我に帰ったのが自分でもハッキリと分かった。

よく見れば分かる事だったのだ。それを自分だけが疲れ自分だけが苦労したのだと全てが見えなく・・・見る事を拒んでいる自分が居た。

馬鹿げた事だ

よく見れば杏樹の体はボロボロであり所々に草木がくっ付き色素が制服にこびりついている。

きつと・・・姉貴の奴にこの事を伝える為に最短距離、それも人が走れるような道では無い場所を走ってきたのだろう。

誰でも分かる事だ・・・そしてそんな事にも気付かない俺がいる。

「雅人君を助けて、雅人君が危ないの、雅人君が大変、聞けばこう

だ。雅人君雅人君ってよ・・・見りゃ分かんたろうがよ。それでもお前自分だけが大変だったか？どうなんだよ、あ？」

だから姉貴は珍しく何も言わずただ頷いてた。ただ俺はそれでも気付かなかった。

「ゴメン・・・」

それしか言えない。
結局それしか出来ないのが今の自分なのだ。

「ちっ・・・」

完全に呆れ果てたような視線を向けられる。
仕方がない、それほどの事をしてしまったのだから。

「馬鹿やろうが・・・もうその手、離すんじゃないぞ」

言葉は無く、ただ頷いた。

それを見た姉貴は話題を変えるように促す。

「まあアタシにはよ、そんな甘ったるい青春文庫みたいな話はどうだっけいいんだよ。肝心なのは『ここから』だ、分かってんよな」

必然と顔を上げる。これから先は『俺達』の話だ。

そう　ここから先は、だ。

「んで、相手は誰よ。お前を、襲ってくるぐらいだ。覚えのあるやつなんだろ？」

姉貴の声色が強くなっていく。いつにもなく真剣であり事の重大さをその雰囲気か示している。

「俊慈、そうアイツは言った。前までリーヴァの店でホストをやつて……」

そこで声を止めるしかなかった。姉貴の目がそう選択をさせた。

「野郎……」

明らかな反応が違う。

分かっている

俺にだってすぐに理解出来た。『アイツ』は……

「分かってんだろうよ。お前に『二度』も手え出したって意味。それだけなら、だ……アイツは違うよな。アイツがお前にやった事、忘れちゃいけねえんだ……」

分かっているんだ

「分かってんだよ……忘れるわきゃねえだろうが」

「お前……」

この顔はきつと杏樹には見せられないだろう。
きつと……俺の事を

恐れてしまっから

「雅人」

ふいに思い出したく無かった声が目の前をよぎっていく。

俺は叫ぶ

やめろ、と

「雅人」

思い出したくは無かった、あの出来事。

「雅人！」

目の前にいつも通りのように拳が降りかかる。

こずくのような軽い一撃。

うちのご覧の有り様な現状を見れば文字通り一発で理解出来るような展開。

何かあれば拳が飛んでくる、ただそんないつも通りのバカな展開なはずだった。

「……いてえよ」

避けられなかった。

むしろその当然の行動を拒むように自らが避けようとしなかった。

自分でも驚いているのがよく分かる。

「……やっぱな。この腑抜け」

貶すような言葉。姉貴が俺に対して掛ける言葉で考えれば普通だったがやはり何か違って聞こえる。

「やっぱてめえはあの事から腑抜けだつてやんだ。今までグズグズ引っ張っておまけに事に生じて牙まで抜かれたのかよ……この腑抜けが」

全くもって酷い言いようだ。いち弟の対して人権つてものを考えて言っているのだろうか……いや無理だろう。

「いいか・・・この件はな。お前なんかじゃ任せれねえ。あたしが片付ける。だからなあ、てめえは大人しくそこに座ってやがれ」

言い終えるより先に勢いよく姉貴は立ち上がる。

そう 確かに今そう言った。

「冗談じゃない。」

この話は これは俺が片付けなきゃいけない事なのだから。

これだけは・・・

「待てよ・・・！これは俺が」

その声を拳が制す。

目の前に抜き身刀のように鋭利に向けられた研ぎ澄まされし拳はそれ以上を語らせない。

「・・・なあ」

その行動とは全くの逆のものが生まれる。

それは声

姉貴の口からは普段の様子とは取られないような声が聞こえた。
か細く、何かに怯える小動物のように　　そうして震えていた。

そしてその声もそこで止まる。

「やっぱ・・・めんどくせ。いや、もう行くし」

普段の姉貴に戻ったような気がする。そして少なくともさっきよりは『大丈夫』だと、そう感じる事が出来た。

「なんだよ・・・姉貴らしくもねえ。俺が牙を抜かれたとか言ってるけどよ、案外そうなのは姉貴のほうなのかも　　なゝあゝ!!!?」

本日・・・あー何度目の鉄拳になるのだろうか。
それもマトモに、だ。

いつもの姉貴が放つような・・・いや今のは若干強力だったと思う
が俺の記憶にある『山本 幸』そのものだった。

「調子に乗ってんじゃね〜ぞ〜。こ〜ら〜」

鉄拳をマトモに食らって倒れた俺に対して慈悲の心の欠片も感じさ

せない修羅がそこにいる。
襟元を掴まれてぐいぐいと上下左右に振られている俺は姉貴にとっ
て一体なんなのだろうかと問いただしてやりたい……

そして飽きてしまったのだろうかそのまま部屋の端の方へ抵抗も出
来ないままに投げられた。

「ったくよお、実のお姉様に向かってなんて言葉を吐いてるんだか
……誰がそんなんに育てたんだか……」

冗談を言っているのだろうか……

あえて、言わないでおこう。
いやむしろ思い切り指を示したい方向へ差してやりたいぐらいだが
命がいくつあっても足りない、やはり何もしない方が懸命だ。

「あゝあ冷めちまったよ、こんちくしょう。まだ外の気温の方が暖
かいつてもんだっての……」

なんだかんだ言って外はもう冬間近の寒空が広がる季節である。
吐く息は白く立ち込める大気はキラキラとした霧が立ち込めるよう
・・姉貴が開いたドアの先はそういった幻想的な世界が広がってい
た。

「それじゃあよ、行ってくるわ。あとよほんと言っとくぞ……」
一瞬言うのを躊躇したように言葉が曇る。だけどそれは数瞬のうちに飛んだ。

「これはアタシが解決する、お前は……何もするな。アタシが全て終わらせるからよ……絶対に」

そこに冗談混じりの言葉などは一つも無い、ただあるのはそれを覚悟するべく灯された殺意すらかなわぬ強靱な『刃』だった。

これだけ実の姉貴に対して怖さを感じたのはいつ以来の事なのか、多分今ほどのものは無いだろう。

「絶対にだ……」

最後に聞いたその声

朝焼けの日を待つ前に暗闇へとそれは消えていく。

そして放たれた

第11夜 U n a w a r e

荒廃した地

誰も気付かぬままにその花は咲く

そして

いつか地は枯れ花は尽きよう

花は気付いた

自らが枯れていない事を

誰が

この水は誰が

花は気付かなかった

いつもいつでも切らさずに水をくれる商人がいてくれた事を

その幸せに気付きもしないでー

「よぉ〜っつっす

ドゴオー!

「う〜あ・・・」

学園に登校して早々・・・エルボー、そんな様だ。

しかも後頭部から思いつきりだ。痛くないワケがないだろうにこのアフォ野郎!

「てめ・・・百樹、この野郎　　!」

「あゝ朝の挨拶なんでご勘弁をどうかこの不甲斐ない男に」慈悲を「

全部棒読みで謝る気が無いように見えるのは一体なんでだろう。とても悔しい気がする……

「……ああ、めんどいわ。おやすみ」

「こんなにもノリが悪いとはどうしたんだね？雅人ぼっちゃん」

「それはね……ああクソ、めんどくせえ」

「ホントにだるそうだなオイ」

「お前の無差別なノリつつこみについてくほど元気がないだけだよ
こんちくしょー」

クスリと、自分だけが楽しめるのだと言うように押し殺した声で百樹は笑い……

「丁寧な解説ありがとう」

「もういいから寝させてください……」

「こんちくしょー!!!!」

そして一人で泣いて走っていった。
相変わらず騒々しい男だ

「つつか今日の授業も何も担任はいないわ自習って物も無いわどう

なってやがるんだこの学校はよ、なああん・・・」

うちの学園の売り文句としては、まあ定番の『有名校への高い進学率』やら『恵まれた環境』などが掲げられている。

それなのにそんな学園の平日のましてや朝早くから見られるような光景とは程遠いような状態だ。これらの放任っぷりと来たら凄いものである。

そしてうちのクラス・・・いや学園の最早名物（この場合、迷惑な物と書いて迷物と読んだほうがいいのかもしいれない）

となっている百樹を放っておいていいのだろうか、そこだけが気になる。

・・・

ついでに言つと今はそんな事はどうだっていい。問題なこれだ。

ちくしょうめ・・・

やっぱり予想通りだ、杏樹の野郎・・・寝てやがる。

そして口からよだれがいつにもまして溢れてしまいそうだ。

（・・・どうせまたキャベツやらなんやらが沢山出てくるような幸せいっぱい夢を見てんだろうな）

やる事も無く俺は机に頭を載せてただボーっと眺めていた。次に出る言葉に期待するよつに

「おじさん……ニンニクの詰め合わせスペシャルダイエット豚骨ラーメン……大盛でお願いします」

口に含んでいた物を全て吹いてしまった気がした。

笑いを堪えるには耐え難い……そんなメニューだったから。

どうしてくれようか……まずはどう突っ込んでやるう。

ニンニクの詰め合わせは……うん、冷静に考えてまあ『ダメ』だめだろうな。

そもそも狼男がニンニクを好きだってケースなんて、吸血鬼がニンニクを好きだと高々と言い張るぐらいに有り得ない事だ。しかも大胆にも詰め合わせとな……いきなり突っ込んでいいのだろうか。そして次だ。スペシャルなうえに杏樹の奴は『体型』を気にしているのだろうか……？ダイエットと名の付くものにした……なのに豚骨ラーメンという矛盾。

そして 大盛

ええ、アウトでしょう。

よって俺は口からあらぬような程の量の何かの水を吹き出すような

結果になってしまった。

「ご愁傷様である。」

「ぶつ、ぶはあ！？・・・てめえ杏樹こら、一体どんな夢見ちやつてんだよ！流石の俺も吹いた・・・って・・・」

「美味しいね、雅人君・・・えへへ」

満面の笑み、夢の中の彼女は何を思っているのだろうか。到底俺には分かりもしないだろう。

だけど最後にそう俺の名前を呼んでくれた、それだけ・・・それだけは素直に嬉しいのだと思う。

「・・・なんだよ。俺も夢の中にいるわけか。ははっ」

ただこうしていただくらない事なんかで笑える時間、ただ長ったらしくグデグデとしている時間がずっと続けばいいと今はそう思えた。

（あの時は・・・そう思えたのかな）

そしてまだ芯となって残る物。俺の、あの時の・・・

チャイムが鳴り響く。

当然のように鳴るだろう授業の終わりを告げる合図。

それも、当然だと言うように聞いていただけなのだろう。

今となつては取り戻す事の出来ない、あの時も　あの瞬間も

ただこの手から離れて、そして消えていったのだから。

男は倒れる。

その鈍い音と共に砂埃だけが舞った。いかにも高そうなスーツを着た男は口元から赤い色を垂らしそれから動く事は無い。

こつした理由で人を殴る事は久しぶりだった。アタシは何をイライラしている・・・

ー　ー　そうだ。

雅人があんな・・・あんなに悲しい顔を見せたからだ。

なんでか、それを見てからアタシは少しだけ苦しいのだろう。こんな事までしているのだから。

「ーこりゃあ・・・」

人の声がする。アタシはこの声を聞いた事があるのだろう。確かコイツは雅人の・・・

それに気付くのが少しばかり遅かった。体が反射的に動く。

飛び抜いた右の拳は先程から倒してきた『コイツら』に向けたものより遥かに早くそして重い。

そんなものを刃のように振るったはずーすでに疑問が駆け抜け始める。

今アタシが目になっているのはいとも簡単に止められていたこの拳の姿だった。

「ダメ、つすよ。姉さん」

言葉と同時に疑問はそれ以上生まれなかった。

「シユリア・・・」

納得だ、と認め拳を収める。それは確かにコイツなら納得だ。そしてコイツに会いたいがためにやっていたのだから。

「うちの店に殴り込み、ってわけでもなさそうっすね」

シユリアがアタシに向けているもの、それは安心しての笑みなのか。

そもそもこの連中相手に『自分達人間』が脅威をふるえるのだろうか、それすら疑問に思う。

「あゝ・・・4人。少しばかりこいつらに言うの遅かったっすね」

確認するように地面に横たわっている人数を見渡す。

確かにアタシが片づけたのは4人。いや、片付けたと言う表現とは少しばかり違う。

考えていた通りの結果。

コイツにたどり着くまでに必ず現れる障害、むしろここは都合が良かった。

店員であるコイツらを倒してしまえば必ずシュリアが出て来る。

多少強引ではあるがシンプルでいて一番最善な方法ではないだろうかとアタシはいいわけをするように自分に訴えかける。

実際、『これ』は良くない。いくらアタシだろうとちょっとはいいわけも考えなくなる・・・が場合が場合だ。

「何か俺に話でも？でなきゃこんな事はいくら姉さんでもしないはずっすよね」

話がある、そう告げようとした矢先、シュリアはニヤニヤとしながら答えた。

「コワイ顔・・・そんなの姉さんには似合わないっすよ。それにほら、今はあなた有名人なんだ、無理はいけないっすよねえ？」

まさにそれはコイツの口から出て来るとは思わないぐらい正の論だった。

確かに・・・アタシの復帰戦が近付いてる今、これ以上の問題は起こすわけにはいかないだろう。そしてそれはコイツらも一緒だ。ホストクラブのド真ん前、ホストと復帰戦を控えた女格闘家のもめ事、記事としてはそれだけでさぞ楽しいものだろう。

「今うちは営業前なんすよ、だから・・・え〜と、なんだ。姉さんに言うのはなんか緊張するな。とりあえず入ります？」

そんな緊張という単語とは無関係なほどシユリアの声は・・・言うなれば間が抜けている。

人差し指で『STILL』と掲げられた看板を差しニヤニヤと微笑んでるあたりがまさにそれだ。
しかしそれはこの体に走る寒気に似た『本能』が吹き飛ばしてしま

肉が軋む音

みしり、みしりとアタシにしか聞こえないだろうその音はおそらくアタシだけに向けられている。
だが端から見れば何も変わらない。

そのシユリアの笑みに満ちた表情も

夜の風の寒さも

このネオンの奥に潜む果てしない闇も

全てはアタシに向けられているものなのだ、アタシの『本能』が告げていた。

今、そう理解する。

店の開店までもう時間が無いのだろうか店員が緊急態勢を取り激しく動いている。

当たり前的事だろう、欠員が出れば店側はそれをカバーするために必死になるものだ。ましてや今回は4人・・・決して楽ではないとアタシにでも分かるような事だ。

そんな中で異質を放つのがアタシらだった。

店を作った『社長』自らが手招きし『店長』であるシュリア及びアタシを店の奥側、いわゆるVIP席へと案内する。これが異質でなくてなんであると言うのだろうか、思うままに接客され思う。

「シャンパン」

席に着くやいなやシュリアが言ったのはそれだった。

キツイ睨みつけるような表情に自然とアタシはなる。

それはそうだ・・・今回こうして話をしにきたというのにホストクラブそのままの仕事をしようとしているとされている、睨みたくなるのは道理だ。

「やだなあ、ただのシャンパンっすよ！何も入れて・・・ってそう
だ。姉さんは強い酒の方が好きでしたよねっ！？そりゃあ俺のうっ
かりっすね。ヒヤ
」

瞬間・・・すう、と風がその身にまるで刃を帯びたようにシュリアの鼻頭を通り過ぎる。

それは見る者全てを硬直させるような剛にして一瞬で切り裂くかまいたちのような拳だった。

それを具現化する答えが数秒の後現れる。

シュリアから見て右、その壁際からガラスが割れるような音が静かに聞こえた。

場に申し合わせたホスト達はそれより数秒かかってからその変化にようやく気づき視線を音のした方へ一斉に向ける。

まるで手品師がする魔法のような手品に釘付けになるように

よく見ると音がした位置にはあのガラスが置かれたままだった。

ただ不自然なのは、そのガラスの胴に位置する部分だけがぼっかりと削がれている。そして遅れてようやく中に入っている酒と言う液体が勢いをつけてこぼれだしたのだ。

まさにそれは見る者を魅了する手品に他ならないものに見えた。

「どうだっていいんだよ、そんなのはよ」

誰もが息を呑む　その者以外は。

「そんなのは・・・か」

シユリアの、その意外にアツサリとした返事に一瞬拍子抜けするよ
うに力が抜けた。

そう、一瞬だけでも思ってしまった自分に後悔する

その先、その数瞬何が起こったのか分からなかった。

アタシの意識下がゆっくりとスローの中、いや意識は正常である。
そんな中『それ』は襲いかかる。

『それ』にとつてはアタシらは所詮くだらないものでしかないのだ
ろう。

地を這う餌を当然に食らいつくす猛禽のように・・・それは一片の
感情を見せぬままに獲物の全てを引き裂いてしまっただろう。

まさにアタシは餌だ　そう気付くのが酷く遅すぎただけなのだ。

「ねえ、姉さん」

首筋に這っているその牙が語りだしているような生々しい言葉だった。

少しでも動いたものであれば命は無いだろう、体を動かせないのはそのせいだと今一番自分が理解している。

「そんなの、はないでしょうや・・・こっちのもんはアンタに酷くやられちまつてる。今更そんなの扱いつてのは・・・どういった趣向なんすかね」

確かに　　違う。

普段この身で体感してるシュリア、そのチャラチャラとした姿、言動、全てを持ってしてもこのアタシに叶う筈は皆無も無い。

しかし、どうだ。

今身に降りかかる現状。

例えば指の一本でも動かした瞬間、アタシの体は四方に引き裂かれ蹂躪され全てを奪われる、そうなる事が『解って』しまっ程に神経が張り詰めてしまっている。

アタシは、山本　幸はここに痛感する

だけど　　もう引き下がれない。引き下がれたらどれほど楽な事なのかはよく分かっている。

だけど

「どうして」

永遠とも思える間が空く。

「これ以上・・・どうして雅人を傷付けるんだ、お前は」

それは言葉としても今日ここに来る事になったキツカケ、本来伝え
たかった意味としてももうやむやな表現だった。

自分でも何を言っているのか分からないのだ、何一つとして伝わる
筈もない・・・

「そうか・・・聞いたかった事ってのはこれの事スね。道理でなか
なか聞けなかつたわけだ」

それは 予想もしていない答えだった。

「俊慈の事、っすね」

ふう、と息を零した後シュリアは自分の後にあるソファーにもたれ

掛かる。

こうして拘束状態から解放されたのだが今となつてはその自由を感じるような場合ではない。

「お前・・・!？」

落ち着いて、とシュリアが放つその一言がアタシを制止させる。

よほど慌てる様子に見えたのか、だがシュリアの掛けた一言は思いの外アタシを落ち着かせた。

「姉さんの言いたい事は俺にはよく分かりますよ。勝手っすけど俺なりに調べさせて貰いました」

調べる 何を

そうだ、きつとあれしかない

怖い 怖い話だ

「兄貴の過去、聞いた奴らみんなが言ってる・・・いわゆる『あの日』に起こった出来事が」

「言つな」

拒絶する

「それ以上、何も言わないでくれ」

シユリアはそれ以上の事は確かに言わなかった。

決して普段からは連想される事の無い、まるで子犬のように震えるアタシの姿を見て・・・

彼も理解したのだろう。心境を受け取ってか、また気遣いか、シユリアは何も言わずと低い所にある天をただ眺める。

ずっと　ずっと

「ねえ、姉さん」

ただその一言を呟く。

「なんつうか・・・すみません。俺なんも分かってないし、みんなの中で何が起こったかも知らない。そんなんですれ教まがいな事なんて・・・とんだお笑い者だ」

自らを笑い、まるでピエロのように言っている。

「だけど」

それでも　力強く

「だけどさ・・・俺は知ってますよ」

シュリアの顔にいつも通りの笑みが戻る。

「兄貴は強いって　どんな事があつたって、どんな化けもんが来たって余裕で勝っちまうんだって」

全てを言い終える前に少し恥ずかしいのか苦笑して顔を下げた。きつと・・・きつと彼にとっては精一杯の思いを詰めた言葉だったのだろう。

「俺は、そう信じてますから」

ああ

そうか

「・・・バーカ。んな事ぐらい姉のアタシだって分かってんだよ」

バカはアタシだ

アイツには・・・こんなにも信じて、支えて待ってくれる奴がいる。今更アタシは何を恐れる。この世界で　誰がアイツを否定するんだ。

そんな馬鹿げた事によりによって・・・はは、コイツからようやく気付かされた。

「・・・シユリア」

「はい！」

即座に反応する。当然営業用に作られたような完璧な笑顔でその場に華が彩ったようだ。

普段ならこうというのはムカつくところだが・・・今は不思議とムカつかない。

それも目の前のコイツのせいだ！

それが少しだけ・・・ムツとくる。

「・・・ドンペリ・ゴールドだ。ありっただけ持ってきやがれー！」

「・・・はいー」

夜は更けていく。

今夜だけは　優しい風が吹いていた。

そんな気がする

ドンドン、と激しく何かを叩きつける音がした。
最初は雷でもアパートの前に落ちたのかと思った・・・その音によ
って凍える体を布団から叩き起こされた。

「・・・んだよ、コラアツツ!!」

当然イライラして立ち上がると真っ先に音のした方向、すなわち玄
関のドアに勢いよく蹴りを入れる。

しかし寝ぼけていたのか蹴り込んだ自分がその勢いによって布団の
位置まで飛ばされていく。勢いは止まらずそのまま

転がり雷の音どころではない轟音をあげて床に叩きつけられた。

それこそ近所的に迷惑な話だが・・・時計を見た時、深夜2時とか
だったりするから寝ぼけててもまあしょうがないかと思ったりもす
る・・・所詮言い訳なのだが。

「だ〜れ〜だ〜。この純粹無垢な高校生の大事な睡眠時間を奪おう
としてるチャレンジャーは・・・」

さっきのダメージなど気にしないまま半ば寝言のように罵声をあげ
ながら俺は千鳥足で冬の寒風吹き荒れる（誰とは言わないがムチャ

クチャな横暴をする暗黒大魔神がポツカリ開けた穴が原因）玄関に向かいなんとか歩を進める。

そしてガツチリとドアノブを握り締め・・・一気に引き抜こうとする。

「よゝしと・・・偉大なるマウンテン井之鬼さんに敬礼を込めて・・・」

なんだか無駄に力が湧いてきた・・・そうだ一気に力を込めてこのドアを引けばいい！

「1!2!3!・・・あ?・・・ンダアアアオアア!!?」

目の前に濁流として流れ込んできたのは紛れも無く・・・奴だ。

「ぐ・・・ぐるしいんだよ、てめえ!あれ?」

どうみても・・・これは姉貴だ。

ただ違うのは、なんというか・・・

「おゝい」

凄い・・・酔っぱらっているようだ。

それは信じがたいような光景なのだ。

姉貴の酔っぱらっている姿を見たのは弟の俺でさえ初めてだった気がする。

何せ普段から酔っ払ったように狂乱して日本刀をブンブンと振り回

しているのだからさながらその光景は

『殿が御乱心じゃー！』

つてな感じだった。

だからこんな定番なお土産を持って帰ってくる金曜日の疲れたお父さんスタイルな姉貴を見るのは初めてなのだ。

しかーし！問題はそこじゃねえ！

この野郎・・・アタシに任せろ的な発言で頼りがいあるお姉様をアピールしときながらこの愚行・・・許すまじ！

「まさ〜と〜」

「酒くさあつ！？お前つ・・・どんだけ飲んでんだコラッ！？」

返事が帰ってこない。まるで役にたたねえ姉貴だ。

こんな鬼のような奴・・・このままここに放置してしまえば楽なのだがそれではこの寒空だ、凍えて下手をすれば凍死してしまう。まさか姉貴に関してはそんな事は決して有り得ないんだが・・・一応慈悲の心をかけてやるう。

とりあえずここまでグデグデになっている姉貴を運ぶのは正直疲れる、いや下手に運ぼうとでもすれば体が戦闘反応を起こして肘でも飛んでくる可能性すら考えられるのだからそんなのは御免だ。

よし、ここに布団でも敷いてやるう！

それが最善の策で間違い無い事は俺の中の本能がそう告げていたのだ。
実際部屋の中も玄関もたいして気温の差は感じられない。というか部屋すら穴だらけなのだからどっちにしても大差は無いはずだ。
ならここままでしてあげる弟に感謝ぐらいしてほしいものだが・・・
寝ている相手に言っても仕方がない。

「よっ・・・とお？」

いざ布団を押し入れから持ち上げようとした時、その声は聞こえた。

「ねえ雅人？」

・・・

誰だ！これはッ！？

絶対に姉貴なんかでは無い・・・こんな口調や声色なんか聞いた事が無いぞ！

しかし他には誰もいない・・・誰もいないのだッ！

「・・・えくと、はい？」

「アタシね、もう駄目かも知れないよほんとさあ・・・」

重傷である

今ここにいるのは誰だ。

そう自分に聞いてみるが一向に答えは出てこないっす！

「ほんとにさあ・・・情けないお姉ちゃんなんさ。ほんとと雅人にも迷惑かけてるしもうどうなっちゃってるんだか・・・」

十分に分かってるじゃないか。これを期に少しずつでいいから人間洗淨してくれ

とは絶対言えない。

にしてもらしくない。俺としてはこのままでいてほしい気もするがなんとなく・・・そうもいかない気がする。

「っと、何があったんだよ。姉貴らしくもねえ」

ドンと姉貴のそばに座る。

「・・・怒られちゃった。シユリアにさあ」

「なんで雅人を信じてやれないんだって・・・あんなにも強いのに、誰もかなわない強い奴なのに、そんな雅人をどうして信じてあげられないんだって・・・」

初めてだ　　姉貴がこんなにも

「ほんつとバカなお姉ちゃんだよ」

悲しそうに見えるのは

「それに山本家の穀潰しだ、やれ生きる借金精製機だ暴力的最終殺戮兵器だつてさあ」

「そ・・・そんなに言われたのかよ」

あのシュリアから絶対に出る事の無い単語の流れに俺は思わず苦笑してしまった。

それを見て・・・伏せていた姉貴もつられて笑った。

二人で　　しばらく笑った。

疲れたのか姉貴は少し落ち着き安らかな顔に戻った。
俺も少し安心した。

「なあ……」

姉貴は返事を返さなかった。

疲れたのか……それとも耳を貸そうとしたのか言葉を発する事はない。

「なんつつかさ……」

ほんとなんていうかこういう事を喋るのはかなり恥ずかしい。

「一応大切な姉貴なんだからさ……心配かけさせたくないし家族として大事にしてるつもりだからさ……」

静かな、静かな真夜中に告げる

「俺は大丈夫……辛い事あったって何があったって頑張って乗り越えていくからさ」

「……ねえ、雅人」

「は、はいッ!」

ちゃんとすっかり聞いていたようです。

恥ずかしすぎて冷や汗と涙が溢れて止まらないよこんにゃろー・・・

「こんな姉だけど・・・これからもよろしくお願いね」

それは姉貴、いや姉から初めて聞いた素直な気持ちだった。

「ああ、こんな事改めて言うのも恥ずかしいけどよろしくな」

少し、嬉しかった。

こんな事が嬉しいと思ったのは初めてだった。

「さつて・・・アタシも部屋に戻りますか。いつまでも年頃の弟の部屋に居ちゃいけないし」

「バーカ、何が年頃だよ、ははっ。つつかそんな足取りもフラフラで大丈夫なのかよ?」

何故かそこで姉貴は完全に停止した。止まっただけでは無く停止したのだ。

どうしたのか・・・よく見ると明らかに考えごとをしているような顔だ。そして微妙に顔色が悪くなっていく。

途端！向き合ってる玄関から180度回転して俺の方にドスドスと歩み寄ってきた。

「はいッ！これプレゼントッッ！！」

そう言っただけはまるでハリケーンのように埃を散らし玄関から一気に去っていった・・・そこら辺は凄い迷惑だ。

そして渡されたのは、折り置まれた一枚の白い紙。

体験談から言っただけでこういうのはとても『良くない』
むしろ確実に最悪なケースであると言える。

更に言える事は怖いから後で布団を被ってガタガタいいながら見ようが今あっさりで見ようが結果は 全くと言っていいほど変わらない事なのだ。

「はあ・・・」

悲しい事に俺はもうこの手の事に慣れてしまっていた。

そして選んだ選択肢は・・・今開く事だ。

領収書

山本 幸 様

金 686,500円

備考 飲食代として。

PS・兄貴こんばんわ〜 え〜と今晚は兄貴のお姉様がお客様として来てくださいました！盛大に盛り上げたつもりではありませんが・・・感想はどうぞご本人から！あとこちらの料金ですが・・・お姉様ということでも割引のサービスを致しました！あらなんて明朗会計嘘偽りありませんよ〜？あと最後になりましたが兄貴！本当に愛し都合により以下略

/Club 『Still』 /

絶対、許せねえ・・・

今はドス黒い感情しか生まれません

第11夜 Unaware (後書き)

え〜と…まずはあれですよ？

明けましておめでとございます！

今年もよろしく…って言いますか覚えてる人ほとんどいないよっ
)*、、(=

覚えてくれてた方へ…どうもRev crazy dreamです。

初めましての方はどうぞよろしく。

…およそ5ヶ月ぶりの更新だぁw

何をしていた(汗

答え・色々大変だったんですよ…(。、、)

とまあこれからもこんな劇的な遅筆ですがよろしく願いしますm
(。、、) m

べっじもRevでした

追記・1月6日一部修正しました

第12夜 識

私には何が出来るのだろうか

賢者は自らに問いた

答えを探し旅を続け得た答えは『空虚』

賢者は自らに問いた

そんな答えが欲しかったのかと

賢者は自らに問いた

そんな物のために旅を続けるのかと

賢者は自らに答えた

いつかその答えを得るのが怖くなっていたのだ、と

「つと・・・朝か」

雀やらなんかは知らないがチュンチュン鳴いているって事はどうやら朝になったらしい。

これだけクリアーに聞こえるのだから間違いないだろう・・・実際部屋が穴だらけなわけだし

しかし毎日毎日ご苦労様だ。

飽きもせず毎朝、気持ち良い朝を知らせてくれる功労者に感謝しなきゃいけない気がする。

だがそんな俺は・・・と言うと

「あゝ昨日の事で頭がガンガンして痛いんだが・・・」

あの領収書・・・どうしてくれようか。

つうかうちですらあんな大金見たこと無いってのに一体どうすりゃいいってんだよ。

今は・・・とりあえず落ち着きたい。

「あゝ無駄に喉渴いたわ・・・つうかほんと喉渴いた」

「はい、粗茶ですがどうぞ」

「おっと、わりいな・・・はあ、少し落ちついたわ。ありが

」

なんでコイツがいるんだよ・・・

「おはよう、お兄ちゃん はいっ！」

おはよう、じゃねえよ！

しかもノエルの野郎・・・この期におよんでぬあにがはいっ！だ、ええ！？この野郎め。

明らかに目覚めのキスをプリーズ、みたいなふざけた方向に持っていこうとしてやがる。

こんな・・・こんな・・・

「きゃッ！おっお兄ちゃん・・・朝からそんな積極的な、ダメっだよお！お兄ちゃ
」

ポイツ バタンッ！

「えっ・・・？」

「さつてと、我が城に害を及ぼすうるさい吸血鬼は外に出して片付いたって事で平和な飯にするかな・・・」

もう勘弁ならなかった。平日の、まして早朝からあんな奴に日常の時間を取り上げられてたまるか。ただでさえ問題が山積みなアパートなんだ、これ以上疲れるのはゴメンなのだ。

しかもノエルめ、いきなりアホな事し始めやがって・・・首根っこを掴んで外に放り出したのはどうやら正解のようだ。

予想通りあれから騒ぐ事が無くなった。どうやら少しは反省してくれたらしい・・・と、

思ったばかりなのにこいつは・・・

「お兄さんごめんなさいいいいいい！ノエルね・・・ノエルね・・・
エ`フォエ`フォエ`フォエ`フォエ！！」

正直、すごい恐いです。

なんか爪を立ててドアをガリガリ引っ搔いてわけわからん言葉を発しています。もう一度言つと

すごい恐いです。

「もうワガママ言いませんから！もう変な事言わないからあ、だから・・・だから！」

・・・

「ん~~~~」

どういふ状態だ、と頭をかこうとした時気付く。なんで倒れた俺の上にノエルが羽交い締めみたいにガツチリ組み付いてるんだ・・・

「何をやってんだ・・・お前」

「しばらく、こうさせてね。お兄ちゃん」

「バカ言つなよ、こちとら17年弱生きてんだ。そろそろ世間体つてものを気にし始めてる頃だぞ！こんなんアパートの住人にでも・・・いや姉貴にでも見つかったらあああああ！！」

もう体をわっしやわっしや動かしてなんとか脱出しようとして頑張った。しかしヴァンパイアとしてのノエルの力は強すぎるらしい・・・全くと言っていいほど動けねえ。どうやらもの見事にこの羽交い締め決まってるようだ・・・

つつかそんな事どうでもいいわッ！

「ええい、離れる！俺はまだ姉貴に一生ネタにさせられるような人生になりたくねえんだ！」

「ん~~~~」

断固拒否なようだ。つつかそんなまどろんだ顔じゃ説得力の欠片も無いんですが・・・

「ねえお兄ちゃん、一つだけお願いがあるんだけど・・・」

「あんっ！？この期に及んでお願いだあ？」

何かノエルの様子がいつもより変に見える。いやそんな最近コイツやって来たばっかだしよく分かんないけどさ・・・なんていうか変かな？って思ってみたり

「な、なんだよ。その目・・・」

「あのね・・・」

いつものノエルとは様子が違う、そんな彼女はこう言った。

「この部屋・・・凄く寒いんだけど・・・」

「ああ、そうだよな・・・穴だらけだもんな・・・寒いよな」

とにかく虚しい思いです。

そりゃ確かに寒いからくっつきたくなくなる気もするし離れたくもないのかな・・・コイツにとっては。

我ながら貧乏ってのを恨むよ

「だからお兄ちゃんの・・・上着、貸してくれたらノエル心の底か

ら暖かいなあ〜って……」

「ああ、ほらよ」

ポイとノエルに向かって着てる服を投げ入れる。驚いたのか拍子抜けしたのか、ノエルはポカんとまるで本当にいいの？といった表情で俺を見つめている。

ええい見つめるなめんどくさい！

「あ〜！いくらでも今着てるのやるから早くこの部屋から出てってもらいたいわけだが！つうかなんで眼がウルウルしてるんだ？」

ほんとにノエルの瞳はウルウルしてる。なんて言えばいいのか……葉っぱに浮かんでる雨の滴って言うか、説明するのがやたらとめんどくさいのでそこは妥協だ。

「……大好きいい、お兄ちゃあああああん！！」

そんな悠長な事言ってる場合じゃないだろうしな。こんな状態だし！

「なん……っでそうなるのさ！んどあああああ！！」

また、倒された。無残にも抵抗すら出来ずに……再度羽交い締め
の始まりである。

「は〜な〜れるッ！」

「ん〜」

どうしろと・・・そう思ってる最中、

奴がやってきたッ！

「オワッ!？」

突如、玄関のドアが重苦しい唸りを上げる。俺は粗方予想がついてる・・・というかあいつしかいないだろうが！

それほどの分かりやすいオーラが出まくってるわけで、凄く大変です。

タイミング良すぎだ、うん

「待てっ、ノエル。お願いだ！ここは離れよう・・・な!？お願いだから」

ブンブンと横に顔を振るうノエル。

頑なに拒否・・・か、死んだな俺（社会的な意味で）

そして・・・

扉が開いたわけです。

「雅人君ッ!？あああ！おはようございます・・・って言うような場合じゃないんですよッ！朝からッ女の子の悲鳴がするの!！すごい

悲鳴だから私ビクビクしちゃ・・・」

ああ、そうだ

「って・・・？雅人、君？」

コイツも

「・・・お兄ちゃんッ！！？」コイツッ

杏樹にも

『・・・いつ』

見つかっちゃいけないんだっとなあ・・・

『イヤああああアアアああああああああああアアアああああ
』

フシュー、フシュー、フシュー、

「

「ウイルス濃度18%まで減少、現時点をもって散布を終了する」

何をしてるんだ・・・コイツは。

「ふう・・・これでウイルス汚染の恐怖が無い、平和な世界が訪れるのね・・・お兄ちゃん」

・・・ゴッ！

「何がお兄ちゃん　っだ！馬鹿やろう。どうやらげんこつの一発や二発じゃあ身につかぬえみたいだなあ・・・せつかくの機会だ、レクチャーしてやるよ」

「許してお兄ちゃん！でもこうしないとノエル息できないの！コイツのせいで・・・コイツのせいでッ！」

とりあえず一発げんこつをお見舞いしてやったのだが、全く堪えないようだな・・・とりあえずその被ってるガスマスクを外せ！
ついでに両手に持つてるフ○ブリ○ズも！
いや・・・色々と大人の事情的な問題もあるからな・・・

「とりあえず杏樹ッ！！」

「はっ、はい！」

うん、コイツに言う事はただ一つだな。

「タイミングが・・・悪いです」

とか言っても事実は変わらないわけで・・・端から見ればいざ！禁断の関係、なストーリーが今にも進もうとしている光景だったんだ。いや普通に考えたらだ！

俺、来てる服脱ぐ必要無かったじゃん？ってさ・・・

普通に考えたらそんな考えは思い浮かばないはずで・・・悲しいね、浅はかな考えって・・・

まああの杏樹がその事実気付いてなかったようで・・・なんか叫んだのもテンション的な問題だろう。

ほんと性格が天然な感じで助かったね！

そしてもう一匹！

そのまだフ○ブリ○ズを振りまこうとしてるお前！

ええい、何故杏樹を完全無菌室に閉じこめてる！杏樹も少しは抵抗の意志を見せる！つつかなんでこの部屋に無菌室がある！

・・・落ち着け俺ツツ！

「ハアハア、ハア・・・」

「粗茶ですが・・・」

はい、と・・・

とりあえずなあ、フ○ブリ○ズの原液を湯呑みに入れたところでの国では粗茶どころかそんな飲み物扱いしねえんだよッ!!

てなわけで・・・ちゃぶ台返しを御披露したわけなのだが

「てめえら、いい加減にしろよ・・・」

息も切れ切れで朝から何をしているのかよく分かったものではない。よく分かってるのはノエルがここに来ている事、その意味だ。まあどうせ母さんが住所の情報をオープンにしたんだろうが・・・今はプライバシー保護の時代ですよ母さん。

そんな事したら俺の平穏な時間が・・・もう無い事は知っているのだが・・・

「テレビを、勝手に、つけるなよ、お前ら!」

「どきなさいこの獣女! 毎朝かかさず見てる星座占いが見れないじゃない! 今日こそは・・・今日こそはてんびん座が他を凌駕するのッ!」

「ノエルちゃん・・・てんびん座なの!? 私はね、私はねッ」

ああ、聞いてねーや。

つつかノエル、いくら杏樹が嫌いだからってガスマスク付けたまま杏樹を足蹴にするもんじゃありません。つつかフ○ブリ○ズいい加減に没収するぞオイ。

そして杏樹、そろそろ怒りなさい。そして杏樹、そろそろ怒りなさい。そ感じで無気力に突っ込みを入れたところでそろそろ学校に行く準備でもしなきゃならないわけだ。

「お前ら〜早く学校行く準備しろな」

「ほら、ほら！来たわ！ここまでてんびん座は無し！残り4枠の・

」

・・・どうせ聞いちゃいないし、制服着てとつとと行くか。

「4位・・・みずがめ座、3位・・・乙女座！さあ勝負の時間よ、結果は」

『今朝の占いの時間ですが、速報が入りましたのでこの時間帯を利用してお伝え致します』

「・・・」

「・・・」

ナイスですッ！

思わず腕をグツとしてしまう程の鮮やかなタイミング・・・
惚れ惚れしてしまうね、全く！

「さあ！占いも終わったところで俺らもとっとと行くぞ！は・・・
待て！待てまてマテ、待て！」

「このポンコツ・・・地デジ移行前にスクラップに三回ぐらいして
やるのよ！シクシクシク・・・」

「いや、地デジ移行前はマズい！ソイツはまだうちの唯一の現役工
ースなんだ・・・だから、壊さんといてえ！！」

ほんとやめといて下さい！叩くとかならまだしもソレはやめて！

どこから出したの！その凄い威力のありそうなデカイ斧は！
かなり真っ二つにしそうな・・・それにその赤い染みは確実に『あ
れ』しかないだろうが！そんなもんブン振り回さないでくれ！

「やめて！ノエルちゃん！」

「な、ナイスタツコウ（タツクル）！助かった杏樹・・・ってあぶ

」

飛んだ、飛んだ デカイ斧が鼻先5センチを・・・
そのまま斧は押し入れに突き刺さったよ

むしろ杏樹のタツクルが無かったら何も起こらなかったのではない
かと思うのは・・・俺だけか？

何にせよノエルのさつきまでの危ない動きは収まったわけだ。

まあ終わりよければ全て良し？

「ノエルちゃん・・・駄目だよ。だって、だって・・・」

とりあえずは杏樹に感謝、かな。

「だって・・・『料理鉄人、宮崎達郎の瞬殺！一分間クッキング』
が見れなくなっちゃう・・・」

全っぜんよろしくねえ・・・！！

ヤッパリコイツの頭の中は食い物の事しかないのね、こっちが泣き
たいわけよ。

というわけだ・・・

それポイント、ボタンと・・・

「少し自重しなさい」

一言だけ言って玄関のドアを閉めてやったさ。これで問題は1つ解

決か・・・やっただよ

んで？今度はこっちか・・・

「おーい、そろそろ時間もヤバいし行くぞ？マジめに・・・」

そんなもう一匹の問題、ノエルはと言えば・・・

「ジ、ジョー・・・！じゃなかったノエル」

燃え尽きたよ、おやじさん・・・と言わんばかりにノエルの姿は真っ白に、まるで灰のように直立不動のまま固まって動かなくなっている。

おまけに白目で泡を吹いているとは・・・こいつ曰わく『杏樹ウィルス』ってのはどれだけ危険なものなのか、決してかかりたくはないものだ。

「えー、放っておくのもなんだしな・・・こんなショック状態だしめんどくさいがしゃあないし、よっと」

偉いね俺、こんだけ騒がしくされたのにもかかわらず・・・うう、思い出せば思い出す程に胸が痛んでしょうがないや。

それなのにな、それなのに、コイツらってばほんとにもう・・・

「行こ・・・」

もうどうにでもして、とそう思いながら鞆を抱える。

そうにしかならないのだと、この自らの運命を呪いながら

流れる、雑音。

波のように、砂嵐のように全てを巻き込みそれは語る。

まるで流るる濁流が如く

『先日から番組でお伝えしてきました通り魔による無差別連続殺傷事件ですが先程新たに被害者が出たとの情報が入りました。では現場の北澤さんに繋がりますか 北澤さん？』

『はい、こちら現場の北澤です。現場ですが・・・情報によりますと被害者は市内近辺で暴走行為を繰り返してきた少年グループら合わせて・・・18名だとの事です。そしてその中心核であった男は』

全てを巻き込む濁流が如く

それは一滴の濁りからはじまる

本当に気持ちのいい朝だ。

俺達異端と、そう呼ばれる者が光を浴びるようになってから目の前の世界ってやつは変わっていった。

とても素晴らしくこの世界が今ではキラキラと綺麗に見える。

昔の自分はそう思えたのだろうか

そんな事は今ではどうだっていい事なんだ。

続かない　この幸せな時間がそう長くない事などは俺にも分かっている。

だけど、そんな今ってやつがこれほどに今は幸せなんだ。

俺はこの幸せを守っていきたい・・・願うなら

これから

「おはよう、店長さん」

「おはようございます！朝から頑張ってますね」

いつものように毎朝かけられる挨拶、それを元気に返すのが俺の習慣だ。

ここ、夜でいうネオンに輝く街並みは朝になるところも風景が変わって見える。

「いやだよ、頑張ってるのはアンタだろツ？ホストだってのにしかもアンタは店長だ。なのによくこんな朝から店の前を掃除とは・・・偉いもんだよ」

「そうかもしんないツスね でも一応店長ツスから・・・ね？一番働かなきゃ下のもんがついてこないし！それに・・・」

「それに？」

ほづきを持った手を少し休ませる。

「頑張ってる人間なんていないツスよ。みんないつも・・・生きるために頑張ってるんスから」

ちよっと少しくサかった気もした・・・

でも人はみんなこうやって頑張っていく。この街の、そうじゃない人も皆そうやっていつも一生懸命に生きているのだから

おばちゃんはその事を言った俺を見てフツと笑って言う。

「やっぱりアンタ立派だよ・・・待つてな。うちで穫れた野菜があるんだ！好きだろ？」

「はい・・・いや欲しいと言っならしいて言えば血の滴る肉でも」

「文句言わない！これでも飲んで待つてな」

と言われてポンと放るように投げ渡されたのは凄く真つ赤な・・・トマトジュースだった。

野菜の中では確かにあれが一番近いには近いんだが・・・

「・・・ヒヤハ」

それでもかなり旨かった事には変わらない。本当に素晴らしい世界だ

さて、店の前の掃除も済んだ。

今でも光る銀色のプレートに書かれた『S T i l l』の文字も今夜は一段と輝いて見える事だろう。

今日も忙しくなりそうだ。次は店の中の掃除、おばちゃんから野菜を貰ったらまた気合いを入れ直しだ。

「よ～～っし！」

腕を上に掲げ思いっきり伸ばしてリラックスする。それが終わったから店に向かって回れ右だッ！

さあ、今日も店は忙しくな

「んだよ・・・」

あれ？今聞こえる筈のな声や見える筈のないものが見える気がします。

気にしないで掃除掃除

「シカトか、あ？」

っと思いつきり履いていたであろう靴を俺の頭目掛けて飛ばしてきました。

まあ恐ろしい人っ！

「お・は・よ・う！」

そうですねと俺はこの人に告げる。

おはようございます、と

返ってきたのは笑顔なんかではなく

「笑ってねえでとつとと店に入りな」と

ああ、無条理

しかしそれもまた世の理なり。避けられないのはしょうがな

「怒らりたい？これ以上、なあ？」

すみません行ってきます。
いや、蹴らないでええええ……

「ど、どぞ……」

と、上客に対しての振る舞いとはまた違う極限の緊張の中怒らせない怒らせないよいと気を使う。

とりあえず出したお茶はそれほど値段が高くはないがなかなかの深みで高級な玉露とは異なるまたいい味を出している。

「一応俺のお気に入りのお茶っす。冷めないうちにどぞ……姉さん」

緊張しながらもキリッ、とまた一段と張り詰めた表情でいる姉さんに声をかける。

そんな時は酒だ！そう言う人も中にはいるだろう。

もとよりここはホストクラブだ、あらゆる種類の酒は揃えているつもりではある。そういった万全の準備をし疲れたお客さんにとって癒せる静寂の空間、俺はそれを『STILL』とそう名付けた。単純ではあるけどそれが俺のお客さんに対する気持ちだ。

目の前にいる姉さんだってそれは同じだ。このと……いや美貌で様々な苦勞をしてきただろう。

そんな人にこそこのお茶を飲んで欲しいと思ったのだ。

「
」

まずは一口、チビリと口をつける。

「・・・美味しいでしょう?」

味の違いに気が付いたのか姉さんは一気に飲み干した。

世には作法という言葉があるがそんなものはどうでもいい、どんな形であれただその人が一番美味しく飲めたのであればそれが作り手と飲んだ者にとっての幸せとなるのだから。

「美味、しい・・・な」

「でしょう、変わった味っスよね。言葉じゃ伝えられないと思うけど・・・懐かしいって言うんスかね。なんつうか俺らが忘れていた

」

「どつでもいいからもう一杯」

とても・・・幸せそうで何よりです。

「何泣いてんのさ・・・ったく」

それは一応泣きたくもなったりはします。

しかしそんな気持ちを一蹴してしまうような物を姉さんは突如出してきた。

「・・・ほれ、」

目の前に無造作にバサリとそれは置かれた。
茶封筒、と言えばまさにその通りだが明らかに違つと感じたのは他と比べて目に見えた厚みだった。

「これでびったり合つてると思うけど、よ」

合つ？

何を言つてるか、その時にはすぐには分からなかった。けどいきなり封筒の中身を姉さんが取り出した事で自分の中で『まさか』というほんの水滴のように微量な確率が浮かび上がってきた。

「これで・・・と60万。あと8万と6500円か。これでちょうどだろ？苦勞したぜえ、これだけ集めんの」

一言、頭に浮かんだのは意外という言葉しか無かった。

あの山本幸　姉さんつて言うのは失礼なのだがお金に非常に貪欲で正直な話、昨晚の飲み代も支払われるまで最悪一年位は遠のいてしまつのでは無いのかとすら思っていたのだ。しかも自分のお金ではなく兄貴から巻き上げたお金ではないのかとさえ・・・

「えっ・・・え？これつてまさか」

「何？ようやく分かったのかよ、ハツ！意外に鈍いんだなお前も」

と笑いながら言ってくるのはいつもの姉さんと何ら変化が無いのは果たしていいのか悪いのか・・・

「まだ疑ってる目だな、それ。ちゃんと見るよ、本物だけ？これは」

しかし違ったのはその態度だ。

嘘偽りの一片すら無く目の前にある大量の紙幣がその全てを物語っている。

「確・・・かに68万6500円ちょうどっス」

「たりめえだ、アタシは山本幸だからな。そんなぐらいは出来るんだよ」

しかし、なんとなくくだ。信じていいものか自分でもよく分かったものじゃない。

「なんだよ、その目・・・まだ信じて無い？」

「か・・・かつあげでもしたんスか？」

瞬間、姉さんはカアッと顔を赤めらせて途端に常人とは思えないオラを発して襲いかかってきた。

そして思った。

ああ　俺死んだなあ、って

「うわ・・・今朝は大変な事があるってさ、今日のアタシの運勢最悪だな。シユリア、お前の誕生日は？」

「ふひひーほふひひー」

「何言ってるかわかんないしはつきり言えよ」

無理です、到底無理です。猿ぐつわされて宙に吊されてるんですから無理だと思います。

「あゝほらお前のせいで占い中断になったし」

とか、やれお前のせいでだったり朝から占い中止して入ったいらない速報を消せだの無理難題をしてくるのは俺の日頃の行いが悪いせいでしょうか神様・・・

でも、俺は気付いていたのかもしれない。

その 変化に

「まあそれはいいとしてよ、そろそろ帰るかな。金も無くなったし
よ」

無言で俺は聞いている。

まあ現状としては見たまんまそうなのだが

「あの金、アタシが払ったつてのは雅人には秘密な。・・・って忘れてた！お前下ろすの」

何の優しさも無く無造作に床に落とされた俺はブギユッと情けない声をあげた後に勢いよく立った。

「秘密つて・・・なんでスカ！？ちゃんと払ってくれたんならむしろ」

「なんでだろ・・・な」

彼女は微笑ってそう言うのだ

「なんとなく・・・かな。結局姉っていうアタシはあいつにカッコつきたいのかもな」

「そ、それならッ・・・」

それ以上、何も言えなかった。

彼女の意志、何をしようとしているのか分からないがそれを止める権利など自分には無いとそう理解したから。

「ついでにカッコつきたいお姉さんのお願い、聞いてくれるか？」

それが彼女の願い。

「しばらく・・・雅人の事よろしく頼むわ」

そう言って姉さんは店を出て行った後、店の中は何ともいえない空虚が漂っていた。

残っていたのはくだらない朝のテレビのニュース放送。

彼女は何を言おうとしていたのか

分からない、自分には・・・

ただ、あの目には明確な意志が詰まっていた。

何かを思いつめ、何かを考え、何かを・・・

何かを・・・

何かをしようとしている

思い立った時には俺の足が途端に動き出していた。

彼女は、山本幸は何かをしよう・・・兄貴に迷惑をかけまいと、

あえてこの選択を取ったのだ。

それが最善の選択だと彼女自身知っていたのだから。

今思えばこれは　その為の意味も込めたお金だったのかもかもしれない

おそらく彼女は最悪ここに戻っては来れないのかもしれない、俺の本能はそう告げていた。

そうすると手と足に力は入り全力の限りを尽くそう、と体はたぎりを遂げようとして

そして消えた

瞳に見えたのは赤と青の光が織り成すけたたましいサイレン、それだけがただ轟いた。
窓の外にはまだ朝だと言うのに騒がしいほどの灯りが飛び交い、アリのように無数に人間が俺を押さえようと飛び込んできた。

何故

何故、こんな事に

筋肉が軋む、出来るならこの場を抜け出し姉さんを追い掛ける為に今なら何だってる。
例えここが血の海になろうと

何があっても行かねばならなかった

しかし目の前の道は閉じてしまった

もし　あの時気付いていたのならこうはならなかっただろう

けど・・・

ただ、それは閉じていった

それは流れる、雑音。

波のように、砂嵐のように全てを巻き込みそれは語る。
まるで流るる濁流が如く　この身を飲み込む

『先日から番組でお伝えしてきました通り魔による無差別連続殺傷事件ですが先程新たに被害者が出たとの情報が入りました。では現場の北澤さんに繋がりますか　北澤さん？』

『はい、こちら現場の北澤です。現場ですが・・・情報によりますと被害者は市内近辺で暴走行為を繰り返してきた少年グループら合わせて・・・18名だとの事です。そしてその中心核であった男は』

全てを巻き込む濁流が如く

『ホストクラブ・STILLの店員、源氏名、『俊慈』の栄坂俊司さん26歳だそうです。なお被害者の体は半身を切断されておりそのいずれも切断面が高温で焼け焦げた跡があるという事を視野にいれ捜査を』

それは一滴の濁りから始まる

第12夜 識 (後書き)

ふう…やっとの事で更新)・(

これでも更新までに2ヶ月近くなんだよ)。(

道は長い。焦らずに頑張っていく

それが今の目標です) * ^ - ^ (

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5157b/>

mid Knight tale 気高き誇りその魂

2010年10月24日13時54分発行